

オーバーロードと豚の 蛇

はくまい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作：丸山くがね先生の、オーバーロードの二次創作です。

※オリキヤラ至高の四十一人をぶち込んだ何番煎じかもわからない作品です。

※捏造している部分が多くあります。原作には存在しないシーンなども登場します。

※ものすごく見切り発車です。

※途中で内容を書きかえることがあります。

※「ほも」の内容を取り扱っていません。

08/01 現在浮気中。エタらせるつもりはありませんが、執筆はのろのろしていません。

目次

豚の蛇は考えない	1
豚の蛇は考えない その二	9
豚の蛇は演技する	16
悪魔は忠誠を誓う	24
神はいない	31
豚の蛇の苦惱	39
豚の蛇の歯牙がかかる	46
悪魔が歯牙にかかる	53
豚の蛇の罪悪感	62
走れ豚	75
走れ豚 その二	88
豚の蛇は不機嫌	98

幕間前篇	107
幕間後篇	122
豚界道中膝栗毛	129
豚界道中膝栗毛 その二	138
豚界道中膝栗毛 その三	154
密命	168
豚の蛇は慰める	182
「×××」	196
××× そうして天秤は傾いた	211
雨降つて地固まる	227
幕間前篇	248
幕間中篇	257
幕間後篇	272

激録！ 至高の御方、密着二十四時！（午

前篇）
281

激録！ 至高の御方、密着二十四時！（午

後篇）
294

豚の蛇は無関心
306

豚の蛇は震える
316

豚の蛇の退屈な日
328

豚の蛇の退屈な日 その二
342

ある薬師の語る英雄譚
351

豚の蛇は考えない

一人、また一人とログインしなくなるギルドのメンバーを見て、寂しくないと言え
嘘になる。

けれども、このゲームが過疎化すればするほど、自分の趣味に没頭できるようになっ
たことはしかたないだろう。

人が少なくなったのは、なにもアインズ・ウール・ゴウンだけではない。どのギルド
も、全盛期のような勢いは持ち合わせていないのだ。だからこそ、たとえ一人であろう
と、おれは奴らの足元から切り崩していくことを決めた。

すべてはそう、世界級アイテムを収集するために！

∴

「と、思っていた時期がわたしにもありました」

「お久しぶりです、シュヴァインさん。ログを見たら何度もログインされてるのに、全然
会えなくて寂しかったですよ」

「モモンガさんおひさです。いやあ、仕事が夜勤ばかりで自由な時間が昼しかなくてで
すねえ、皆さんが汗水流して働いている間に遊んでいた豚とおれのことです」

今日と明日は「^{ユグドラシル}ここ」のために有給取ったんですよう！ と報告すれば、^{オーバーロード}死の支配者の

プレイヤーことモモンガさんの顔の横に笑顔のアイコンが表示される。いやあ、いつも思うがこんな敵めしい骸骨の顔に笑顔のアイコンとかギャップ萌えだわ。やはりこれはタブラさんと決着をつけねばならなかった。

「皆さんいらつしやいますかね、モモンガさん。特にタブラさんが今のおれの心境としては来てほしいんですけれども」

「どうでしょう、一応全員にメールは送りましたが、…皆さん忙しそうですから」

「あちゃー…。まあサービス終了まで一時間はありますし、気長に待ってみましょうよ」
「そうですね」

モモンガさんを慰めるために声をかけたけれど、飽きたゲームの終了日に集まるほうが珍しいだろう。それを言わないのはやはり、目の前のモモンガさんが他のギルドメンバーが来てくれることを信じているからだ。

なんて誠実な人だろうか。そして悪く言ってしまうと、とても、重いです…。

「さて、と。まだ一時間もあることですし」

「シユヴァインさんは外に出られるんですか？」

「ええ。弱小ギルドなら三つくらい落とせるので、行ってきます」

「好きですねえ。弱小ギルドじゃ、レアなアイテムなんてないでしょう？」

「いやいや、最近は過疎化してますから、そうでもないですよ。前なんて平均レベルが七十程度のところが世界級アイテムを二つも保有してたんですから」

「それはすごいですね」

「そうなんです！ これだから物集めはやめられないです！」

「だいぶ前にペロロンチーノさんが言っていましたよ。シュヴァインさんほど収集癖を拗らせてる人はいないって」

「強欲な豚と呼んでくれてもいいのよ？」

「アバターが石化の蛇なのに豚とはなんとというほこたて。他のギルドメンバーが来たら
 〈伝言〉でお知らせしますね」

「ぶひー」

蛇なのに豚なのはな、しょうがないな。だって名前がドイツ語で「豚」だもの。意味はたいしたものじゃないのに日本人にとって非常にかつこよく聞こえるドイツ語の単語の一つだからな。意味は豚だけどな！

このハンドルネームにした理由？ ギャップ目当てかな。がっかりするの意味で。

×××

サービス停止日だからといって浮かれていたな？ ヴァカめ！ たとえサービスが停止する十分前だろうがギルド武器を狙って襲いかかる、それがおれだ！

弱小ギルドは阿鼻叫喚。そうしてスキルで奪い取ったそこそこレアなアイテムデータの一覧を眺めてご満悦なおれ。さすがに世界級アイテムはなかったけれども、物を集めるという目的のうえでは自分の持っているものとダブリが少なかったので上々である。

盗賊という職業は、まさに「ころしてでもうばいとる」を体現した素晴らしいスキルが多い。自分の性格を考えて選択したが、このゲームがここまで楽しめるとは思わなかった。

「蛇に盗賊？ それで豚とか救いようがねえな！」と笑ったペロロンチーノは絶対に許さないけどな。上位職のアサシンが火を噴くぜ。

そうこうしている間に、モモンガさんから^{メッセージ}伝言が届く。

「へろへろさんがログインしました」

「へろへろさんがログアウトしました。お仕事でお疲れのようで、今日は最後まで残っていないようです」

「俺は、玉座の間で最後を迎えようと思います。申し訳ないですけど最後の最後ですから、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンも持っていきたいんですけど、いいで

しようか？」

モモンガさん、くっそおもたいです…。

「お、へろへろさんおひさですー」

「おつですー、また会いましょう！」

とへろへろさんに^{メツセージ}へ伝言を送る一方で、

「ぎるめんきたー！」

「ありや、残念」

「間に合うかどうかわかりませんが、今からそっち行きますね」

「それはモモンガさんの武器なんですから、最後までいどこに持ち出したって誰もなにも言いませんよう！」

とモモンガさんにフォローを入れるおれ、なんてできた豚…！ 種族は^{メドゥーサ}石化の蛇だけ
どな！

×××

「でもこれ無理じゃない？ あと一分二十秒で今日が終わるおつおつお」

独り言が悲しいとか言ってる場合じゃない。

最後の記念に弱小ギルドを狩れるだけ狩ってやるぜ、と決めて持ち物のストックを全部空けてナザリック地下大墳墓から出てきたのだからどうしようもない。どういうことかかって？

リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンもお部屋に置いてきたってことだよ（はあと）はい、しんだしんだ。

しかたないじゃん！ 身につけるものを減らせば持てるアイテムが増えるんだもん！

そうして慌てて駆け抜けております第七階層、溶岩。

蛇系の種族の特徴として暑さに、そして熱さに弱いので、視界の端のヒットポイントがケージが地味に削れてきております。いや、常時発動能力パッシブスキルに秒2%体力回復があるから、本当に微々たるものですけれども。

それだけではなく、灼熱地帯では蛇系種族はことごとく能力値が下がるから厄介だ。なにこの移動速度。アサシンぞ？ おれ常時発動能力パッシブスキルに移動速度上昇Vを備えたアサシンぞ？

普段なら寒冷地や灼熱地が負荷してくる状態異常を無効化するアクセサリを身につけてお外に出てましたけどね。そうです、手荷物増やすために全部取りました。

自分の予測能力の低さを後悔しつつ愚鈍ながらも走り続けていると、突如として広大

な世界を映す視界が傾いた。どうやら走る姿勢を前傾にしすぎたのがだめだったらしい。

こういうリアルな作り込みいらぬです。

残り時間は二秒。どうあがいても間に合わない。

「モモンガさん間に合わなくてごめん、今日までありがとう」とへ伝言^{メッセージ}を送る暇もない。

ただ心の中で思いながら、近づいてくる灼熱の地面を見つめていた。

ユグドラシル^{ゲム}のサービスが終わる。

…初めてここまでやり込んだDMMORPGの最後の視界が床ってお前。

「シユヴァイン様！」

身体に衝撃、というか、身体全体を使つて転びかけたのを保護された。誰に？ 知ら

ん。視界は灼熱の地面と似たような朱色で染まっている。

そうして考えている間もなく支えられた身体を引き剥がされる。ものすごい速度だが、手荒さは全く感じなかった。

「お怪我は!?!」

「え」

誰お前、とは言えない。めっちゃ心配していますと言いたげな表情でおれを見上げて来た顔は、ギルドの友人であったウルベルトが自分の中の「悪」という定義を徹底的に

詰め込んだNPCそのものだったからだ。

NPC。つまりノンプレイヤーキャラクター。

「ん？」

豚の蛇は考えない その二

へいボーイ冷静になろうぜ、まだ慌てるような時間じゃない。

頭の中で「ははは」と笑ってサムズアップしているおっさんを首を左右に振って振り払う。誰だこのおっさん。

そんなおれの様子を見てなにを思ったのか「どこかお怪我が……！」と見ているほうが可哀想になってくる表情をしたNPCにもう一度首を振った。ついでに「大丈夫、少し眩暈しただけ」と告げるが、頭が混乱し過ぎて片言になっている。

現状を整理しよう。

目の前のNPC、名前は確か「デミウルゴス」だ。それが転びそうになったおれを支えて、あまつさえ怪我はないかと心配してきている。つまりどういうことだつてばよ。

状況を把握するには情報が足りないのでわかりません。以上、現状の整理終わり。

悶々と考えていると、おれよりも頭一つ小さいデミウルゴスが膝を折つてその場に畏まった。なにごとかとその頭を見つめていると「至高の御方には差し出がましいかもしれませんが」と付け加えて話し始めた。すげえなユグドラシル、いつからこんな機能がついたんだ。それともデミウルゴスを作った技術者のドツキリかな？ ははは、これ

はまいったな驚かされちゃったよ。

「第七階層の焦熱は、今のシユヴァイン様のお身体にはよろしくないかと。ここはどうか一度、第九階層へ赴いて御身を休ませていただければと愚考致します」

おいこいつのAIを組んだの誰だ。

人の身を考慮した提案をするデミウルゴスの言葉に「やだ…いけめん…」と戦慄していたら、なんだか皮膚がぴりぴりしていることに気がついた。日焼けのような痛みである。

「おや？」と自分の剥き出しな二の腕に視線をやったが、アバターの設定通り蛇の鱗模様**が**びつしり並んでいるだけだ。

不快というか、肌違和感を与え続けてくる刺激に首を傾げる。ちよつとかゆい。おれとしてはその程度の痛みだったのだが、そんなおれの様子にデミウルゴスはなにを思ったか突然立ち上がった腕を掴んだ。

「え」

「許されぬこととは存じております！ ですがどうかこれ以上、御身を傷つけるこの場に留まり続けなくてください！」

「え」

腰を抱えられて、持ち上げられて、視界に映るのはデミウルゴスの背中と蝙蝠のよう

な羽だけ。

おっとこれはいったいどうなっているんだ。

×××

サラマンダーより、ずっとはやい！

そう言わざるを得ないようなものすごい速度で第七階層から運搬されて第八階層をチートかという勢いでショートカットし、そのまま第九階層まで運ばれてきた子豚おれちゃんれは、デミウルゴスに抱えられたままの状態とある部屋に連れ込まれた。

え、もしかして調理場？ おれは美味しく料理されるの？ という不安は一瞬で終わる。

それはもう丁寧に椅子のうえに降ろされて、相変わらず悲痛な顔をしたデミウルゴスは部屋の中にいた人物を怒鳴るように呼んだ。

「ペストーニャ・S・ワンコ！ すぐにシユヴァイン様の傷を治癒するんだ！」

わんこ！ ペストーニャ・S・ワンコじゃないか！ ギルドメンバー全員が愛したナザリック最萌大賞のメイド長のわんこまでしゃべって動くなんてここは天国か！ 何かしたデミウルゴス！

それにしてもおれのアバターの身長お前よりでかいんだけど、よく抱えて飛んで走って運んでここまで来れたな。パラメータも非力なほうだろうに、悪魔つてすげえ。

デミウルゴスの秘められし腕力に感心している側らで「シユヴァイン様！」というわんこの悲鳴とともにメイド長の超強力治癒魔法が炸裂する。肌から感じる日焼けのような痛みは一瞬でなくなった。メイド長つてすげえ。

おおおおお、と内心で感激しつつ二の腕を色んな角度から眺めていると、二者の不安げな視線に気づいた。あつすみませんもう大丈夫です。

二の腕をさすりながらうなずくと、やつと二人の顔に安堵の表情が戻った。

しかし！ おれの安息は！ まだ！ 遠かったようだッ！

「シユヴァイン様、先程の無礼、許されるものとは思っておりません」

「う、うむ？」

いきなりデミウルゴスが膝をついて頭を下げた。

君のその姿勢はデフォルトなの？ AIに組み込まれているの？ なんて言葉も言えず、先程と同じようにデミウルゴスの頭を見下ろす。

ええー：なんか今のデミウルゴスを見てると首の後ろがぞわぞわするんだけどなんなの？ アサシンの常時^{パッシブ}発動能力の危険感知が発動してるの？ 即死級の罠が発動するの？

「至高の御方に無断で触れ、あまつさえ意思も聞かずに別の場所へお連れするとは、この命で償えるものとは思っておりません。ですが私にそれ以上に捧げられるものがないのも事実。どうか私の死を捧げることをお許しください」

あつ不穩。

ひやりと冷たいものが背筋を伝うのと、デミウルゴスが自分の首にかけた手の爪が、長く鋭く伸びるのはほぼ同時だった。

「やめろ」

咄嗟にデミウルゴスの手首を掴むと、爪が少し首に食い込んだところで彼の手は止まった。危ねえええ……！ しかしこの危機はまだ第一段階に過ぎない。見たところこいつは死ぬ気満々のご様子である。どうにか言いくるめてこの自殺発言をなかったことにせねば……！

「デミウルゴス、お前の死を誰が許可した」

「……っしかし、至高の御方に無断で触れた私に捧げられるものなど、命しかないのです……！」

やだおれめつちや偉そう。何様だ。いやしかし効果はあるっぽいぞ。がんばれ学生時代に演劇部だった根性を見せろ！ 裏方しかやったことないけど……！

わざとらしく溜め息を吐くとデミウルゴスと、なぜか隣にいるわんこの肩が震えた。

なんでや。

「至高の、とは知らん。お前がなにを崇拜しているかも知らん。お前がわたしに触れたことなどは蚊ほども意識していない。しかしな、わたしをお前の失態の理由にするな」

「…」

できるだけ尊大な物言いで「自殺するなよ」と伝えると、デミウルゴスは深く項垂れた。

別になにも怒っていないんですけど…。弱点地帯から救出していただきましたし、おれは全然怒ってないよ？ むしろ感謝してるよ？

あー、でもこいつほつたらかしにしたら知らないところで自殺しそうだ。だいたいこいつのキャラがわかってきたぞ。

適当に理由をつけて無断で自害しないように保険をかけておいたほうが良いだろう。だって友人が作ったNPCが自分のせいで自殺するとか寝覚め悪すぎるし…。

「お前がこれが無礼だったと感じているならば、わたしから後日お前に罰を与えよう。自ら死に逃げることはけして許さない。いいかデミウルゴス、お前が死ぬのは、わたしが死ぬと命じたときだけだ。お前の愚考で至高の我が作った命を捨てることはあつてはならない」

「…」

「いいか」

「はッ、しかと…しかと承りました…！」

よっしや任務成功したようです！ 言っていることは矛盾だらけですが、どうやらうまくごまかされてくれたようです。自分でも正直なに言ってるかわからなかったけど命が一つ助かったんだから結果オーライでしょう！

どうしてかものすごく尊いものを見るような視線をデミウルゴスやメイド長、部屋にいたメイドたちから感じるけれども、おれはこの場を切り抜けるのに酷く疲れてしまったので、やがて考えるのをやめた…。

豚の蛇は演技する

とにかく今は装備が欲しかった。

これまでの経過から、ものすごく敬愛されているのはわかったけれども、それでも自ら考えて行動しているNPCに囲まれての裸装備はきつい。

…そうです。弱小ギルド強襲用にレア装備は武器しか身につけていませんです。

周りのメイドや回復主体のわんこはまだしも、デミウルゴスなんて対プレイヤー戦を想定して作られたキャラクターだからね。非力なのはあくまでも肉体的な意味であって、紙つぺら同然の装備で第十位階魔法なんて発動されたら普通に吹き飛ばわ。

豚君さつき眩暈したしい、ちよつと調子悪いからお部屋戻るねえ、的なことをそれとなく言おうとしたとき、ふと脳内でコールが響いてきた。ユグドラシルをプレイしたことがある人間ならば基本中の基本である機能〈伝言^{メッセージ}〉の呼び出し音である。

『繋がった…！』

「あ、モモンガさ、…んん、モモンガ殿か」

手のひらを耳に当てて応答する。

名前を呼んだので、話し相手が言わずともわかったんだろう。むずがゆい空気に包ま

れていた部屋が一気に静まり返った。うわ気まずい。おれに構わずお話ししていいのよ。

『えっなんですかその気取った話し方』

「わたしにもいろいろあるのだよ、盟友として深くは追求しないでくれたまえ」

『…もしかして、近くに誰かいますか？ …例えばNPCとか』

「…ご明察と言っておこう、非常事態だ」

『あちゃー…。わたしのところにも、アルベドとセバス、プレアデスがいたんですけど、なんとか人払いはできたんですよ。そちらのほうは難しそうですか？』

「難儀ではないだろうが、少し調子が悪くてな。部屋に戻るほうを優先したい」

『えっ、身体の調子が悪いんですか!?!』

「モモンガ殿、わたしは今この状況で裸一貫で外に出る趣味は持ち合わせていないよ」

『…また裸装備でギルド狩りに行った帰りだったんですね？』

「根こそぎ奪うという行為がわたしの至上の喜びだ。そのためならば、わたしはこの身で火に飛び込む行為すら恐ろしくはないよ」

虎穴に入らずんば虎児を得ずって言うしね。

そのまま「偉そう」というオブラートに包まれたモモンガ殿○との会話は続く。

内容は「NPC動いてるんだけどどうなってるんすか！ まじばねえっす！」「わかんね

えけど第六階層に階層守護者集めたんで話聞くつもりっす！」というまるで先の見えないものだけれども。

ともかくにも階層守護者が集まるなら、裸装備のままですこへ行くという行為はそれこそ自殺行為だろう。

「二度身なりを整えてからそちらへ足を運ぶとしよう。まあ、間に合わなければ間に合わないで許してくれたまえ、盟友よ」

『それでわたしに責任を押しつけて脱走したら恨みますからね』

「おお、怖い怖い。ギルド長のお怒りに触れぬよう気をつけて行動させてもらうよ」

そうして通話が切れた。

…やだあああ！ お家帰るううう！ とその場に突つ伏すわけにもいかない。だつてこの部屋にいる人物全ての視線がこちらに集まっているんだもの。

「デミウルゴス、第七階層に戻るといい。もうすぐモモンガ殿の使命を受けたアルベドがお前の元を訪れてくるはずだ。わたしはお前の進言通り、一度自室に戻るとしよう」

「はッ、出過ぎた真似を致しました」

「それには及ばないさ。わたしの身を案じてくれたのだろうか？ 礼を言おう」

「そんな…滅相ありません。至高の御方の御身を案じるのはナザリツクの者として当然のことです」

「いいや、お前がここまで連れてきてくれたおかげで楽になった。だからこそ、この言葉
を真つ直ぐに受け取ってくれ。…ありがとう」

「…ツ、は、はい！」

この「礼を言おう」という言葉があるが、個人的な意見としては全く礼を言っていない気がするんだなあ。最後まで言えよ、おら！　ありがとうございますだろうが！　的な気持ちになるんだが今はそんなことを考えている暇はない。

なんだか頭を下げたままぶるぶるしているデミウルゴスには悪いが迅速に装備を整えねば我が身が危ないのである。

けれども部屋から出ようとすれば立ち直ったデミウルゴスが当然のように戸を引いて開けてくれるし、メイドさんたちが当然のように付き従おうとするので、そろそろ申し訳なき過ぎて胃がぎすぎすしてきた。どうするべきなのか。

「あ、いいのよ？　おれ一人でお部屋まで帰れるから大丈夫よ？　裸装備で溶岩地帯に突入するとか自己管理できてなくてごめんね？　メイドさんも仕事中断させてごめんね？」ということを偉そうに伝えれば「とんでもございません」と異口同音の返事が返ってくる。うわ…つら…。

これ以上はなにも言うまいとメイドさん二人を従えて、デミウルゴスの礼を受けて、引きつりそうになる顔をなんとか抑えながらおれは部屋まで戻ることにしたのであつ

たたた。

×××

石化メドゥーサの蛇の最大の特徴とも言える蛇の髪、一説によるとこいつは全て毒蛇らしい。

まあ有毒かどうかはさておき、間違いなく今のおれは自分のアバターであるシユヴァインそのものようだ。

無造作に束ねた蛇の髪に、瞳孔が縦に割れた目。肌はびつしりと蛇の鱗模様メドゥーサに覆われていて、攻撃型ほどではないけれどもそこそこにたくましい身体が鏡に映っている。自分で言うのもなんなのだが、百戦錬磨の暗殺者のような雰囲気メドゥーサを醸し出している。

…ある意味間違っではないけれども。

話を戻そう。

自分の持つ装備の中でも最も強いものを一式身につけると、やっと一息ついた心地がした。その見た目に派手さはないけれど、職業がアサシンと盗賊を重点に置いて活動していたので、そこに問題はないだろう。大事なのは能力だ。頭部、上下、両腕、足を保護する防具は、防御と魔防に対する能力値をアイテムデータで極振りしたものである。余談だが、おれは状態異常に対する備えは、課金装備できる指輪系レアアクセサリで

補っているので大抵の状態異常は受け付けられないけれど、本来石化の蛇メドゥーサというのは状態異常に弱い種族だったりする。

けれども今の耐久たるものや自分でも惚れ惚れするもので、同じギルドのメンバーだったワールドチャンピオンのたち・みーさんの攻撃をもつて被ダメージを1に抑え込んだ素晴らしいものだ。

そう、おれこそ、超耐久型のアサシンである。

この耐久をもつてこれまでの他ギルドへの殴り込みを可能にしていたのだ。

…まあかなりの弱小ギルドであればレベル差でダメージを受けないとわかっていたので裸装備で出かけた結果、今回のようなことが起きたのだけれど。やっぱり装備って大事だね。

…

と思っていた時期がわたしにもありました。

「ああ、やつとお出ましのようだな。そのまま帰ったかと思つたぞ、シユヴァインさん」
「まあそう言ってくれるな、モモンガ殿。こちらにも準備というものがあるのだ」

裸装備から改めて装備したリング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンで第六階層まで来ると、アルベドを筆頭にした五人の階層守護者がおつかかない骸骨へ跪いているところだった。おつかない骸骨がモモンガさんだということは言うまでもない。笑顔アイコ

ンは？ ギャップ萌えの集大成はどこにいったの？

すでに近寄りがない雰囲気は漂っており、ここはひとまず退散しようとして一歩下がったところで逃がすまいとばかりに声をかけられた。

舌打ちしたい気持ちを抑えてモモンガさんの隣に立てば、階層守護者たちの頭が更に低くなる。

白い服やらお高そうなドレスやらが闘技場の床についているのを見て申し訳なくなる。クリーニングにかかる費用についてはもう考えたくもない。

肺から競り上がってくる溜め息を無理矢理飲み込んだところで、闘技場のはしから誰かが走ってくるのが見えた。

「…遅くなりました」

「いや、構わん。それより周辺の状況を聞かせてくれないか？」

見たことのあるNPCだ。限りなく執事っぽい。しかしどちらかと言うとナザリック地下大墳墓の内部に配置されていたNPCなので、外にばかり出たおれには名前が少しばかりおぼろげである。ここは涼しい顔をしてモモンガさんに進行を任せるべきだろう。

まあここまで異常なことが起きているのだから、ちよつとやそつとじゃ驚かないぞ。

「非常事態だ。これは当然、各階層の守護者が知るべき情報だ」

「了解いたしました。まず周囲一キロですが…、草原です」
な、なんだってー！

悪魔は忠誠を誓う

それは、恐怖であつた。

悪魔であるデミウルゴスにとって、恐怖とは与えるものであり、与えられるものではない。

そんな彼に絶望的なまでの恐怖を叩きつけたのは、灼熱の地面へとゆっくり傾いていく一人の男の姿だつた。ナザリック地下大墳墓の者であれば誰もがその人物を知っているだろう。至高の四十一人。そこへ名前を連ねるなによりも尊い御方なのだから。

そんな人物が倒れていく姿は、デミウルゴスにとってなによりも恐ろしいものであり、なによりも許しがたい光景であるのは言うまでもなかつた。

「シユヴァイン様！」

考えるよりも先に悲鳴が喉を走り、身体が動いた。

許可もなく、…例え許可が出たとしても、このような粗雑な触れかたは死に値するだろう。それでも自らの命を失うことよりも、至高の御方の身体が傷つくことのほうがデミウルゴスには耐え難いことであつた。それはナザリック全ての者共通の認識と言つてもいいだろう。

すぐさま怪我はないかと確認をするも、仕えるべき人物の反応は薄い。まさか遅かったのか。どこかに酷く傷を負ったのか。

至高の御方に見せるにはあまりにも無様な姿であったが、自分の声が震えるのも抑えられずに怪我の有無をもう一度問えば、微かな声であったが「眩暈がしただけ」と返答があつた。

怪我がないならば、それよりも喜ばしいことはない。

けれども眩暈を起こすほど身体の調子が優れていないのならば、早急にその身を休めるべきだ。

至高の御方が体調不良一つで外部の敵対者に後れを取るとは微塵も思っていないが、それをそのままにしておいていいはずもない。

これが至高の御方でなく、ましてやナザリツクの者でなかったならば、デミウルゴスは嬉々としてその状態を引き伸ばすだろう。けして相手を休ませることなく悲鳴をあげさせて、やがて力尽きるまでいたぶる行為を心から楽しんだことだろう。

けれども、今デミウルゴスの目の前に立っているのは、仕えるべき主人であり、創造主であり、なにものにも代え難い至高の四十一人のうちの一人なのだ。その人物の体調が優れないというのならば、なにを優先してでもまずは休息していただける環境を整えるべきだ。

ただでさえ石化メドゥーサーの蛇という種族は状態異常に弱いということを知っている。

ナザリック地下大墳墓を作り上げたという偉業をもってしても、シユヴァインという人物がどれほど優れている人物だと理解していても、生者には「生まれつき」という避けては通れない道があるのだ。

「至高の御方には差し出がましいかもしれませんが」

至高の御方がナザリック地下大墳墓のどこへ行こうとも、それは自分のような者が意見するのはとてつもない無礼にあたるだろう。

しかし先程支えたときに触れたシユヴァインの肌は、第七階層の業火に当てられて、蛇系の種族としてはあつてはならないほど火照っていた。

たとえシユヴァインが灼熱地による弊害を緩和することのできる魔法道具を身につけていると知っていても、体調が優れないのならば、ここは石化メドゥーサーの蛇にとつて最悪の環境であることは間違いないのだ。

「第七階層の焦熱は、今のシユヴァイン様のお身体にはよろしくないかと。ここはどうか一度、第九階層へ赴いて御身を休ませていただければと愚行致します」

ここでシユヴァインが否と答えれば、デミウルゴスはどうすることもできない。

御身を休めていただくには、焦燥している自分の胸中をいったいどう伝えればいいのか

か。

そうして主人の返答を聞こうと顔をあげたところで、衝撃と、とてつもない絶望が深く心の臓に突き刺さった。

自らの二の腕をさするシュヴァインの指に、耐熱魔法のかかった指輪がない。

それはつまり、今この瞬間、ほんの一秒が過ぎ去るたびに、第七階層の灼熱は至高の御方の身体を蝕み続けているということだ。

シュヴァインが自ら触れた二の腕に薄く傷が残った光景を見て、デミウルゴスは弾かれたように立ち上がり、至高の存在の腕を取った。

この無礼な振る舞いは万死に値する行為だ。

デミウルゴスは自分が許すべき存在ではないものに変わったのを自覚し、今後至高の存在に尽くすことが許されないことに絶望した。だがそれよりも、これ以上尊い存在に傷がつくことがなによりも我慢できなかつた。

×××

「シュヴァイン様、先程の無礼、許されるものとは思っておりません」

パストーニャ・S・ワンコの元へシュヴァインを連れ、傷が癒えたことを確認したと

ところで、デミウルゴスはすぐさまその場に跪いた。

失望されただろうか。仕えるべきではない、できそこないの存在として認識されただろうか。

なによりも尊い至高の存在が一人、また一人と姿を隠す悲しみを知っている。しかし己の真正面から、不要だと宣言される絶望を味わったのは初めての経験だった。

死刑宣告をされる囚人のような気分でデミウルゴスはシュヴァインに頭を垂れる。

どちらにせよ、先程のような無礼な振る舞いを行った者は生き残るに相応しくないので。もしこれが他者の立場であるならば、デミウルゴスはいたぶる時間すらも与えずに相手を亡き者に行っている自信がある。それほどまでに自分が行ったことは罪深いことだ。

「至高の御方に無断で触れ、あまつさえ意思も聞かずに別の場所へお連れするとはこの命で償えるものとは思っておりません。ですが私にそれ以上に捧げられるものがないのも事実。どうか私の死を捧げることをお許しく下さい」

だからこそ至高の手を汚すまでもなく自害するべきである。

デミウルゴスは腕に魔力を込めて爪を伸ばし、自らの首を掻き切ろうと――、
「やめろ」

腕は止まった。至高の言葉を聞き漏らすほど、デミウルゴスの耳は愚鈍ではないから

だ。

「デミウルゴス、お前の死を誰が許可した」

「…っしかし、至高の御方に無断で触れた私に捧げられるものなど、命しかないのです…！」

これは許されざる罪だ。死してなお払拭できるとは思えないほどの大罪である。

椅子に座したシユヴァインの咎めるような視線を受けて、死よりも強い恐怖が身を焼いた。デミウルゴスがこれまでもてあそび、死へと追い詰めてきた人間だろうとここまでの絶望は味わったことがないだろう。

「至高の、とは知らん。お前がなにを崇拜しているかも知らん。お前がわたしに触れたことなど蚊ほども意識していない。しかしな、わたしをお前の失態の理由にするな」

「…」

つまりこれは、無礼を嘆いて自害することすら許されていない。無礼を働いたことを懺悔する機会すら与えられないということか。即ち、自分が創造された必要性すら皆無だ。

更に深い絶望がデミウルゴスの身体を飲み込もうとしたとき、足を組み直したシユヴァインが再び声をかけた。

「お前がこれが無礼だったと感じているならば、わたしから後日お前に罰を与えよう。

自ら死に逃げることはけして許さない。いいかデミウルゴス、お前が死ぬのは、わたしが死ぬと命じたときだけだ。お前の愚行で至高の我らが作った命を捨てることはあつてはならない」

「……」

それは神の慈愛にも勝る言葉であつた。

デミウルゴスの無礼な振る舞いを受けてなお、シユヴァインは今後もしやめることを許すと言つたのだ。驚愕に目を見張るデミウルゴスの視線など気にした様子もなく、シユヴァインはさも当然のように「いいか」と返答を促す。

至高の御方の命令とあれば、デミウルゴスの死の決意など塵芥に等しい。

「はッ、しかと……しかと承りました……」

なんと寛大な御方なのか。

そう感じたのはデミウルゴスだけでなく、この部屋にいるナザリツクの者全ての総意だつた。

慈悲深い至高の御方に対して、この場にいるものは、改めて忠誠を誓つた。

神はいない

辺り一面が草原か、そうかそうか。はい、あとモモンガさんよろしくね。

考えることは得意ではない。

PvPなどの戦闘も、おれは装備の耐久と武器の性能にものを言わせてごり押しするタイプだったので、戦略やら分析やらという言葉とはまるで無縁の思考をしている。考えたところで「火タイプは水タイプに弱いよね」程度のお粗末なものだ。

そんなわけでこの異常事態に自分の頭が役に立つだなんて露ほども思えないので、大人しくしていることに決めた。

他人の意見を尊重するギルド長はおれの顔をちらりと見てから、階層守護者に指示を送る。…そして指示を終えるとまたちらりとおれを見る。いやいいよ、モモンガさんが他人の意見尊重派なのは知ってるけどそこまでおれの意志を尊重してくれようとしなくていいよ。

大丈夫ですう、モモンガさんがなにを考えてるのか正直さっぱりわからないですけど適当に司会進行してくれたらおれ的には全然問題ないですう。

そう伝えるつもりで浅くうなずいてみせると、モモンガさんも一つうなずいて顎関節

だけで動く口を開いた。

「各階層守護者に聞いておきたいことがある。皆にとつて、我々とは一体どのような人物だ？」

ちよつと待てなにもを受信してそんな質問を放り投げた。

モモンガさんて実は自殺願望でもあるの？ これで「貴様はわたしの踏み台だアツ！」みたいな感じで襲いかかられたら、可哀想な子豚君はぶひぶひ鳴いて許しを乞うしかないというのに。

そうならないための耐久装備ですけれども。

いやあ国家転覆を企てるテロリストだろうが下剋上を狙う武士だろうが、上司にこんな質問をされりやおおべつか使わざるをえないと思うのはおれだけだろうか。

まあ、そんな気持ちは守護者たちの返答を聞いた瞬間消し飛ぶことになるのだけども。

「まずはシャルティア」

「モモンガ様は美の結晶。まさにこの世界で最も美しいお方です。その白きお体と比べれば、宝石さえ見劣りしてしまいます。…そしてシュヴァイン様は、洗練された闇そのもののような御仁だと思っております。闇に潜み敵を屠るそのお姿は、けして並び立つものはいないと」

「——コキュートス」

「守護者各員ヨリモ強者デアリ、マサニナザリツク地下大墳墓ノ絶対ナル支配者ニ相応シイ方々カト」

「——アウラ」

「モモンガ様は慈悲深く、深い配慮に優れた素敵なお方です。シユヴァイン様は常に自らに使命を課し、妥協を許さぬ気高きお方だと思います」

「——マーレ」

「モモンガ様は、す、すごく優しい方だと思います。しゆ、シユヴァイン様はとっても強い方だと思います」

「——デミウルゴス」

「モモンガ様は、賢明な判断力と、瞬時に実行される行動力も有された方。まさに端倪すべからざる、という言葉が相応しきお方です。シユヴァイン様は戦略に富み、それを堅実に行うお力を持ったお方。その敢為邁往なお姿はまさに豪傑と呼ぶに相応しいかと。その中で、寛大なお心持つお方だと思っております」

「——セバス」

「モモンガ様は至高の方々の総括に就任されていた方。そしてお二人は最後まで私達を見放さず残っていただけ慈悲深き方々です」

「最後になったが、アルベド」

「モモンガ様は至高の方々の最高責任者であり、私の愛しいお方です。シユヴァイン様はナザリツク地下大墳墓の繁栄に尽力を惜しまず、けして指針を見失わぬ標のようなお方。お二人とも、私どもの最高の主人であります」

はあい、ちよつとタイム。ごめんねえ悪いねえ、待つて待つて待つてこれ誰の話？

顔の前で両手をばつにして乱入していきたい衝動に耐える。

この場所でこの空気をぶち壊すことは、馬鹿のすることだろう。豚君知ってる！ 真面目に聞かないと血祭りにあげられるんですよ！

そもそもこういう空気が得意でない。真正面から間違つた解釈で誉め殺しにされて、いたたまれないのだ。背中を下から上に撫でられるような落ち着かない感覚がおれを包む。

平常心だ、まずは落ち着いて素数を数えるんだ。

なんとか顔に出すまいと無理矢理感情を押し殺していると、不意に「しゅーしゅー」と聞き慣れない音が聞こえてきた。えっなに。

視線だけで音の原因を確認すると、それは顔の真横から聞こえてきた。正確に言うとは、蛇の威嚇音である。この蛇はどこからやってきたのか。

ヒント：髪の毛。

そう、今のおれは人間ではなく石化メドゥーサーの蛇だ。

その特徴はなんと言つても髪の毛の蛇。それが一齐に威嚇音を鳴らし始めたのだ。

なぜ急に鳴き出したのか。そもそもこいつら生きてたのか。疑問は尽きないが、蛇たちが鳴き出した原因に心当たりは一つしかない。おれの押し殺した感情がそのまま表に現れてしまったのだ。

えーやだあ、この身体めつちや不便なんですけどお。

言うまでもなく蛇たちの威嚇音はモモンガさんどころか守護者たちにまで聞こえただろう。皆おれのことを見てるもん。恥ずかし。

…いや「恥ずかし」とか言ってる場合じゃない。このままだとおれはいきなり騒ぎ出した阿呆になる。ええい取り繕うんだ、演劇部（裏方）の根性でごまかせおれ！

「お前たちにそれほど慕われているとは、照れてしまうな。そのような部下を持って、わたしもモモンガ殿もお前たちのことを誇りに思っている。なあ、モモンガ殿」

「シュヴァインさんの言う通りだな。各員の考えは十分に理解した。それではわたしの仲間たちが担当していた執務の一部まで、お前たちを信頼し委ねる。今後とも忠義に励め」

よっしゃ帰れる雰囲気！ はやくお部屋に帰してください！

モモンガさんがリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを発動させたのを確認し、す

ぐさま自分も発動させる。そのあとはもう逃げるように玉座の間へ転がり込んで、モモンガさんと顔を見合わせた。

「疲れた…」

「同じく。…ていうかモモンガさんて実は自殺願望でもあるんですか？」

「えっ!? やめてくださいよ急に！ そんな恐ろしい願望なんてないですよ！」

「いやいやいや、そうじゃなけりやあ普通あの状況で人間やめてる部下っぽい人に「おれのことどう思ってるう？」とか聞かないでしょう」

「だって、シュヴァインさんのスキルに本質センシティブ・グラスブ看破ってあったでしょう」

「アサシンのスキルですけどね、まさかこんな状況で使うなんて思いませんよ」

「合図送ったらうなずいたじゃないですか」

「あれ合図だったのか…。司会進行役お願いしますね、って伝えたくもりだったのに」

「いやいや、それこそわからないですよ！ 石化メドゥーサの蛇サって人間みたいな顔の作りしてるのに、シュヴァインさん表情がほとんど変わらなくてなにを考えているのかさっぱりですよ」

「表情筋ない人に言われたくないです。顎関節だけで微笑む練習してください」

「…まあ、スキル、いらなかったみたいですけどね」

「…そつすね」

そう。おれたちをなによりも戦慄させたのは、誰一人として嘘をついていなかったことだ。

上つ面でおだてるような世辞ではなく、守護者全員がおれたちをなによりも強く、尊いものと信じて疑っていないかった。本質センチティブ・グラス看破を使うまでもなく自分に心酔していると確信できる視線を惜しげなくそそがれて、ちよつと鳥肌がおさまらない。蛇皮だけでも。

「なんですかあれ。端倪すべからざるとか生まれてこのかた聞いたことないですよ。モンガさんはおれのために早急に国語辞典のデータを確保してください」

「それを言うならシユヴァインさんだって、敢為邁進とか言われてたじゃないですか」

「なんですかモモンガさん、ちゃんと日本語しゃべってくださいよ。おれ中国語はちよつと…」

「日本語ですけど」

「嘘だツ！」

なんとも言えない静寂がおれたちを包み、同時に重い息を吐き出す。いやモモンガさん呼吸してないけど。

守護者たちの評価を崩した場合、おれたちはどうなるんだろうか。

おれはぶつ切りにして調理されるのだろうか。蛇肉って味が鶏肉に似てるらしいし。

…モモンガさんは出汁ぐらいしか取れなさそうだ。

「…シユヴァインさん」

「なんですかモモンガさん。せせる肉くらいつけてください」

「アンデッドなので難しい要望ですね。…俺はタブラさんに謝罪しなければなりません」

「え、なんでまた」

「それは……、……」

「…懺悔なさい。神は全てを許します」

「俺は！ サバーのサービス停止日だからと！ 調子に乗ってギルド長権限を使い、アルベドの設定を書き換えてしまいました！ 俺のことを愛していると！」

「なんとということでしょう！ 神もお許しにならないわ！ 一生悔いて生きるがいい！」

「神は全てを許すつて言っただばかりなのに！」

「アンデッドに神はいないッ！」

「！」

豚の蛇の苦悩

おれとモモンガさんがナザリック地下大墳墓ごと見知らぬ草原へ放り出されて二日が経過した。

モモンガさんはモモンガさんでなにやら忙しそうであるが、おれの場合は、今までコンソールの画面一つで引きずり出していた収集物がドレスルームにまるごとぶち込まれているというひどいありさまだったので、その整理整頓に追われていた。

メイドを三人も導入してかかっているのがこの日数なのだから、もし一人で片付けるとしたらとんでもないことになるだろう。

「これはいるもの！　これもいるもの！　これとこれとこれもいるもの！」とおれがテレビ番組でよく特集される片付けのできない芸人みたいなことを言うものだから、メイドたちの中でおれは完全に収集家というイメージが植えつけられたようだ。

間違っちゃやあいないが、片付けのできない上司に対して「シユヴァイン様はものを大事になさる方なのでですね。慈愛に溢れた素晴らしい方です」とかなんとか言っているあたり、鑑識眼がいかれているとしか思えない。

これが至高の四十一人パワーというやつか。

試しに「これは幸せになれる壺です」とか言つてポーションの空き瓶をナザリックのNPCに売りつけたら買いそうで怖い。そして本当に幸せになりそうで怖い。おれはアイテムが入らなくて入らなくて震えているというのに。

そうして比喩表現でなく雪崩を起こしたアイテムを見て「今日はここまでえ。ああ、やだやだ休憩しよ」と作業を投げ出したところでふと思ひ出した。

そう言えばおれの身体能力は、こちらに来てからどう変わっているのかと。

体力的な意味ならば、ナザリック地下大墳墓の第十階層から第一階層まで全力疾走しても余裕があると実証された。

突然の好奇心で実行したことなので、各階層の守護者たちにはいったいなにごとかもものすごく心配された。咄嗟に「あつすみません見回りを兼ねた体力トレーニングです」とごまかしたが、非常に申し訳なさそうに「我々の配慮が足りず申し訳ありません。警戒を更に嚴重に致します」とアルベドに謝罪されたので、おれが体力トレーニングを行うことは二度とないだろう。

まあそういうわけで、おれが気にしているのはこの「シュヴァイン」というアバターに、これまで積み重ねてきた特殊技術スペシャルテクニックのほうである。

先日の本質セシテック看破は誰も嘘をついていないことから、発動すらしなかった。

デミウルゴス自殺未遂事件の危険感知は、会話の端々からすでに怪しい雰囲気雰囲気が漂っ

ていたので発動したかどうかも怪しい。

秒2%体力回復と移動速度上昇Vについては豚君体力トレーニング騒動で発動した気がしなくもないが、身体能力の向上が素晴らしすぎていまいち実感に欠ける。むしろ自殺未遂事件を考慮して耐性効果のある指輪をつけていったことで「暑くない！ そして熱くない！ わたし風になつてるううう！」と指輪による恩恵に感動するしかできなかった。

つまりは、目に見える特殊^ス技術^{キル}の効果が欲しいのだ。

モモンガさんという裏切り者はなんと初日で魔法の発動を確認したらしい。魔法はね、わかりやすいね。おれも魔法職習得しとけばよかった。

後悔先に立たずの法則である。

「そもそもシユヴァインさんの目に見える特殊^ス技術^{キル}ってなんですか？」

「そりゃあ、まずわかりやすく石化でしょう。石化^{メドゥーサ}の蛇^サですから」

「豚…、おや？ オークじゃありませんでしたっけ」

「おれが剛腕スキル持ちじゃなくてよかったですね。次に言ったら第三肋骨を奪取しますよ」

「こちとら真面目に言ってるんですよう。」

第三肋骨強奪宣言により目の前の骸骨が胸元を隠すというとてもシユールな光景が

誕生したが、今のおれはそんなものに気を取られている場合ではない。

人払いをして二人きりになった部屋で支配者（○）の仮面を脱いで本音をぶちまける。

状況が状況でなければ「二人きり、だね：照れちやうな：」とか学生時代の修学旅行のノリでネタを振るのだけれど、悩みは深刻なのである。

だってこのままじゃあ、おれだけちよつと運動神経がいいだけの怪物じゃないですかやだー！

おれだつてなんか別世界に来たんだけって実感欲しいんだもんん！

机に伏せて訴えるとモモンガさんが「ふうむ」と唸つて自分の顎を撫でて考える。

なにか妙案があるのかと期待の眼差しを向けて見つめたけれど、そのまま両手を肩の位置にあげて首を振った。ですよねー。

「シユヴァインさんて、どんなスキル持ちでしたっけ」

「アサシンと石化メドゥーサの蛇で状態異常負荷のオンパレードですよ。自分が耐久型なんで、相手を状態異常にして長期戦に持ち込むのがほとんどでした」

回復道具を奪うのも同時進行だったので、相手の回復役のマジックポイントが尽きれば、あとはおれの独壇場だった。

「ていうか石化メドゥーサの蛇が状態異常に弱いくせに、覚える状態異常負荷スキルが一番多いというほこたてについて。耐性という言葉覚えてるべき」

「諸刃の剣ですねえ」

「ユグドラシルでは耐久型となるべくして生まれた種族だと思ってます」

この扱いづらい性能と異形種という見てくれのせいで、ユグドラシルでもなかなか不人気な種族だったと記憶している。

まあおれはあらかじめ計画を立てて種族と職種を選択したので、サービス停止のその日まで楽しくギルド狩りを行えたのだけれど。にちゃんねる情報さまさまの時代である。

「そもそもモモンガさんがアンデッドじゃなければ、ちよつと噛み付いて状態異常になるかどうか実験できたんですけどねえ」

「さらつと恐ろしいこと言わないでください。…それならほら、草原にいる小動物で試してみるなんてどうですか？」

「あー…：…実はそれはもう試そうとしたんですよ。それでメイドにプリーリードッグみたいなやつを一匹捕まえてきてもらったんですけど…、あー…」

「どうしたんですか？」

「…蛇系の種族になったせいか、こう…小動物が…なんだか美味しそうに見えてしまつて…」

「え」

「気がついたら小動物がいなくなつて、そして満腹感が……」

「え」

おいやめろそんな目でおれを見るな。両手で顔を覆つてモモンガさんの視線から逃げる。

ちなみに捕まえてきてもらったメイドには「シユヴァイン様に直々に召し上がつていただけなん……」といたく喜ばれた。ちよつとその情報知りたくなかつた。

そんなわけで丸呑みできてしまう小動物はよろしくない。できれば自分と同じ頭身の生き物がいいのだ。状態異常耐性がついていないのが前提であるけれども。

「最終手段で守護者に耐性を外させて実験体に……」

「やめてあげてください！　そもそも彼らはアインズ・ウール・ゴウンの仲間たちが作ったNPCですよ！」

「冗談ですよ。だいたい悪いこともしてないのに、そんな拷問みたいなこと……」

ここで一つ考える。一人、冤罪をこじつけられる相手に心当たりがあつた。

いやこの件については適当に不問にするつもりだったのだけれど、有効活用できるのではないだろうか。

無論殺すつもりなど微塵もない。モモンガさんの言う通り、彼は友人の作つたNPCであり、このアインズ・ウール・ゴウンの子供のようなものだ。

ただ自分の特殊技術スキルが使用できるかどうかの確認がぶっつけ本番では困るのだ。

実戦になって「敵が現れた！ 豚の攻撃！ しかしなにも起こらない！」ではおれはただの鍛錬用のかかしになってしまう。それを回避するために状態異常を負荷する能力が発動するのか確認しておく必要があるのは、モモンガさんだってわかっているだろう。

手頃な他人がいればさくつと誘拐すればいいのだけれど、ない袖は振れない。

急に黙り込んだおれを見て、モモンガさんが顔の前で片手を振る。はあい起きてますう。

「どうしました？」

「…あー、ものは相談なんですけどね」

豚の蛇の歯牙がかかる

モモンガさんに使う言い訳として「先つちよだけだから！」と言ったあたり、おれはペロロンチーノをデイスることができない程度に変態である。

豚で変態とかもう目も当てられねえな。

そうして薬草から解毒薬から、上位ポーションに魔法具と、ありとあらゆる状態異常を回復させるアイテムを取り揃え、人払いをした部屋に呼び出したのはデミウルゴスである。

すでに罪悪感がやばすぎて自分の感情の閾値を超えているのか、髪の毛の蛇がしきりに威嚇音を鳴らしている。

そう、なにを隠そうデミウルゴスには、おれの特^ス殊^キ技^ル術^ルが本当に発動するのか、実験体になってもらうことにしたのだ。

「お前が呼び出された理由はわかってるのか？」

「はっ、無論でございませぬ。先日^スの無礼、当然不問にできるものではございませぬ」

不問にする気で満々だったけれども都合により不問じゃなくなつたとは言えない。

跪いたデミウルゴスに「面を上げろ」と告げれば、切れ者、やり手、できる男という

印象しか抱かないようなその顔が、緊張で引き攣っているのがわかる。

一瞬「やっぱり申し訳ないしやめておこうかな」という気持ちだが過ぎるが、しかしこれを決行しなければ、明日は我が身が危険に晒されるかも知れないのだ。なんのためにモモンガさんを説き伏せたと思っっている。

おれはデミウルゴスにばれないように深く息を吸って、蛇皮できしむ頬を無理矢理持ち上げた。相手の不安を少しでも軽減できるよう朗らかな笑顔を心がけよう。

「わたしの体調も回復してな。これからはナザリツクの外の様子を調べるのに、わたしが直々に赴くこともあるだろう」

「そんな…、そのようなことは我々にお任せください」

「ああ、それでもいいのだけれど。今日は少し試してみたいことがあってな」

「試してみたいこと、ですか」

「そうだ。もし未だにわたしの体調が万全でない場合、敵と遭遇したときに、身を守る手段が働かなければ困るだろう」

「仰る通りです」

「わたしの力がきちんと敵を苦しませるに値するか。体調はすでに万全か。デミウルゴス、お前に少しばかり手伝って欲しいんだ」

「…はい、畏まりました」

察しのいいデミウルゴスは気づいたようである。

いや、上司がこんなことを回りくどい言い回しで要求したら普通に気づくか。いやはやとんでもブラックな企業である。

遠回しに「嫌なら断つてもいいのよ？」と聞いてみたが「いいえ、シュヴァイン様のお役に立てるのなら本望です」と返答された。社畜の鑑をここに見た。

「とは言うものの、先日も言った通りお前を死なせるつもりは毛頭ないからな。ここに状態異常を回復させるポーションを揃えた。毒や麻痺の類いなら一分、いや四十秒…三十秒耐えてみせる。石化ならあとで解いてやる。それで先日のことは不問だ。今後とも変わらずにナザリツクへ忠義を尽くしてもらおう」

おれだったら絶対に辞表叩きつけるね。むしろ労基署に駆け込むわ。

訴えられたら負ける、それが豚株式会社…！

「ふざけるな」と怒つてもいい状況なのに、デミウルゴスは「畏まりました」と一礼する。近くに寄れという意味を込めて手のひらを二度動かしたけれど、これ本当に大丈夫？ 危機探知も本質センチテフ・グラスフ看破も反応はしていない気はするんだけど、おれまだ自分のスキルを心の底から信用できてないからね。やられる前にやれの精神で反撃されたらおれに与えられた選択肢は「耐える」しかないよ？

玉座と言つても過言ではないような豪華な椅子に座るおれの足元へ、デミウルゴスが

跪く。

わあ睫毛長い。これだからいけんは。ちよつとばかり嫉妬しながら首に手を滑らせて、赤銅色のネクタイに手をかけた。

「申し訳ありません、私が」

「いや、いい」

「…お手を煩わせます。お許してください」

「気にしなくていいとも」

今から訴訟ものの仕打ちをするんだから、これぐらいは当然ですよ。

それにしてもネクタイってどうやって外すんだっけ。おれの職場は私服でOKなところだったものだから、最後にネクタイに触ったのは就職活動のとき以来だぞ。…あつこれだめだ。緩んだけれど絡ませたせいで抜き取れない。

…このままもたすするのもあれだしな。おれも注射するときには焦らされたら嫌なタイプだし。ここはあとでネクタイの結び目の構造を忘れたことを素直に報告して謝ろう。

ワイシャツの襟に手を入れて首回りに余裕を持たせると、その首筋が露わになった。

首って血管太いし神経集まっている場所なんだけれどもこんなところに噛み付いて大丈夫なのか。おそろおそろ浮き出た血管に沿って指を動かすと、デミウルゴスが微かに

震えた。

「いや、もうこれ以上余計なことを考えて焦らすのはよくない。悪魔だから大丈夫！
デミウルゴスは強い子！ よし！

「状態異常の耐性を外しておけよ」

「は、すでに」

めつちや準備いいなと呟きそうになった言葉は、首筋に噛み付いた口の中で不発に
なった。

突き立てた歯牙の奥から生暖かいものが、細い管を通って這いあがってくる。どう
やってそれをやればいいのか、手足を動かすように理解できた。モモンガさんが
死の支配者オーバーロードになってから魔法の発動方法やマジックポイントの残量が感覚でわかると
言っていたのが、この状態だろうか。

ぼんやりと考えながら食いついた場所にその生暖かいものをそそぎ込むと、デミウル
ゴスが小さく呻いた。

「…っ」

口を離して、あらかじめ用意していた懐中時計の秒針を見る。

そしてもう一度デミウルゴスに視線を戻すと、彼はおれが食いついた場所を手で押さ
え、膝元に伏せつけてきたところだった。

噛み付いた場所に歯牙のあとがついて、おれの唾液と毒液、そしてデミウルゴス自身の血液で濡れている。たいへん申し訳ない気持ちになって、それをこつそり手のひらで拭った。

「も、もうしわけ、ありません…！　すぐに立ちます…！」

「構わない。むしろ平然とされたほうが困るだろう」

これは本音だ。

というか、やはりおれの攻撃にも状態異常負荷は加わるものだったのか。よかった。不謹慎だけれど、効果が出てくれないとおれの今後がお先真つ暗なのである。

この様子は普通の毒か。それとも麻痺毒だろうか。他にも混乱やら昏睡やらの可能性がある。状態異常の負荷が発生するのは確定だけれども、一定の割合でどれかが発生するというスキルの組み方をしたのだから、デミウルゴスにどんな症状が現れているのかわからない。これは使いどころを考えなければいけない能力だ。

「デミウルゴス、今お前を襲っている状態異常はなんだ」

「…猛毒、です…。う…、さすがは…シユヴァインさま…、すばらしいおちからです…」
ひえ。

目に見えて急速に弱っていくデミウルゴスに思わず怯む。

つらいだろうと背中をさするが、なにを隠そうデミウルゴスをこんな状態に陥れたの

は言うまでもなくおれである。

効果が発生することは確認できたのだから、もう助けてやってもいいだろう。とかごめん、好奇心でこんなことやって本当にごめん。今この現場をモモンガさんに見られたらぼこぼこにされても文句は言えない。予想していた以上にデミウルゴスの症状が重篤なのが焦りを生んで、髪の毛の蛇がまたしても鳴いている。

おれは慌ててサイドデスクの上に置いていたポーシオンを手にとって、苦しげに空虚を握るデミウルゴスの手に持たせた。早く飲みなさい。大丈夫？ 飲める？ それともおれが栓開けたほうがいい？

けれどもおれが握らせたポーシオンの瓶を、デミウルゴスが力なく押し返した。

なん…だと…？

「まだ、二十秒あります…ので…」

真面目か。いや本当にすみませんでした！

悪魔が歯牙にかかる

比類するものがないほど尊い存在が過ぎすはずの部屋からは、その至高の気配以外、まるで生き物の気配を感じられなかった。

部屋の入り口を警護するものの姿すらないので、デミウルゴスは人払いをしたのだと理解する一方で、無防備な部屋の様子に少しばかり不安を覚えた。

この扉の先にいるのは、至高の四十一人のうちの一人だ。

どのような状態であろうとデミウルゴスを含むナザリツクの者たちは、至高の存在が外部の敵に後れを取るとは微塵も思っていない。それどころか、そもそもこのナザリツク地下大墳墓に侵入してこようとするような不屈き者の存在を、ここまでの階層を守護する者たちは決して許さない。

そしてなにより、かつて一度の敗北を味わった戦いするときであつてもこの「第九階層」まで足を踏み入れた敵は存在しないという前提がある。

——それでも、今はこれまでと少しばかり状況が違う。

「未知の場所ではどんな間違いがあるかわからない」という至高の最高責任者の言葉がうかがった以上は、仕えるべき我らは気を引き締めなければならないのだ。そうして、

万が一にでもその間違いとやらが起きたとき、我らはまず主人たちに仇なす愚か者をこの世から跡形なく始末しなくてはならない。もしも力の及ばぬ相手だった場合、主人たちを守る盾となって死なねばならない。

けれどもそのためにはまず、部下を周囲に置いてただかねばならないのだ。

自分ごときの存在のために部屋的主人が、シユヴァインが人払いをしたという事実を目の当たりにして、デミウルゴスの胸にはまず申し訳なさが募る。けれどもそれに続いて、なによりも尊い存在にここまで目をかけていただいているのだという喜びが染み入るように広がっていく。

その理由がいかなるものであろうと、…たとえこのあとに先日の無礼を詫びるために死を要求されたとしても、デミウルゴスにとっては至高の御方に死を看取ってもらえるというのは極上の蜜とも言える扱いだっただけだ。

そうして正反対の感情が胸中で渦巻いているのを感じながら、デミウルゴスは扉を四度叩いた。

中から短い返答が聞こえて、開いた扉から聞こえたのは、まず、蛇の鳴き声だった。

×××

「お前が呼び出された理由はわかつているか？」

「はっ、無論でございます。先日が無礼、当然不問にできるものではございません」

床に膝をついて畏まるデミウルゴスに「面を上げろ」という抑揚のない声が飛ぶ。

それに従つて顔を上げ、主人を視界に収めると、そこへ広がる光景にデミウルゴスは思わず息を飲んだ。

ナザリツク地下大墳墓の者の目に映るシユヴァインとは、常に至高の四十一人の名前に恥じぬ支配者の気配を纏つた男である。

それは同じく仕えるべき主人であるモモンガも同様で、それでおもモンガは至高の最高責任者として相応しい絶望のオーラすら纏つて守護者たちを圧倒するのだから、至高の四十一人とはそういうものだ、我らよりもはるかに格の違う素晴らしい方々なのだと認識している。それはデミウルゴスだけの感情に限らず、ナザリツクの者ならば共通の意見であるだろう。

しかしデミウルゴスが畏怖し、敬愛してやまないのは、シユヴァインという人物がナザリツクの者に認識させるのは、その支配者の気配のみに限られているという点だ。

この部屋へ訪れたデミウルゴスが「部屋の中にシユヴァインがいる」ということを認識できたのもひとえにその気配を感じたからであり、それ以外の生き物としての気配を感じることはまるでできなかった。呼吸を、匂いを、足音を、そして心臓の音の一片

すら存在しないもののように振る舞い行動するシュヴァインの芸当は、まさに暗殺者^{アサシン}の究極とも言える姿だろう。

この主人が本気を出せばその支配者の気配すら認識させず、誰にも見つからずにナザリツクを縦横無尽に駆け抜けることすら可能だろう。

二日前にシュヴァインが行った第十階層から第一階層までを走り抜けるという行為は、本人は鍛錬だったと言うが、最高責任者たるモモンガの真意を組めずに意識の緩んだ守護者たちを叱咤するためだったに違いない。そうしてアルベドと相談して警備体制を見直したところ、実際に警護の穴が見つかったのだからシュヴァインには感服せざるを得ない。

だからこそ先日第七階層でシュヴァインを見つけたことは奇跡であったし、奇跡が起きたということは、彼の体調が本当によくなかったという証明になる。∴指輪を忘れるほどに憔悴していたのだからうなずける。

シュヴァイン自身は万全になったと言うが、もしそれが不治の病であった場合を考えると、デミウルゴスは今でも涙腺が潤むのを抑えられない。

しかしこうして変わりのない、見事としか言いようのない姿に戻ったシュヴァインに謁見したからこそ、デミウルゴスは息を飲んだのだ。思わず霞みそうになる意識を引き戻しているのは、支配者の気配による威圧と、無様な姿を晒すことは許されないという

固い覚悟だ。

思わず一礼しそうになった自分を引きとめて、デミウルゴスはシュヴァインの言葉を待った。

「わたしの体調も回復してな。これからはナザリックの外の様子を調べるのに、わたしが直々に赴くこともあるだろう」

「そんな…、そのようなことは我々にお任せください」

「ああ、それでもいいのだけれど。今日は少し試してみたいことがあつてな」

「試してみたいこと、ですか」

「そうだ。もし未だにわたしの体調が万全でない場合、敵と遭遇したときに、身を守る手段が働かなければ困るだろう」

「仰る通りです」

「わたしの力がきちんと敵を苦しませるに値するか。体調はすでに万全か。デミウルゴス、お前に少しばかり手伝って欲しいんだ」

「…はい、畏まりました」

声が震えていない自信がなかった。

それは恐怖や絶望ではなく、歓喜から来るものであった。

「とは言うものの、先日も言った通りお前を死なせるつもりは毛頭ないからな。ここに

状態異常を回復させるポーションを揃えた。毒や麻痺の類いなら一分、いや四十秒…三十秒耐えてみせる。石化ならあとで解いてやる。それで先日のごとは不問だ。今後とも変わらずにナザリックへ忠義を尽くしてもらおう」

敬愛する主人が自分の体調を確認するのに、実験体になれと言われている。

これを理解のない愚か者が聞けば憤慨するかも知れないが、デミウルゴスはそうは思わない。きつと、他の守護者たちだってそうだろう。

実験というのは失敗を考慮して行うものだ。つまりシユヴァインは失敗してもデミウルゴスはけして反撃をしないと、…勿論反撃するつもりなんてものは微塵もないが、信頼するに値する人物なのだと言っていることになる。これを歓喜と言わずなんと表現すればいいのか。

先日の無礼を詫びようにも、これではまるで罰になっていないではないか。

そう思ったけれど至高の御方の決定は絶対だ。デミウルゴスに意見する権利などあるはずもなかった。

鱗模様覆われた手に招かれてデミウルゴスはシユヴァインの足元に跪く。

喜びと緊張で頭がうまく働かない中で、主人の手が自分の首に回った。ああそうだ、障害物を取り除かなくてはいけない。

「申し訳ありません、私が」

「いや、いい」

「…お手を煩わせませす。お許しください」

「気にしなくていいとも」

ネクタイが揺すられてゆつくりと開放感がやってくる。全て外すのかと思っていたけれど、途中で服の襟を引かれて首回りを暴かれた。

そうして主人の手が首筋をなぞって自分の血管を確認しているのを感じて、歓喜と、至高の御方の力の一部を受けるのだという恐怖が無意識に身体を震わせる。

「状態異常の耐性を外しておけよ」

「は、すでに」

頬に息がかかるほど顔が近く、シュヴァインの唇のはしから鋭い毒牙が光って見えた。

そして、激痛が走る。

「…っ」

首から全身に向けて激痛が走っていくのについで、眩暈が起こる。

視界のはしに映るシュヴァインの握った懐中時計を確認したけれど、その秒針はほとんど動いていなかった。状態異常の耐性を取り払ったと言えども悪魔である自分を一瞬でここまで苦しめる、それほど強力な毒だということだ。

身体が傾くのを感じたが、襲ってきた吐き気に耐えるばかりでそれどころではない。けれども不意に首を撫でられて、自分が伏せているのがとんでもない場所だと知る。

「も、もうしわけ、ありません…！　すぐに立ちます…！」

「構わない。むしろ平然とされたほうが困るだろう」

そういうわけにもいかない、という言葉は吐き気に飲み込まれた。さすがに主人の膝元で吐瀉物を撒き散らすのは自分の忠誠心が許さない。

きつく唇を噛み締めて襲いかかってくる症状に耐える。時間が経てば経つほど、全身の痛みが増して意識が朦朧とする。けれどもそれを引き留めるようにシユヴァインの声がデミウルゴスの耳をくすぐった。

「デミウルゴス、今お前を襲っている状態異常はなんだ」

「…猛毒、です…。う…、さすがは…シユヴァインさま…、すばらしいおちからです…」
シユヴァインの手がデミウルゴスの背中をさする。

デミウルゴスはそれだけで猛毒の症状が和らぐような気がして、そして実験体になったこと自体が褒美であることに感じた。

そうしていつの間にかシユヴァインが、手に取ったポーションをデミウルゴスへ押しつける。それを素直に受け取るうとして、実験前に主人が言っていたことを思い出した。

「三十秒耐えてみせろ。それで先日のごことは不問だ」

秒針はまだ指定の時間を指していない。

ゆったりと労わるようにデミウルゴスの背中を撫でる主人の髪が鳴いている。いや、嗤っている。苦しくて苦しくてどうしようもないときに、甘いえさをぶら下げるのは悪魔の常套だ。至高の御方であるシュヴァインがそれを知らないはずはないだろう。

…つまりこれは、自分の忠義を試されているのだとデミウルゴスは確信した。

「まだ、二十秒あります…:」

至高の御方に今後とも仕えるためならば、デミウルゴスにとってこんな苦痛は、なんの障害にもならないのだ。これだけで第七階層での無礼を不問だと言うならば、一時間だろうと一週間だろうとこの猛毒に耐える自信があった。

デミウルゴスはただただ唇を噛んで、できるだけ痛みを意識しないようにしながら、敬愛してやまない相手に背中を撫でられる僥倖だけを皮膚に焼きつけた。

豚の蛇の罪悪感

あーそう言えば報告遅れたけどおれの猛毒スキル発動しましたよお、実験体になつていただいた彼も問題なくポーションで復活したから大丈夫ですう。

モモンガさんと「今後どうするべか」という話し合いの最中だったが、心ここに有らずという表現がよく似合う状態だった。なんだかそわそわして「あつはい」「そうなんですぬ」という生返事しか返してくれない。

もしかしてお手洗いに行きたいのだろうか。いやしかし骸骨の身体でどうやって…とアンデッドが排泄をする可能性について考え始めたところで「ああそういえば報告していなかったな」と思い出す。そうして取って付けたように報告すれば、目に見えてモモンガさんの肩から力が抜けた。無駄な心配かけてすみませんでした。

「てつきりシュヴァインさんがデミウルゴスをやってしまったかと…」

「それでお茶飲みながら茶菓子もりもり食つてるとかおれの人間性くそ以下じゃないですか」

「なのでウルベルトさんに代わって超位魔法で敵討ちするべきかと悩んでいました」「やめてくださいいしんでしまいます」

これがゲームの中で、おれが持っている最も強い装備で立ち向かうならば、ヒットポイントが二割ほど削れるだけで死ぬことはないだろう。

けれど今は現実で、おれがモモンガさんの攻撃を食らって実際生き残れるかどうかはわからないのだから、死亡フラグはできるだけへし折っておきたいじゃないですか。

しかし不意に呟かれた「心配しすぎて徹夜作業もはかどらなかつたのに」というモモンガさんの言葉を聞いてぎよつとする。

なんでそんな社畜みたいなことを自主的にしてるんだこのひとは。

まさか実はそういう性癖の持ち主なのかと思つたけれど、どうやら死の支配者オーバーロード：アンデッドの身体になつて以降、身体が食欲や睡眠欲、疲労感といったものをまるで感じなくなつたらしい。

食欲はメイドが用意していたお茶を断っていた時点で想像に難くなかつたが、睡眠欲や疲労感についてまでは予測していなかつた。

そして性欲のほうは微妙に感じなくもないらしい。けれど実践する前に大事なものが喪失したそうさ。それを聞いて「これで名実ともに魔法使いじゃないですか、やったね！」と言いながら目の前でステップ踏んだらモモンガさんの第三位階の攻撃魔法がおれの脳天目がけて炸裂した。

きかぬわ。

「今後の方針について」の話し合いなんぞそつちのけにしてきやつきやうふふと遊んだり、アインズ・ウール・ゴウンの昔話に花を咲かせたりしていたけれど、不意についてモモンガさんが重たい溜め息を吐いた。

どうした、恋愛の悩みか。怖いもの見たさでアルベドに相談してみようぜ。

わくわくかてかてかという気持ちで提案した言葉は無言で却下された。

「実はずっと後ろをついて回るお供に少し疲れてしまつて…」

「あー」

おれは部屋の片付けで引きこもっていることが多いので今のところはそこまで辟易していないけれど、確かにあれはしんどいものだ。

こうしておれが息抜きを兼ねてモモンガさんの部屋を訪ねるだけで、おれの後ろにも近衛がぞろぞろとついてきたのだから、おれよりも活動的に動いているモモンガさんはもっと精神的につらいものがあるだろう。

近衛やメイドたちを「友との歓談に無粋なものはいらぬ」とそれっぽい言い訳をして部屋から追い出す程度にはモモンガさんは参っている。それが今後活動するようになったとき、おれの後ろについて回ると思うと部下の皆さんには申し訳ないがぞつとずる。

「もう変装でもして散歩するしか…」

「それだ！」

「えー」

そんなのどこの王侯貴族う！ と自分で突っ込みを入れるよりも前に、目の前の骸骨がおれに骨の指を突きつけた。

それまじで言ってるの？ 言っておくけど豚君は絶対無理だと思う。

「いいじゃないですか、少しだけ息抜きに散歩するだけなんですから。わかりやすい格好でいるから頭も下げられるんですよ。変装すればうまくいくはずですよ」

「えー」

それはちよつと安直ではなからうか。それにもしそれがうまくいったとしても、そうなるとおれたちはナザリック周辺を徘徊している不審者という凶になるぞ。

警戒態勢を敷いたのモモンガさんご本人ですよね？

我らがギルド長は精神的な疲労のあまり冷静に考えられなくなっているに違いない。モモンガさんあなた疲れているのよ……と告げようにもすでにクリエイト・グレート・アイテム《上位道具創造》により、目の前には死の支配者ではなく見慣れぬ黒い騎士が立っていた。

「さ、行きましよう！」

「えええおれもですかあ？」

「言い出しつぺの法則ですよ」

法則ならしかたないな。

×××

結論だけ言おう。ナザリックの警戒態勢には勝てなかったよ…。

どうするんですかめつちやついて来ますよ、だから安直だつて言つたんです、そもそも最初からばれてたし。

視線を送つて訴えてはみるが、闘技場で起こつた事件の前科があるので、モモンガさんとおれの間でアイコンタクトが成立するとは最初から思つていない。

なにごともし諦めが肝心なのかもしれないと悟りを開きながらおれは外套のフードを取つ払う。そして諦めの悪い騎士ことダークウオリアー（○）さんと、そんな彼の魔法でガンナーに変装していたおれはデミウルゴスを背後に従えながら霊廟の出入り口を目指していた。

これは余談だが、豚君としてはあれだけ弱つたデミウルゴスが二十四時間以内にここまで回復していることに驚きである。ポーションの効果だとはわかつていても、少しばかり憂慮する。

うわっ…おれの特殊能力弱すぎ…？

しかしそんな憂慮と呼べない憂慮も、どうでもいい思考も、靈廟から一步踏み出したところで全て掻き消された。

そこに広がっているのは満天の星空だった。

こんな見事なものは大昔の記録を残した凶鑑や写真でしか、いいや、今まで一度だつて見たことがない。なんて綺麗なんだろうか。

「まぶしいな」

空が輝いて、まるで財宝の山を見上げているようだった。

「すごいな……。仮想世界でもここまでは……」

こんなに綺麗なところなら人工心肺も必要ないだろう、というモモンガさんの言葉にうなづく。おれは空気汚染の影響を受けて心肺交換をした側なので余計にそう思う。

夢中になつて星空を見上げていると、ふとモモンガさんが空間からアイテムを取り出して手渡してきた。小さな鳥の翼を象つた飛行魔法用のネックレスだ。ああ確かに空を飛んでこの光景を眺めたら、さぞ素晴らしいことだろう。

けれどもおれはそれを手を軽く振つて断つた。

自分用はそのアイテムは持っているのでモモンガさんの手をわずらわせる必要はないだろうと思つたし、なによりおれは、もう少しここから見上げていたかった。

「どうぞ。おれはもう少しここにいます」

「そうですか? …では少し行つてきますね」

モモンガさんがふわりと浮かび上がると、後ろから困つたような声が聞こえた。

…やつべえ、デミウルゴスがいるのを忘れて普通に敬語使つちやつたよ。ていうかモモンガさんもおれに対して敬語使つてたよ。

二人揃つて支配者としてのぼろが剥がれかけていることに内心で焦りつつ、しかし見てくれだけは余裕を持つて振り向き「お前はモモンガど、…モモンガさんのほうについてくれ。この辺りならアウラとマーレもいるだろう。おれのこととは心配しなくていい」と言う。

支配者とはア、言葉遣いではなく心構えで決まるものなのだア! と自分に言い聞かせながら。

夜空に感動しただけで剥がれるぼろならば最初からやらないほうがよかつたなあと考え、急遽方向転換をすることに決めた。やはり演劇部といつても裏方には荷が重かつたよ…。

ごく短期間だったとはいえ黒歴史を一つ増やしたという悲しみと、この熱い手のひら返しを見て目の前の相手にどう思われるかと心の中で冷や汗をかいたが、デミウルゴスはどうどん上昇していくモモンガさんとおれとを見比べて「なにかありましたらすぐにお呼びください」と優雅に一礼してから背中から蝙蝠のような翼を生やして飛び立つ

た。

すげえ。人間から蛙の顔になる過程が見ていたはずなのに目で追えなかった。

×××

モモンガさんを追ったデミウルゴスが小さくなつて見えなくなった頃に、おれも真つ直ぐ歩いてナザリックの外を目指す。目的地は言うまでもなく闘技場で報告されていた草原だ。

おれのいたところでは草木なんてのはドーム内に建設された室内公園ばかりにしかなくて、そのどれもに「芝生に立ち入らないください」と注意書きが設置されていた。けれど今この場所ではそんなものは一つもないはずだ。

一度、古い漫画でよく見るような、草のうえで寝転ぶということをしてみたかった。そうして空ばかり見上げて歩いているせいか何度か墓石や枯れ木に足を取られたが、無事に草原まで辿り着いた。草の分厚い場所を見つけると身体をそこに横たえる。満天の星空を見上げて、おれは今憧れたシーンを自分の身体で体感している。

ああ幸せ。これもうこのまま寝れる。

もったいないと思いつつも、一度そう考えると意識が少しずつ微睡み始める。

聞こえてくるのは静かな風の音と虫の声。そして「シュヴァイン様！」という悲壮感に満ち溢れた悲鳴だった。

：豚君、癒しの時間終了のお知らせですう。

眠気に支配され始めた身体を緩慢な動作で起こすと、ナザリックのほうからものすごい勢いで走ってきている子供の姿が見える。あれはアウラだ。あれと表現したもののおれたちの距離は瞬きをするたびに近くなり、残りの距離が五十メートルのところまで伸びをし、身体がほぐれたことを確認する頃には、すでにアウラはおれの目の前に駆けつけていた。

この記録なら世界も狙えることだろう。

「どろどろなさったんですか！ もしかしてお身体の調子がよくないですか!? デミウルゴスが言っていたんです、シュヴァイン様は先日お身体の調子がよくないようだったから守護者たちで気を配らないとだめだって！ どうしよう、どうしよう！ とにかくナザリックのほうへお連れしなきゃ……でも頭を動かして大丈夫なの？ あたしの勝手な判断で至高の御方になにか取り返しのかないことがあったら……！」

「落ち着け」

反応が完全に心臓発作で倒れた人を助けようとして空回りしているやつのだ。

おれは草原で寝転んでいただけでそんな重篤な症状に陥ってはいない。強く頭を

打ったわけでもないから動かしても問題ない。というかそもそも、そんなに心配される謂れない。

けれども右往左往しているアウラの顔は見ているほうが心配になるほど悲壮感に溢れていて、目尻には涙が溜まっている。

これあかんやつや。そう判断して、まずは「ぼちん」と両手を打ち鳴らした。

突然の大きな音にアウラの思考は止まったようで、涙を引っかけたままの目をこちらへ向ける。

ここでハンカチの一つでも取り出せば実にジェントルメンな対応だが、生憎そんなものは持っていない。もう服の袖でいいだろうかと雑な考えが頭をよぎったが、この外套はモモンガさんに提供されたものなので少しばかり気が引ける。魔法によって生み出されたものを普通に洗濯して返却するのもどうかと思うが、今はその話題はひとまず置いておこう。

拭くものがないのでおれは大人しくなったアウラの目尻に溜まった水滴を親指の腹で払い、手のひらにすっぽりと収まる小さな頭を撫でる。うわー親戚の子の小さいとき思い出すわ。

そしておれに頭を撫でられていると理解したアウラは、もう一度両手をわたわたと動かして慌て出した。あ、だめですかこれ。事案発生ですか？

通報はまずいと今度はおれが慌てて頭を撫でていた手を離れた。

「シユ、シユヴァイン様…が、えっと、倒れているって…シモベたちに聞いて…」

「落ち着けアウラ、おれは少しばかり外の空気を吸いに来ただけだ。心配をかけてすまないな」

「いえ全然そんなことはありません！ あたしのほうこそ早とちりしてすみません！」

「ペーこ！」と子供に頭を下げられると申し訳なくなる。アウラさんめっちゃいい子。

おいおっさん早くお年玉よこせよとか言ってくる成長した親戚連中のガキどもとは大違いだ。

モモンガさんの指示でナザリツクの隠蔽工作をしているのは知っていたが、まさか実際に顔を合わせるとは思っていなかった。…そうですう、あのときデミウルゴスに言ったのは口から出まかせですう。なので共犯者を発見したとばかりに「どう？ 一緒にごろろしない？」と声をかけようかと思っただがそれこそ事案と言われるような気がして口をつぐんだ。

さて急病患者疑惑も晴れたので、もう一度草原に横になる。

しかし「おれのことは気にしなくていいぞ」とアウラに告げたところ「至高の御方を護衛もつけずにお一人にするなんてできません！」と返ってきた。ブルータスおまえもか。

ちよこん、と効果音が聞こえそうな動作でアウラはおれと一人分の距離を置いた位置に座る。これは嫌われているのか、それとも上司としての扱いなのか非常にわかりづらい距離だ。

闘技場でも「自らに使命を課して妥協を許さぬ気高きお方」とか言つてたしな。おれからすればこれは漫画の登場人物の話かなと首をかしげるレベルだけでも。

そんなお堅いイメージがあるのなら、偉そうな支配者像から方向転換すると先程決めたばかりなのだから、ここは懐柔するべく動くべきだ。

子供といったらお菓子だろう。安直な意見だが今のところそれしか打開策がない。

あとで食べようと持ってきていた茶菓子の残りを包んだ懐紙を取り出して、おれはそれをそのままアウラに手渡した。

「えっ」

「こんな残りもので悪いがな。がんばっているアウラに褒美をやろう」

「い、いいんですか!?!」

「数が少ないから他の連中には内緒だぞ」

メイドに頼めば量産してくれると思うけれども、それには時間がかかるので割愛する。

子供ってほら、ちょっとだけとか、自分の特別なものとかそういうのが好きじゃな

いですか。

これでアウラが「こんな子供っぽいご褒美なんていらぬわよ！」と言い出すようなおませさんタイプだったら今のおれに打つ手はないので後日再挑戦しようと思つていたが、想像していたよりも喜んでくれたようだ。

オツドアイをきらきらと輝かせてお礼を言われた。

「ありがとうございます、シュヴァイン様！」

うっ…：打算だらけの贈り物だったのに、悪意のない笑顔がまぶしい。

アウラはそれはもう大事そうに茶菓子の包まれた懐紙を自分の上着の内側にしまい込む。硬い焼き菓子なので簡単に潰れることはないと思うが、少し時間を置いては菓子のある位置を確認してにこにここと笑うその姿に罪悪感というかいたたまれなさがちくちくと刺激されている。

おとなになるってかなしいことなの…。

結局このできごとで眠気は覚めてしまい、夜空に集中することもできなくなつてしまったので、おれがアウラに見送られて第九階層まで戻ることになったのは言うまでもない。

走れ豚

豚は激怒した。必ず、かの人畜無害なギルド長に一つ言わねばならぬと決意した。豚には戦略がわからぬ。豚はしがない盗賊である。他者の持つているアイテムを奪い収集することを趣味にして暮らしてきた。そして面白いと感じることに對しては人一倍に敏感であった。

×××

村を助けに行つた？ はあん？ 襲撃しに行つたんじゃないやなくて？

いくら「脱偉そうな支配者宣言」をしたからと言つてもここまで崩すつもりはない。

あくまでも心の中で唱えた不服は口からこぼれ落ちることはなかった。

しかし問題はそこではない。

「もうこれも一種の芸術じゃあないか」と雪崩を起こしたアイテムの山に諦めを抱き始めた今日この頃。さぼりの事実を隠蔽して遊びに来たようとモモンガさんの部屋にやってきたら、なんとということでしょう部屋がもぬけの殻だったでござる。

なんで部屋の主の許可なく部屋に入れたんだという質問に対しては不可視化と隠密行動と鍵開けのスキルを極めたおれに入れない場所はないと言っておく。ついでに報告すると天井裏からこの部屋に侵入したので、入り口を警護しているやつにばれると非常にまずい。

自分の護衛を振り切ってやってきたので、追いつかれる前にモモンガさんの部屋から早々に退室する。そうして行方不明のモモンガさんを探しているところでセバス・チャーンに遭遇、まさかの報告を受けた。そして冒頭に戻る。

どうやらモモンガさんは「遠隔視の鏡」を操作することを得しようががんばっていたらしいのだが、偶然うまくいったところでどこかの兵士に蹂躪されている村を見つけたらしい。

そしてそれを助けるべく〈転移門〉で外へ向かったそうだ。

セバスからモモンガさんの動向を聞いて、真つ先におれが感じたのは怒りであった。

おれたちは今でこそ死の支配者や石化の蛇という見てくれだが、元は人間だ。人間が人間を助けることはなにも不思議ではないだろう。むしろ推奨すべきよい行いだ。けれどもおれが感じたのは村が蹂躪されている事実に対する驚きや同情よりも、モモンガさんがおれを置いて外へ出て行ったことに対する怒りであった。

こう言うとおれがめんどくさい彼女かなにかのようでも気持ち悪いのだが、今

の心情はその一言に尽きる。おれも連れてつてよ！ 外！ おんも！ おれだつてお外で遊びたい！

そうしてちりちりと燻り始めた憤怒の炎はどうにも収まりそうにない。

これは、おれたちのこれからのためにもモモンガさんに一つ言わねばならぬ。

お供も連れずに天体観測に出たことでモモンガさんと一緒にセバスに怒られてから十二時間も経っていないが、じつとしてはいられない。そしてお供も連れてはいられない。あいつら遅すぎ。移動速度上昇Vと装備アイテムとドーピングの力を舐めないでほしい。

部屋に戻り装備を整え、移動速度に関する課金アイテムを取り出したところで、ドレスルームに収まらないため壁際に転がしてある鏡に映った自分と目が合った。これから向かうのは人間の村なのだから蛇の髪はまずいのではないだろうか。ついでに鱗模様の皮膚も、健常者から見れば新種の病気のように思われるのでは。

そうして「ないよりはましだろう」と、露出していた頭と腕の装備を入れ替えた。

てれつてつてー、ガスマスク。効果はほんの少しばかり防御力が上がるのと、毒に關するバッドステータスが無効になるのと言うまでもない。

さらに腕の模様を隠すのに装備したのはもこもこしたガントレットだ。名前をクマサンハンドという。クマサンヘッドとクマサンボディという装備を揃えることでクマ

サンになれる、ユグドラシルの着ぐるみ装備シリーズの一つである。無論おれはヘッドとボディも持っているけれども、人目につく場所へ行くとわかっていてそこまで自分を捨て切ることはできなかつた。

さすがの豚君も羞恥心には勝てない。

行ったり来たりと忙しいおれを心配していたメイドに「翻訳：豚君、おんもに行くからあとよろしく」とだけ告げ、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを発動させてまずは第一階層まで転移した。そしてここからが真剣勝負である。

ユグドラシルのゲーム仕様上では行ったこともない場所に転移用のスクロールは使えない。

こちらの世界ではわからないけれども、着地地点が村のど真ん中だった場合の危険性を考えれば使用するべきではない。

ということでおれはここから目的地の場所まで自分の足で向かわなければならぬのだ。

背後から迫る護衛という名の追跡者からおれが捕まるか。それとも逃げ切れるか。

まさに生死をかけた戦いが火蓋を切った！ …いやこれで捕まったらしても死にはしないとと思うけど。

「負ける気が！ …まるで！ …しないけどなアツ！」

課金アイテムによって装備と常時発動能力パッシブスキルが数時間底上げされた今のおれに追いつけるものなどナザリック地下大墳墓にはいないだろう。課金アイテムに勝るものなし！

後ろからおれを追ってくる護衛の居場所は盗賊スキルの「標的搜索」タレゲット・リサーチでなんとかわかる。

そしてモモンガさんとアルベドがいるだろう場所もなんとなくわかる。

マジックポイントを消費して使う特殊能力ススキルの効果範囲がどれほどのものなのかは把握し難いけれども、ゲームで使用していた頃と比較すれば随分と広いようだ。

視界にはマップもコンソールもないので「ここだな！」というように明確な地点がわかるわけではないが、間違いなくこつちだ、という根拠のない自信が腹の底から湧いてくる。ついでに言うマジックポイントを使用した感覚もついてくる。なんとも表現し難い感覚だ。

そうしておれは自分でもどうやって認識して走っているんだと言いたくなるような速度で森の中を駆け抜けていた。

木の枝から枝へ飛び渡り、岩を蹴って、草に靴跡すら残さぬ軽やかさで地面を踏む。

まるで身体が「なにか」を覚えているように、普通の人間ではありえない身体能力で障害物をものともせず突き進んでいくのだ。

こ、これは…

忍者だ！ 今のおれすごく忍者してる！ 漫画で見たことある！

忍びはアサシンの上位職なのだからユグドラシルプレイヤーとして取得しているのは当たり前なのだが、頭に入っているのと同様に経験するのとはわけが違う。というか取得した職業がアサシンだけだったとしても木から木へ飛び移るくらいなんの問題もないのではないかという考えが一瞬過ったけれど、こういうのは気持ちが大それた首を振った。

「取っててよかった忍者職！」と取得していた職業が思わぬ実力を発揮したことに喜んでいたところで不意に身体が動くのをやめた。

馬の蹄の音がする。

これが「普通の人間では遠すぎて聞こえるはずのない音」というのは今のおれには知る由もなかったのだが、警戒して不可視化と隠密をもう一度発動させる。

忍びは隠蔽系スキルの効果を底上げしてくれる能力を持っているので、今のおれはレベル80以下の相手には認識することができない。

そうして木のうえで息を潜めて待っていると、現れたのはやはり馬に乗った数名の騎士だった。

最初はいいつらが村を襲った兵士かと思ったのだが、それにしても鎧についた血の匂

いは非常に薄く、時間が経ち過ぎていくように感じる。

話を聞いているとこの騎士たちもどうやら村へ行くようだ。ここは情報収集のためにも便乗させてもらうべきだろう。

木のうえから飛び降りて、馬と一緒に並んで走っても誰一人としておれに気づく様子はない。つまりレベル80を超える人間は誰もいないということだ。

おれは先頭を走る指揮官らしき人物の後ろにつくと、その足元で揺れている影に身体を滑り込ませた。影潜みの術という。名前からして効果は想像できるだろう。

これも隠蔽系のスキルの一つなのだが、この特殊技術の使用者が影に隠れている間は絶対に攻撃を受けることはない、しかしその反面で影に隠れている間は絶対に攻撃することができないというのが特徴だ。ユグドラシルのときには他ギルドを見つけるのにとっても重宝した。

ただし隠れた影の持ち主が死亡した場合は問答無用で吐き出されるので、できれば一番強そうなやつに寄生したほうがいい。おれが今この部隊を率いている男の影に滑り込んだのも、そういった理由があるからだ。

：

そしておれが影に滑り込んで、ほにやらら時間。

不可視化も隠密も切れたので影から出た瞬間見つからるだろうなあと考えたり、心の中

で歌ってみたり「おんまはみんなあ、ぱっばか走るう（小声）」して、もう太陽が西に傾き始めた頃に、一団は村へ到着した。お前ら遅えよ。おれだったら四分の一時間で到着したわ。

しかし無断でただ乗りしている以上は文句も言えない。

影の中から意識を研ぎ澄ませたところで、目的の人物はこちらへ悠々と歩いてやってきた。

「初めまして、王国戦士長殿。わたしがアインズ・ウール・ゴウンです」

フアツ!?

誰だお前。いや言うまでもなくモモンガさんだろう。声と体格は完全に一致している。その後ろには全身がちがちの甲冑に覆われているものアルベドらしき人物の姿も見える。

なぜモモンガさんがギルドの名前を名乗っているのかはわからないが、なにか考えがあつてそうしているんだろう。

しかしおれもひとのことを言えた義理ではないが、登場した自称アインズさん（○）の格好は一言ではとても語り尽くせないひどいものだった。というか仮面の存在感がたくましく、それだけで劇的ビフォーアフターになっている。なんで装備するアイテムに嫉妬マスクを選んだし。

あまりにも衝撃的過ぎるモモンガさんの姿に「村について発見次第すぐさま一撃、二撃ほどお見舞いしてやろう」という意識もどこかに飛んでいつてしまった。これ完全に
出るタイミング逃したやつ。自分の身体が影の中に溶け込んでいなければ、両手で顔を
覆っているだろうと予測できる程度には無力感に苛まれていた。

そうしてとりあえず、二人の間で交わされる会話に耳を澄ませる。

どこかでさくつと登場できる隙間があるはずだ。

と、思っていたのだけれど話が進むにつれて影から出るタイミングが遠ざかってい
く。

そうして最終的におれが寄生している戦士長：ガゼフ・ストロノーフは村人たちのた
めに死ぬ覚悟でアインズさん〇と握手を交わして村を出た。おれを影に溶かしたまま。

おれの気分は完全にドナドナである。

：

それでもおれがこの男から離れなかったのは、この男の向かう先に「なにか」がある
と確信していたからだ。

おれは今腹の底がざわめくのを感じている。

心臓の音がうるさいと感じるほどおれを苛んでいるのは、えも言われぬ興奮だった。

不幸中の幸いか、髪の毛の蛇の威嚇音は低かったので、馬が草原を駆け抜ける蹄の音に掻

き消されている。けれど隠密の効果が切れている以上、声ばかりはあげてはならぬと、おれは無言で溶けた手のひらをきつく握りしめた。顔が見える状態だったならば、今のおれは間違いなく満面の笑みを浮かべていることだろう。

：兵士に蹂躪されたという村を見たときにおれの内心で真つ先に生まれたのは、大きな声では言えないけれど、それは「落胆」だった。

盗み聞きした会話によれば死の騎士^{デスナイト}で倒せる程度の兵士に、容易く陥落させられた村だ。モモンガさんが来なければ今日という日に地図からなくなってもおかしくなかった。：この世界にわざわざこの村の名前を明記している地図があるのかはわからないけれど。

つまりおれにとってはあまりにも——「難易度」が低いのだ。

ただ金を払って手に入る重版物ごときに、いったいなんの意味があるだろうか。集める価値があるというのは、稀少性のあるものにこそ与えられる評価だ。そういう点で、まさにユグドラシルというゲームは素晴らしい環境だった。

まず初期状態の装備品がどれほど弱かろうと、ユグドラシルのアイテムはデータによつて強化していくことが可能だという点。大抵のゲームも装備を強化することは可能だろうが、限界が存在するものが大半だ。なんの面白みもないそれらと比較して、ユグドラシルは例えひのきの棒であろうと強化次第では勇者の剣になりうるゲームだつ

た。さすがに世界級ワールドアイテムには劣るのだけれど、運営が特別設置したアイテムと比べてやるのは酷だろう。

まあつまり、気に入った外装があればどこまでも強くできるのがユグドラシルの特徴だ。その強化のやり方も製作者によって個性が現れる。それは唯一無二の稀少性と言えるだろう。

その「稀少」を余すことなく集めることが、おれにとって、なにに勝ることもない悦びなのだ。

大切なものは——スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンでも、これまでギルドの奥地で大切にされてきたのだから、よそ者の手に奪われぬよう仕舞われているべきだろう。できれば何人も騎士に警護され、魔法防御を何重にもかけられた場所がいい。攫われぬよう奪われぬよう大切にされてきた稀少なアイテムを手に入れることができたなら、それはまさしく至上の悦びになるだろう。

だから見るからに難易度の低いあの村は、おれにとってまるで価値のない場所だった。

兵士に蹂躪され死体が転がっていたという話を聞いても「へえ」としか感じていないおれ自身に驚きを隠すことができないが、むしろ驚いていることに驚いている冷静な自分が心のどこかに引っかかっている。これをモモンガさんが知れば軽蔑するだろうか。

それともモモンガさんもおれと同じように、心のどこかで変化が生まれているだろうか。

話を戻そう。つまるところおれが興奮しているのは、これから、より稀少ななにかが手に入るのではないかと期待しているのだ。

例えば国の平穩を維持している魔法の冠が手に入るかもしれない。

例えば凶悪な怪物を封印している聖剣が手に入るかもしれない。

そんな子供が布団の中で寝る前に妄想するような情景を思い浮かべて、わくわくしているのだ。恥ずかしくないと言えば嘘になるけれども、それを抑えることができないほど今の自分は高ぶっている。

勿論、この戦士長が向かう先にいる敵が世界級アイテムに匹敵するようなアイテムを所持しているとは露ほども思っていない。けれどもおれにとつて大切なのは「稀少」であることだ。わかりやすく言ってしまうえば「誰かが欲しがるのが欲しい」という悪辣極まりない収集癖なのである。

この性格である以上、人間だったときから大人しいプレイヤーではなかったが、どうにもこの身体になってからおれは我慢をするということがひどく苦手になったらしい。人間ではなくなったことで自己抑制のたがが外れてしまったのか。

しかし、嘆いたところで今更なにかが変わるわけでもない。嘆く必要もなかったが。

閑話休題。

そうしておれの宿主と敵が相見える。

天使の群れを過ぎて、人間の群れの中の一人。

そいつの懐になにかがあると盗賊の常時発動能力パッシブスキルが騒いでいる。あれが欲しい。

タイミングを見て隙あらば奪おうと決めていたのだけれど、宿主は標的に近づくこともままならず地面へ膝をついた。ええー！ちよつと男子い、しつかりしてよお。

影潜みの術には宿主が死んで吐き出されるときには、自ら影から出たときと違い、ヒットポイントが二割ほど減少するというペナルティがある。それを考えるともうこの男の影に隠れている必要はないだろう。

影からおれの身体が構築されたところで、天使の群れが突撃してくるのが見えた。

走れ豚 その二

スレインマジックキヤスター 法国の魔法詠唱者たちが数十にも及ぶ天使の群れを召喚し、男に：ガゼフ・ストロノーフに切りかかろうとしたとき、それは、虚無からぬるりと這い出てきた。少なくともガゼフにはそう見えた。

すぐそこまで迫ってきていたはずの天使たちが光の粒となつて掻き消えていく。

それがなにかをしたことは明確だったが、なにをしたかまではガゼフにはわからな
い。ただ命が助かったという安堵と、どうして助けたのかという疑問の目で、その存在
をじつと見つめた。

「な、何者だ！」

相手の指揮官が吠える。けれどもガゼフの目の前に現れたその異常は、相手の声が聞
こえなかつたかのような、もしくは聞く気もないといった緩慢な動作で背後を振り返つ
た。

そうしたことでガゼフからはその存在の正面が見えたのだが、その存在はフード付き
の土色の外套を身に纏うことでほとんど顔を隠していた。外套のはしから少しばかり
見える顔も、鉄製の仮面に覆われていて容姿を見ることはほとんどできない。

その仮面は目のある位置に穴を開けて、薄い色硝子いろがらすをはめ込んだ珍しい造りをしていた。

ここだけ聞けばさぞや上等な仮面だろうと想像するが、実物を見たものならばそうは思わないだろう。仮面には口元と頬の左右の位置にそれぞれ平たい円筒の装飾がついていた。これがなんのためにあるのかはまるでわからないが、その仮面が人間の顔を模していないことだけは理解できる。異形をかたどったような装飾と鉄色が仮面から重々しい雰囲気を絶え間なく醸し出している。

上等な品であることは間違いないだろうが、ガゼフから見て、高級感という言葉からはとても縁遠い造形をしていた。

さらにこの人物は両腕すらも動物の毛皮で作られているらしいガントレットを身につけているために、肌の色すら確認できなかつた。

外見から得られる情報があまりにも少ない人物だ。

ただ唯一、背丈から性別は男だろうと予想できる程度である。

浮世離れたその格好が、先程カルネ村で別れた魔法詠唱者マジックキャスターを思い出させた。

知り合いだろうか？ 可能性はなくてもないだろうが、しかしそうなれば援助を求めて断られたガゼフを助ける理由がない。

どうして自分を助けたのかと問いかけようとしたところで、相手はすつと手をあげ

た。その手にはカルネ村から出る際にかの魔法詠唱者^{マジックキャスター}：アインズ・ウール・ゴウンから貰い受けた小さな彫刻がつままれている。

いったいこの一瞬でいつの間に奪われたのか。驚愕とともに非難の言葉をかけようとして口を開けば、今度は、相手は実につまらないものを掴まされたと言いたげな反応で、その彫刻をガゼフへ粗雑に投げて返した。なんとまあ凶々しい態度なのだろうか。命を救われたとわかっていても憤慨してしまいそうになる自分をなんとか押さえ、ガゼフは一度大きく深呼吸を行い平静を取り戻した。

今はこのようなことに気を取られている場合ではない。

自分よりも腕が立つと確信できるこの人物が自分に協力してくれるならば、この状況を打破することができるかもしれない。そのためならば盗賊じみた相手だろうと、命の恩人には礼節をわきまえた態度を取るべきだ。

「危ないところを助けていただき感謝する、名も知らぬ御仁よ。そして申し訳ないがもうしばらく私に力を貸してほしい。報酬はいくらでも用意しよう」

さあどう出るか。ここで断られれば、今度こそガゼフはここで力尽きるだろう。

再び魔法詠唱者^{マジックキャスター}に召喚され、じわりじわりと距離を詰めてきている天使たちを睨みながらそう言えば、顎に手をあてて数秒ほど逡巡する様子を見せる。そして。

「あれがいい」

敵側の一人の男を指さしてそうのたまった。

×××

「シユ、シユヴァイン様?!」

「なんでいるんですか」

坊やだからさ。

というかモモンガさん、アルベドの前なのに素が出てます。

戦士長にお手伝いしてくれたら好きなものあげるよ（要約）と言われたので、ちよつと考えるからあいつの持つてるアイテムが欲しいとおねだりしてみた。

まあ手伝う気もないし、手伝わなくても頂戴する気は満々である。アイテム絶対奪うマンとはおれのことだ。それが結果的に戦士長を手伝うという行為になるんだろっけれども。

こういうのを一石二鳥っていうんでしょお、豚君つてばちよー博識い！　なんて頭の中で自画自賛をしていたのだが、戦士長はおれの提案をなぜか「よし」とはしなかった。「人間を報酬に求めるといふのか…!」

あつ違うんですおれそういうのじゃありません。そういう趣味もありません。

戦士長の言いたいことを理解して言い訳をしようとしたところで、戦士長が視界から消えた。そしてその代わりとでも言うようにアインズ・ウール・ゴウン様（）とその従者アルベドが同じ場所へ降臨していた。

これいらぬ疑惑抱えたままじゃないですか！ 転移させるタイミング考えて下さいよお！

そして冒頭へ戻るのであったた。

ガスマスクを装備しているというのに一瞬でアルベドに見破られたのはどういうことだろうか。もしかしておれこんな顔なのか。聞いてみたいことはいくつかあったが、今はそんなことをしている場合でもないだろう。

「なんなんだ、貴様ら…」

驚きと混乱の混ざったような声が聞こえて、おれたちは音源のほうを見た。

モモンガさんが「あとで聞かせてもらいますよ」と耳元で囁いたので、同意の意味を込めてうなずいた。おれもあとで言いたいことがあるんですよお、よくも豚君を置いていきやがって。

豚は激怒した。必ず、かの人畜無害なギルド長に以下略。

おれがモモンガさんの顔を見て、戦士長とのなんやかんやで忘れかけていた怒りが甦ってきている一方で、本人は芝居がかった動きで一步を踏み出す。

「初めまして、スレイン王国の皆さん。わたしの名前は…アインズ・ウール・ゴウン。親しみを込めてアインズと呼んでいただければ幸いです」

少しばかり迷った様子を見せてからモモンガさんが名乗った名前は、やはりギルド名だった。

名乗ったあとにちらりとこつちを見たことから、なにかを考えているのだろうということはわかるが、おれとモモンガさんとのアイコンタクトは成立しないということをごのひとはそろそろ学習するべき。

そうしてとりあえず今は現場は丸投げしておこう、そしてタイミングを見て相手のアイテムだけを回収しようと結論づけたところで、モモンガさんの邪魔にならないような声量で、アルベドがこつそりと話しかけてきた。

「シュヴァイン様はどこまでご存じなのですか？」

「今回村が襲撃されたこと、あいつがそれを指示した人物であること。あいつが周囲の連中と比較して少しばかり上位のアイテムを持っていること…くらいだな」

「感服致しました。私がシュヴァイン様に報告させていただくまでもなかったのですね」

「多少なりと情報に粗があるけどな」

モモンガさんと戦士長の会話が筒抜けだったからね。それくらいはねえ。

「先程取引と言ったが、内容は抵抗することなく命を差し出せ、そうすれば痛みはない。そしてそれを拒絶するなら愚劣さの代価として、絶望と苦痛、それらの中で死に絶えていけ」

「…ああ、そうだ。モ——アインズ」

お前ら全員死刑な（はあと）宣告をしているモモンガさんに待ったをかける。

先程アインズと名乗っていた以上、他の名前で呼ぶのもどうかと思い、またさん付けなのも雰囲気合わないかと判断して呼び捨てにしたが…いいよね？

第なん位階魔法を使うのかはわからないけれど、その魔法に巻き込まれてアイテムが壊れては困るのだ。

「あれをおれに出来ないか。あいつの持ち物が欲しいんだ」

指を差して今度こそ誤解のないように告げれば、モモンガさんは納得したようにうなずいた。

「いいとも。我が盟友よ」

そしておれの標的にされた人間は、今の会話を聞いて自分の腹にきつく腕をあてた。…そうか。そこにあるのか。おれがガスマスクの下で舌なめずりをするのと、相手の指揮官が指示を出すのはほぼ同時のことだった。

「天使たちを突撃させよ！ 近寄らせるな！」

そこから繰り広げられるのは、徹底的な力の差による塵殺だった。

まずレベルの差の問題で、モモンガさんには相手の攻撃はまるでダメージにならない。
い。

今まで十分すぎる働きをしていた主力の武器が、まるで通じなくなるというのはどんな気分なのだろうか。

威力はてんでないというのに数ばかりが多いので、あぶれた天使がモモンガさんの横に立っているおれのところにもやってくる。魔法詠唱者が装備なしで潰せるほどレベルが低いことから、前衛役までとはいかずともそこそこの攻撃力を持つ「アサシン」「忍び」の職業持ちのおれの相手になるはずもないだろう。天使の首にあたる部分を掴んで地面へ投げ飛ばせば、それだけで光の粒になって消えていく。手応えがなさすぎて、ゲームの序盤でよくやった下級治癒薬集めを思い出す。

…こいつらはアイテムをドロップしてくれないようだけれど。

「そんなはずはない！　ありえない！　上位天使がたつた一つの魔法で滅ぼされるはずがない！」

吠える男はモモンガさんやおれを指差してなにものだと尋ねてくる。

そうですわいたちが変質者です。仮面的な意味で。

相手は万策尽きたのか。いや、まだだ。指揮官の男はついに懐から「それ」を取り出

した。

ああ、魔封じの水晶だったのか。しかも色合いからして超位魔法以外のものなら封じ込められるタイプのものだ。

水晶を見た瞬間から髪の毛の蛇たちが興奮して鳴いている。

けれども「さあお仕事の間だ」と身構えたところで今度はおれに待ったがかかった。待て。至高天の熾天使セラフ・シエンピリアンなどが出てきた場合を想定して動くべきだ」

演技がかったモモンガさんの声は、おれを苛立たせるのに十分だった。はあん？

「だから水晶が壊される前に奪うんだろう」

「そんなことを言って奪取が間に合わなかったらどうするんだ。属性が極悪のわたしたちでは攻撃を受ければ大ダメージを食うだろう。水晶の中身もわからずに賭けをして、無暗に突っ込んでいくのは危険すぎる」

「いやいやいやなんのための耐久装備だと思ってるんですか」

「その台詞はまず耐久装備とやらを身につけてきてから言ってください。なんですかそのマスクとガントレット」

「ガスマスクとクマサンハンドです！」

「いや知ってますけどね！ さつきはいいよなんて言いましたけど前言撤回です！」

「あ、あの…お二方…」

両者譲らない問答で演技の生皮が剥がれていく。先程とは違う意味の興奮で心配そうなアルベドの声も耳に入らない。

いやそんなことよりも早く奪いにいかないと魔封じの水晶が、水晶が使われちゃう！

「ふ、ふざけるなよ貴様らッ！」

モモンガさんの制止を振り切って走り出そうとしたところで「ぱきん」と嫌な音がした。

目映い輝きが、暗くなり始めた草原を照らし出す。その光源は純白の翼を広げた一匹の天使だ。

「見よ！ 最高位天使の尊き姿を！」

魔封じの水晶は使い捨てのアイテムだ。つまり、もう、

「はア？」

草原に、聞いたことのない低い声が響いた。

よく聞いたらおれの声だった。

豚の蛇は不機嫌

隊長が、ニグン・グリッド・ルーインが、切り札である威光ドミニオン・オーソリテイの主天使を召喚した直後。その本人が掻き消えるようになってしまったことに気がづいたのは、彼のすぐ横に震えながら控えていた部下だった。

そして一拍間を置いて草原中に響き渡るような絶叫があがる。

皆が驚き、思わず異教徒どもから視線を外して音源のほうを見れば、元いた場所から五、六メートルほど離れた位置で、ニグンが大声をあげ芋虫のようにのたうっていた。

そのすぐ隣には異教徒の一人が立っていて、悲鳴をあげるニグンを見下ろしている。

「お、お前らッ…早く！ 早く私を助ける！」

先程まで健在だったニグンが地面に這いつくばって草を噛みながら捲し立てた。

彼にいったいなにがあったのか。やつはいったいなにをしたのか。

一つ言えるのは、やつがこの一瞬であの距離を駆け抜け、ニグンを連れ去り、なんらかの危害を加えたということだけだ。目で捉えることができない動きという人間の常識をはるかに超えたものに戦慄して、そして同じ道をたどることを恐れて、そこから隊長を助けるべく動けるものなど誰一人としていなかった。

「もう一本いつてみようか」

異教徒が——化け物が、いつの間にか携えていた刀を大きく振り上げる。

そしてその切っ先がためらいなくニグンの左腕へと落とされた。

再び絶叫が響き渡る。

そこで陽光聖典の者たちは、先程の悲鳴と、化け物の言葉で、ニグンの右腕がすでに失われていると理解した。そしてこれからその命すら奪われることも。

なんと無慈悲で、邪悪で、陰惨な化け物なのだろうか。

この生き物こそを「邪神」と呼ばないのならば、いつたいなんと表現すればいい。

自分を召喚した者に指示を与えられるのを待っている威光ドミニオン、オーソリテイの主天使の輝きが、草の地

面へ広がっていく血溜まりを克明に映している。そしてその血溜まりへ顕現した邪神からは、主天使の神聖さを容易く飲み込むほど赤黒く色づいた邪悪な覇気が立ち上っていた。

それが化け物——シユヴァインの装備した伝説級武器「妖刀瓶割」レジェンドのエフェクトによるものであることは、知る由もない。

「もう本つ当に最悪だわ。お前、空気読めよ。空気を読んで行動するのは社会人として基本中の基本だぞ。…まあ第七位階だったからまだいいけどさあ、問題はこれでさつきモモンガさんが言ってた通り魔封じの水晶セラフ、ジ・エンペリアンに至高天の熾天使なんかが入ってた場合よ。

た声が頭のうえから降ってくる。どこからか、部下の小さな悲鳴が聞こえた。

「だから耐久装備とやらを身につけてきてから言え、と言ったんだ」

「正確には言ってください、だろう」

「結局アイテムが手に入らなかったことは謝罪しよう。しかしやつあたりをしてくれるな」

「主天使ごときで本気になった自分が恥ずかしいだけです。第十位階の魔法を期待していたおれの気持ち考えてください」

「シュヴァインさん、口調、口調崩れてます」

「ん、んん」

後ろを振り返って魔法詠唱者マジックキャスターに文句を言うその頭皮には、髪の毛など一本も生えていなかった。

毛髪の代わりとでも言うように、そこでうごめいているのは無数の蛇だ。

こいつは、本物の化け物だったのだ。

なにを相手にしていたのかという事実を知り、威光ドミニオン・オーソリテイの主天使の力をもつても勝つことは不可能だという途方もない現実を知り、急激に腹の底が冷える。けれどもニグンが目の前の化け物について考えることができたのはそこまでだった。

「ぎゃあああっ！」

三度目の絶叫が口から溢れる。空に一本の足が飛んだ。

「私たちの敬愛すべきお方にツ、至高の御方に！ 私たちを見捨てずに残ってください。慈悲深きお方に痛みを与えるなんてええええつ！ ごみである身の程を知れ！ このままツ、苦痛を与え続けてやる！ けして、けして楽に死ねると思うなよおおツ！

貴様には許されざる罪が二つもあるんだからなああああ！ なぜ、シユヴァイン様が欲されたときに魔封じの水晶を献上しなかったああつ！ それだけで許されない！ 万死に値するのに！ あまつさえシユヴァイン様に痛みを、いいいいたみを、いたみを与えるなんてええええ！」

ざく、ざく、ざくり、ざく。

後ろに控えていたはずの騎士が前に出て、悲鳴とも言えるような声を発しながらニグンの足を切り飛ばした。そして何度も、何度も同じところをバルディツシユで切りつける。寸分変わらず傷口を抉られるたびに助けを求めるニグンの悲鳴が草原へ木霊した。騎士——アルベドの凶行に彼女の主人たちの「うわあ」「ひえ」という言葉も空気に溶ける。

この状態でもう一度威光の主天使に命令を下すことのできる気力は、もうニグンには残っていないかった。

スレイン^{マジックキャスター} 魔法詠唱者たちは、ただその怒りが自分へ向けられないようにと一身

に祈る。

空が「ばきん」と割れたことに気づく者は二人を除いて存在しなかった。

「なんですか、今の」

「探知魔法に対する防御が発動したんですよ」

「やだっ……わたし見られてる……?」

「その不快なセクシーポーズをナザリックでやるのだけはやめてくださいね」

やる気のない返事をしてから、化け物、シユヴァインはアルベドに向き直った。

「そこまでだ」

あと数センチでもう一度その刀身が肉に届こうとしたとき、バルディツシユが動きを止める。

さんざんに蹴られたニグンは口の周りをよだれで汚し、過剰に与えられた痛みで痙攣を起こしていた。草原のうえに散った血液や肉片やらで見ても無残な光景だったが、それでも甲冑ごしに見つめてくる視線は「まだ足りない」「なぜ止めるのか」と訴えている。すぐにも作業を再開させたいのか、バルディツシユの切っ先がぶるぶると震えている。

「聞いていただろう。こいつは、おれがアインズからもらった所有物だ。まだおれの鬱憤が晴れていない」

けれどもシュヴァインがそう伝えればアルベドははっと吐息をこぼして佇まいを直し、深く頭を下げた。数十秒前の姿からは想像もできないほど気品溢れる一礼だ。

「そのようなお考えに気づくことができず、大変申し訳ありません。ましてや取り乱してシュヴァイン様の持ち物を傷つけるなど、自害してお詫びすることしか……」

「気にするな。どうせあれは鬱憤のはけ口として使い捨ての肉人形にする程度のものだ」

「ありがとうございます。シュヴァイン様の広いお心に感謝致します」

「ああ、お前の全てを許すとも。……おれはこのあとあれを引きずってナザリックに戻るが、アインズはどうする」

シュヴァインが「あれ」とニグンを顎でしゃくつてからモモンガ：アインズの今後を問えば、一度村のほうへ戻ると返答した。

そして手柄は「アインズ・ウール・ゴウン」のもので構わないなという言葉にうなずいて同意を示す。邪魔者を討伐したところで報酬なんぞは出ないだろう。ならばわざわざ面白みのない村に出向いてもまるで意味がない。

それに村にはあの戦士長がいるはずだ。

戦士長との別れ際の会話を思い出せば顔を合わせたくないとも言ふ。

最初は稀少価値のある持ち物だけが目当てだったとは言え、結論だけ述べればシュ

ヴァインの行為は彼の言う「人間を報酬に求める」という結果になったのだ。

ああいう人間はこういつたことを最も嫌うタイプだろう、しかも正当性を真正面からぶつけてくる類いの。すでに五体満足ではないあれを見ていつたいなにを言われるか。詰まるところ、めんどうくさかった。

「シュヴァイン様が自ら運ばずとも、シモベに運搬させればよいのでは……いえ、出過ぎたことを申しました」

「ああ、構わない。ただ帰りがてらに遊びすぎていろいと汚す可能性があるからな。その片付けだけ頼みたいとシモベたちには伝言してくれるか」

「畏まりました」

「あとは……あれはどうする?」

今度は威光のドミニオン・オーソリテイ主天使を顎でしゃくる。

しかしそれを見るシュヴァインの表情は、顔に感情が現れにくい彼にしては珍しく、少しばかり歪んでいた。

魔封じの水晶を奪い損ねたことをまだ諦め切れていないのだろう。

いくら威力の低い凡庸な魔法であったとしても、敵があれほど絶賛していたのだ。シュヴァインにとつてはそれが「稀少価値」を証明するものになるのだから、ぜひとも奪取しておきたい一品だった。

「時間が経てば消えるだろうが、その様子だと見るのも嫌だと言いたいようだな」
「そうだともし」

「わかった。ならば他でもない盟友のわがままだ。聞き及ぶとしよう——…^{ブラック・ホール}暗黒孔」
小さな黒い点が、アインズ・ウール・ゴウンの指先から生み出される。

その点はどうどんと拡大して空虚な穴になり、音もなく周囲の空気を食らい始める。
瞬く間に成長した穴はやがて威光の主^{ドミニオン・オーソリテイ}天使すらも飲み込んで消えた。

天使から放たれていた輝きが断たれて、辺りには静寂と絶望の夜が訪れる。

「他の連中はまかせて構わないな？ アインズ」
「勿論だとも、シユヴァイン」

それだけを告げ、草原から化け物の姿が一つ消えた。

幕間前篇

「アインズ・ウール・ゴウンの名前を世界に轟かせる……。なんかゲームの目標みたいですね」

「あなたがち間違つてはないですけどね」

そりやあそうだ、ゲームの中からこちらの世界へ転移してきたんだもの。

それが現実になったところで、会社と自宅を往復するだけの以前と同じような生活ができるはずがない。というかしたくない。ここがどこなのかはわからないが、こうして来てしまった以上は、必要な情報を得て適した目標を立てるべきだろう。

あれから草原から帰ってきたおれたちは、今後についての話し合いをしている。

どうしてこんなに真面目に額を突き合わせているのかと言えば、あと一時間もすれば、守護者たちを含めた上位の部下が玉座の間へ集まることになっているからだ。

発言のつじつまを合わせるための緊急作戦会議とも言う。

「目標は世界征服ってことですか？ やだあモモンガさんたら魔王う」

「ち、違いますよ！ そんな大層なものではなくてですね、わたしたち以外に、この世界に他のプレイヤーがいる可能性だつてあるわけじゃないですか」

「なきにしもあらずですね」

「アインズ・ウール・ゴウンはよくも悪くも有名なギルドだったので、もしもなんらかの活躍でこの世界に名前が轟けば、その名前に釣られたプレイヤーをおびき寄せやすいと思っんですよ」

「そうして油断しているところを背後から奇襲する、と…完璧な作戦だ」

「しませんよ!? 超耐久型のシュヴァインさんがいるとしても、何人のプレイヤーがこの世界に来ているかもわからない現状では、敵を作るのはあまりに危険だと思います」

「PKの血が滾るう…」

「やめてください」

横槍を入れつつ話を聞いていくと、最終的な結論はこうであった。

「アインズ・ウール・ゴウン」を名乗り、その名前を世界に知らしめるべく行動するのだ。

おれたちのギルドの名前はいつの日かプレイヤーの耳に入ることになるだろう。その人物が敵になるのか、それとも味方になるのかはわからないが、名前を知れば必ずなんらかの行動を起こすはずだ。そしてそれまでに情報網を敷いておけば、そのプレイヤーの取った行動は情報としておれたちの耳に入ってくる。

まるでいたちごっこのような図式だが、まだ見ぬ相手を誘い出すには最も有効な手段だろう。

本当に理想的な状態をあげるなら、このナザリック地下大墳墓に引きこもった状態で
プレイヤーの存在を知ることができたら最も素晴らしいのだけれど、理想論は理想論
だ。こちらの情報も多少犠牲にしなければ、標的を捕らえることなどできないのであ
る。

「わたしとしてはギルドメンバーが築いてきた結晶の名前を軽々と名乗ること自体、気
が引けたんですけど…」

シユヴァインさんに相談もせず実行してすみません、と告げる骸骨に溜め息しか出な
い。そんなおれの様子に、不安からなのか机のうえで組まれた骨の手がもじもじ動いて
いる。

「モモンガさん真面目ですなあ。別にいいじゃないですか、今日からおれがアインズ・
ウール・ゴウンな！　で。それでいつかギルドメンが帰ってきて怒るようなら非常事態
だったんですう今日からおれは元に戻りますうって開き直ればいいんですよ」

「…そうでしょうか」

「おれはそんな作戦も考えずに世界各国に奇襲をかけにいくタイプなんで、戦略やらを
考えるのはまるで向いてないんですよ。モモンガさんの意見を聞いてなるほどと納得
することだって多いんです。ユグドラシルのゲームだった頃はアインズ・ウール・ゴウ
ンは多数決を尊重して動いていましたけど、モモンガさんはもつと自分の考えに自信を

持ってもいいと思いますよ」

「シユヴァインさん……」

「まあそれを発言して実行したぶんだけ責任が付きまといますけど」

「社会人の重荷の部分じゃないですかやだー！」

両手で顔を覆って伏せつたモモンガさんを見て笑い、カップの中の残り少ないお茶をあおる。飲み干したところで「ふう……」と聞こえたので精神が強制的に安定化されたのだろう。

おれの特^ス殊^キ能力には精神作用無効はないので、客観的にモモンガさんを見ているとなかなか面白い反応だと思う。少し体感してみたい気もするが「めちゃくちや鬱陶しいですよこれ」と言われるのであまりいいものでもないようだ。

「でもやはりどちらがアインズ・ウール・ゴウンを名乗るかくらいはきちんと……」

「アインズさんよろしく」

「早すぎます。大切なことなのでもっと論議しましょう」

そんなこと言われましたも豚君が豚じゃなくなったら豚としてのアイデンティティが崩壊するんですけど？ 豚君の名前がギルド名に改名されたら、自分のこと豚君と呼べなくなっちゃう。

「なんですかその豚に対するこだわり」

「まあ正直に白状すると豚じゃなくて牛のほうが好きですかね」

「肉食系男子ですね」

「魚のほうがもつと好きです」

「だめじゃないですか」

「しかしこつちに來てからねずみ肉という選択肢が増えたことに悲しくて悲しくて震える。これはモモンガさん手ずから冷凍マウスを与えられるのも時間の問題かもしれない」

「やったぜ」

「鬼の子か貴様」

相変わらずきやつきやうふと駄弁つて話が議題から離れていくのだけれど、おれにはギルド名を名乗る気がない点と、モモンガさんがギルド長だという点、そして言い出しつぺの法則で「アインズ・ウール・ゴウン」という名前はモモンガさんが名乗ることになった。

「よろしくお願ひしますアインズ・ウール・ゴウン様（〇）」

「シュヴァインさんなんですからそこはモモンガでいいですよ」

「いえっさー」

そうして話は大元に戻る。というか時間がないのだから早く話を進めるべきである。

けれどもおれは先程こつてりしぼられた疲労から、あまり集中できずにいる。肩を押さえて首を回せばこりこりとひどい音が鳴った。

石化の蛇に疲労無効などという素晴らしいスキルはないのである。

「…帰ってきたとき、あれからどうでした？ わたしとアルベドが〈転移門^{ゲート}〉を使って戻ってきたときから、セバスにすごい顔でシュヴァインさんの居場所を聞かれましたけど」

「さんざんでしたよお…：ていうかセバスだけじゃなくてデミウルゴスまでいましたし、あんなに恐ろしいお出迎えは初体験です」

魔法職を持つていない以上、そしておれにリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使う意思がなかった以上、おれのナザリック地下大墳墓への帰還には必ず中央霊廟を通ることになる。そこで待ち構えていた阿吽像の姿を思い出し、おれはぶるりと身を震わせた。

「がんばって引きずってきた木偶人形も没収されちゃったし」

「シュヴァインさんが飽きたら拷問にかけろつて指示は入れていたんですけどね。一言注意しておきますか？」

「いや大丈夫です。あれの使い道はあとともう足置きにするくらいかな、程度だったんで」

×××

草原でのあの雰囲気からして、解散したあとは気づけば数日くらい経過してて「新しい冒険の始まりだ！」とかいう展開になっても不思議じゃないと思うじゃん？

しかしゲームの世界から転移したと言つても、そこが現実になった以上、現実には現実らしい。つまり厳しい。

さんさんに遊びたおして、途中までは「うゝえつゝうゝゆるじでゝ、おえゝつゝ」とかなんとかうめいていた人形から呼吸音しかなくなつた頃、行き道とは違いだからと歩いていたおれは、夜も更けた頃にやつとナザリツク地下大墳墓へ帰還した。したのだが。玄関口とも言える霊廟の左右で金剛力士像の阿吽の如く降臨していたのは、とても厳しい顔をしたセバスと、口元だけで笑っているデミウルゴスであった。

その異様な光景に「やばい」と理解してすぐさま来た道を戻ろうとしたのだけれど「お帰りなさいませシユヴァイン様」と異口同音に言われてしまえば、逃げ道を塞がれたも同然である。

たゝただいまあゝと声をしぼり出す勇気さえわかず、恐る恐る二人を見た。

「いやあこれは怒ってますね、どうですか実況の豚さん」「今までに類を見ない怒りです

よお解説の豚君」というそんな脳内会議で現実から逃避したところで稼げる時間は限られている。

精練された動きの一礼から頭を上げ、まず口を開いたのはセバスだった。内容はやはりというべきか「昨日あれほどお供を連れていけと言ったのに忘れたのかよ」という苦言を尊敬語と謙讓語と丁寧語で表現したものだ。ごめん…ごめんて…。

脱走同然で外に出たとは言え、その行為はおれの想像以上におおごとになつていたようだ。

そこからセバスのお説教にデミウルゴスが参戦し、いかにお供を連れて歩かないという行為が重大なことなのかを語られた。もうやめて、豚君のライフはゼロよ。

「…無論、私どもにシユヴァイン様の行動を制限するというような、恐れ多い意識は皆目ございません。ですが、供を連れずにとまりますと話が変わつてまいります」

「御身になにかあつたときに、私たちが側におらず至高のお身体が傷つくなど、それを想像するだけで恐ろしいのです。至高の御方にはご迷惑だと重々に承知のうえでお願い申し上げます。…どうか、どうか我々に寛大なる御慈悲を」

そうして長い説教のしめには「シユヴァイン様まで…他の至高の御方と同じくお隠れになられたのか」と二人してさめざめと泣かれた。ごめんて。

お前いいかげんにしろよ！ と怒鳴るような説教ならばあつかんべえでもして無視

しておけばいいのだけれど、このようにしずしずと懇願されるような言い方をされる
と、こんなときどんな顔をすればいいかわからないの。

「二人の言い分はよくわかった。今回のことはおれが悪かったな」

「とんでもございません！ 我々がシュヴァイン様に窮屈を強いてしまっているのです
！」

「そうです、セバスの言う通りです！ これも我々の不徳の致すところ、シュヴァイン様
が悪いことなどなにか一つありません！」

それは言い過ぎだろうデミウルゴス。…いや言葉には出すまい。会話で勝てる自信
がない。

その場しのぎに「おれが悪かったですう、今度からちやんとお供つけますう、たぶん
ね」と約束をしたところで二人の顔にやつと安堵の色が浮かんだ。

「ありがとうございます。慈悲深き至高の御方に感謝致します」
「構わないとも」

この調子だとこいつらだけでなく、ナザリックのいたるところで「豚様お隠れ疑惑」と
やらが起きていることだろう。その予測は寸分違わず大当たりしてメイドに泣かれ、近
衛にも泣かれ、おれを探すために派遣された探索部隊にも泣かれることになるのだがそ
の辺りの話は長くなるので割愛しておく。

…

「我々ごときに貴重なお時間を使わせてしまい申し訳ありません」という謝罪に時間のくだけだけはまったくだとうなずきそうになったのを押しとどめ、やつと霊廟の中へ入る。そこにはさも当然のようにデミウルゴスが付き従った。もうなにも言うまい。

セバスは先に帰還していたアルベドからなにやら指示を出されているようで、仕事をこなすために足早にその場を去って行った。

身体一つならばデミウルゴスを従えずともリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで第九階層まで転移できるので、生憎今おれの手元には道具として数えられないお荷物がぶら下がっているの、気安く転移を使えない。

いや正確にはいた、だ。

デミウルゴスが紳士的な態度で「お持ち致します」と交代してくれた。やだ…いけめん…。

「この人形はシュヴァイン様のご興味がなくなり次第、特別情報収集官の元へ引き渡し、情報を得るようにとモモンガ様より伺っております」

「わかった、引き渡す時期についてはまた追って連絡する」

「畏まりました。…ですが…これは…」

「ん？」

「いえ…」

ちらりとデミウルゴスの視線を追いかける。そこにあるのは四肢のうち三つをなくし、顔をよだれや涙、吐瀉物で、そして身体中をこびりついた血で汚した人形の姿だ。破られて乱れた首元や肩にはおれが面白半分で実験体にしたあとがびっしりと残っている。

帰還の途中からこいつが大人しくなったのも麻痺や毒による影響が大きいだろう。一度は呼吸すら止まったので延命措置のために慌てて下位のポーシオンを少量与えたけれど、喚き声が大きくなったので少しだけ後悔した。

でも情報源にするなら生かした意味があった。よかった。めんどうくさくなって何度か放り出そうと思っただけだから…。

「どうした、言ってみろ」

「…シュヴァイン様の持ち物に対する無礼をお許しください。このように汚らしい人形は神聖なナザリツクへ持ち込むにはいささか不釣り合いかと」

「そんなものか」

「はい。差し支えなければ、なぜこのようなものを拾われたのか伺ってもよろしいでしょうか」

「あ…ものすごく子供っぽい理由で恥ずかしいんだがな。欲しかったものをこいつに

横取りされた、とても言うのか。それでかっとなつて憂さ晴らしをするのについて」

「なんですつて?」

「ひえ」

ぎよろりとデミウルゴスの目が人形を睨んだ。

それはもう、見たこともないほど恐ろしい表情で。思わず声が出た。

デミウルゴスが掴んでいた人形の足首からみしみしと音が鳴り、うめく声が聞こえたので、たぶんこれは複雑骨折はまぬがれないだろう。

お、おれのおにんぎよう…。

そうしてきつく人形を睨んでいた宝石の目が今度はこちらを見る。

ぶうぶう、ぼく悪い豚さんじゃないよう。本日二度目の現実逃避を試してみたけれども、厳しい現実がそんなことを許すはずもなかった。

「シュヴァイン様」

「はい」

「…人形をお求めなのでしたら、後日、私がシュヴァイン様に相応しい…いえ、至高の御方に見合う生き物などこの世にはいませんね。失言をお許してください。どのような手を使ってでもシュヴァイン様にご満足いただける人形をご用意致します。ですのでどうか、この人形については…」

「いいとも、おまえにすべてをまかせよう」

「ありがとうございます。この人形にはしかるべき処置をしたあとで、私が責任を持つて特別情報収集官の元へ引き渡します」

「たのんだぞ」

「はい」

× × ×

「あんな目で見られて嫌ですとか言えるわけじゃないですか」

「はあ、そんなことがあったんですね……」

「がちがちで舌とか回りませんでしたからね。正直あのまま食われると思いました」

「味が鶏肉に似てるんですけど」

「やめてよ!」

騒いでいると、不意に部屋の戸が叩かれたので二人揃って一気に黙り込む。顔を見合わせておれがうなずけばモモンガさんが「入れ」と声をかけた。

部屋に入ってきたのはセバスだつた。

「準備が整いました。皆、玉座の間で至高の御方々をお待ちしております」

「わかった。すぐに向かうが、少し外で待っている」

「はっ」

入ってきたときと同じように綺麗な礼をしてセバスが退室するのを見送ってから、おれたちは恐慌状態で顔をつき合わせる。まじかよ知らない間にもうそんなに時間が経つてるとか聞いてない。

「どうするんですかこれ……！ 作戦会議とか言つてなにも相談できてないじゃないですか……！」

「これはもう玉座の間でなんとかするしかないですよ！」

「そんなことを言つて現場で事件が起きたらどうするんですか！」

「そのときはシユヴァインさんがフォローしてください……！」

「いやいやいや、おれたちの間でアイコンタクトなんか成立しないって学習してください……！」

「さつきうまくいったから大丈夫ですよ！ ……ふう、シユヴァインさんは、死なばもろともという素敵な言葉を……存知ですか……？」

「うわこのがいこつむごい」

どうやら逃げ道は残されていないらしい。お互いうなずき合つて、椅子から立ち上がった。

これから向かうのは百鬼夜行ひしめく玉座の間である。

今の気持ち表現するならあれだ。

どう足掻いても絶望。

幕間後篇

これからの指標は「アインズ・ウール・ゴウン」を不変の伝説にすること。

それを至高の御方であるモモンガー——名前を改めたアインズとシユヴァインの両名が厳命したのだから、今後のナザリック地下大墳墓の行動は、なにを置いてもそれが最優先事項となる。

玉座の間で下された言葉は、今もデミウルゴスの胸を打っている。

最高責任者であるアインズを守護する騎士のように、ナザリック地下大墳墓という一団を指揮する隊長のように。威風堂々たるその姿はナザリック全ての者を魅了してやまなかった。

あのお方は、玉座の間で語ったのだ。

英雄が数多くいるなら全て塗りつぶせと言ったアインズに続いて、最高責任者の全幅の信頼を得ているという証明のように受け取ったスタッフで床を叩き、その場にいるシモベたちへのたまったのだ。

「我らはわずかに一個大隊。召喚された者を除けば、千人に満たぬ兵に過ぎないだろう」
「だが諸君は一騎当千の古強者だとわたしは信仰している」

「ならば、我らは諸君とわたしで総力百万と一人の軍集団となる」

「いまだ我々を知らず、眠りこけている連中を叩き起こそう」

「髪の毛をつかんで引きずり降ろし、眼を開けさせて知らしめるのだ」

「連中に恐怖の味を教えてやる」

「連中に我々の足音を教えてやる」

「天と地のはざまには奴らの哲学では思いもよらないことがあると思ひ知らせるのだ」

「わたしは諸君の忠義を信じてやまない」

「どうか、どうか、諸君らの忠義を一本の矢として、その力をわたしに見せてほしい」

「征くぞ諸君」

「これはアインズ・ウール・ゴウンの名前のための聖戦なのだ」

「そう、これはわたしたちの矜持を賭けた戦争だ」

「諸君。わたしは戦争を、地獄の様な戦争を望んでいる」

「諸君。わたしに付き従う大隊戦友諸君」

「君たちは一体なにを望んでいる？」

「さらなる戦争を望むか？」

「情け容赦のない糞のような戦争を望むか？」

「鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐のような闘争を望むか？」

シュヴァイン様の御心のままに、と打ち合わせたわけでもなく揃った声が玉座の間を満たす。

「よろしい、ならば戦争だ」

歓声が玉座を満たした。

まさに「至高」という言葉が相応しい御方々だと、デミウルゴスは恍惚とした溜め息を吐いた。

だからこそお二人のために、我らナザリック地下大墳墓の者はこの世界を献上するべく尽力しなければならぬ。

「世界征服なんて面白いかもな」と言ったアインズの声が頭の中で何度も反響する。

そうして先程のシュヴァインの演説で、その意思は確固たるものになった。

「至高なる御方の真意を受け止め、準備を行うことこそ忠義の証である。各員、ナザリック地下大墳墓の最終的な目標は宝石箱を——この世界を至高の御方々にお渡しすることだと知れ」

沸き立つシモベたちは、玉座の間を退場したあとで交わされたモモンガとシュヴァインの「なんですかあの恐ろしい演説」「よろしいならば戦争だ」「やだこの豚さん過激派」というやりとりなど知るはずもない。

いかなる手段をもってしてもこの戦争に勝利せねばならない、という意思だけが玉座

の間に渦巻いていた。

×××

いまだ、首が熱を持っている。

デミウルゴスはそれが錯覚であると理解はしていたが、あの痛みを思い出すと、身体が沸騰してしまうのではないかと思うほど熱くなった。数日前のシャルティアの言葉を借りるのであれば、先日の行為はデミウルゴスにとってまさにシュヴァインの力の波動——褒美を賜るのと同義だった。

そしてあの演説。

デミウルゴスは興奮を抑えきれずに思わずぶるりと身体を震わせて、それでもなおあり余るほどの狂喜の感情をのどの奥で飲み込んだ。

四十一人のうちの、たった二人。

この地に残った最も尊い支配者たちにはこの浅ましい考えが見透かされているのだろう。

特に、無礼を働いた制裁としてこの処罰を下されたお方にはもはや申し訳が立たない。それでなお自分が仕えることを許してくださいのだから……と、そこまで考えてデミ

ウルゴスは首を振った。

お二方の慈悲がまるで海のように深いことを知っていても、それに甘えることはデミウルゴスの臣下としての矜持が許さない。

今後もしやれることを許していただけたのなら、行動をもつて恩義に報いるべきだ。

だからこそ「至上の御方が欲したものを横から奪う」という許し難い行いをした人間を、情報のためには言え生かしておかねばならないというのはひどく苦痛だった。

けれども、だからこそ。

特別情報収集官には、あの生きる価値もない人形が遅れて引き渡されることをあらかじめ告げてある。玉座の間から第七階層へ戻ってきたデミウルゴスは、迷うことなくあの場所へ向かった。

「中身は殺していいだろうね」

「はっ、勿論です。全てデミウルゴス様のご指示の通りに」

話しかけたのは一人の悪魔だ。

身体にぴったりとした黒い皮の前かけをして、全身は白というよりも乳白色の皮膚をしている。

そんな「血色が悪い」の一言では表現できない身体には、薄紫の血管が全身をめぐっているのが見えた。頭部は一部の隙もなくぴったりとした黒い皮のマスクをしており、

視認、呼吸、それらがどうやって行われているのかは皆目検討もつかない。

デミウルゴスに向かって跪いたその身長は起立すれば二メートルはあるだろう。その身体のパーツの中でもひととき腕が長く、その手先は膝を超えるのが容易く想像できた。

その異質な姿をした悪魔をトーチチャーという。言うまでもなくデミウルゴスの部下だ。

トーチチャーが視界で見送った先には、火であぶられている牛の像があつた。

真鍮製の像はその身体が黄金色に見えるほどに熱されて、灼熱を司る第七階層の中でも輝いて見える。本物の牛と見まがうほど丁寧に作られたその像の口からは、中身があぶられて発生した煙がもうもうとあふれ、牛に酷似した鳴き声が聞こえた。

「透視にて中身の監視は万全に行つております。定期的な像へ水をかけて上昇しすぎた温度を落とし、よほどの状態であれば治癒魔法をかけております」

「それは結構。これはアインズ様とシユヴァイン様からの大切な預かりものだからね」
デミウルゴスはトーチチャーの回答に満足げにうなずいて、言葉が続ける。

「そう言えば特別情報収集官から聞いた話によると、捕らえた不届きものたちは情報をいくつか聞き出した途端に絶命したというじゃないか。それならば確実に情報を取れる体制を整えてから、あの人形を引き渡すべきだと思ふのだが、君はどう思う？」

「おっしやる通りかと」

「うん、私もそう思うとも。そして時間が来るまでは至上の御方からお預かりしたものは、きちんとした方法で保管しておくべきだともね」

ゆったりとした動作で牛の像の周りを一周して、デミウルゴスはその口から聞こえる牛の声に耳を澄ませた。何度聞いてもその声は、デミウルゴスの好む「人間の悲鳴」からはほど遠い。

だがそれでいいのだ。これには嗜好品になる価値もないのだから。

「時期が来るまでは今後もこの調子で頼むよ」

それだけ告げて、デミウルゴスはその場をあとにした。

その場所には人間の悲鳴などまるで聞こえない。聞こえるのは指示を受けたトーチャーが返答する声と、第七階層という環境にそぐわない牛の鳴き声が木霊している音だけだった。

「生きる価値もない人形だが、シユヴァイン様に触れていただいた痕跡を残しているんだ。それを我々が関与したことで息絶えさせてしまうのは、不敬なことだからね」

だから、皮膚が焼け爛れて、元の傷がわからなくなってしまうばいなのだ。

豚界道中膝栗毛

「よし、行つたな。——おれたちも行くぞ、メーア」

「はッ…はい！ しゅ、っポルコ様！」

城壁都市エ・ランテルの冒険者組合の建物から漆黒の全身鎧を纏つた人物と、言葉を失うような黒髪の美女が出てきたのを見計らつて、ポルコと呼ばれた男は側らの部下を呼んだ。

そうして先程の漆黒の戦士と同じように建物の中へ入っていく。

組合の人間から見て「ポルコ」と名乗つた男は実に奇妙な装いをした男だつた。

身長ばかりがひよろりと高い瘦躯をしていて、身体を覆つている装備も、身体の凹凸が浮いて見えるような薄いものを身につけている。そのうえからみすばらしいねずみ色の外套を羽織い、小さな皮の荷袋を肩に担いでいた。

そしてなによりも異色なのはその顔だ。

ポルコは、露出する部分が一切ないように布で顔全体を巻いていた。そしてほんの一片の隙間すら許さないと云うように、色硝子いろがらすを張つた保護眼鏡ゴールドを布のうえから着用している。

眼鏡などという高級品を身につけていることから貧乏人ではないと考えるのが普通だろうが、それにしても外套のみすぼらしさが不釣り合いだ。

保護眼鏡は恐らく盗品だろうと見当をつけ、今度は隣の人物へと目を向ける。

ポルコという男が盗賊じみた雰囲気をしている一方で、ポルコに「メーア」と呼ばれた少年は実に上品で質のいい服を身に纏っていた。

恐らく魔法詠唱者マジックキャスターなのだろう。白を基調に複雑な模様の入った衣服を身につけ、藍色のローブを羽織っている。両手には黒檀のような素材の木の杖を大事そうに握りしめて、おどおどと何度もポルコの顔色を伺っていた。

ポルコの装いと比較すればあまりにも普通、…そもそも普通の感性を持つているならば自ら冒険者には志願しないのだろうが、特筆すべき点は一つだけ。少年が闇妖精ダークエルフだということだろう。

一瞬、近隣諸国でいまだ容認されている奴隷だろうかと考えたが、それにしても耳などが切りつけられている様子はない。それどころか自分よりも質のいい衣服を着せているのだから、どちらかと言えば奴隷ではなく稚児として連れてくるのかもしれない。そういう趣味のものはどこにでもいるものだ。感染症などの危険を考えれば、特定の相手のほうが娼婦や陰間を買うより安全だとも言える。

少女のように愛らしい顔立ちをした少年なのだから、相手をさせるのにも不足はない

だろう。

盗品の保護眼鏡ゴリッグルを身につけ、闇妖精ダークエルフを稚児として連れ歩くとは。

そうして組員の受付が「この男は行く行くはワーカーになるだろうな」という予想を立てたところで、二人の手には冒険者であることを証明する銅のプレートが手渡されたのだった。

「なにかとんでもない勘違いをされた気がする」

「え……？ なにかおっしやいましたか？ ポルコ様」

「いやなんでもない。ああそうだ、メーア、おれを呼ぶときはポルコでいいぞ」

「そ、そういうわけには……」

冒険者組合の建物から出たところで呟いたポルコの呟きは、メーアには届かなかつたようだ。

わたわたと慌てるメーアの頭を撫でて、落ち着くのを待つてから、これからどうしようかとポルコは——シユヴァインは考えた。

×××

この発端はモモンガだった。

正確な情報収集を行うために冒険者として外に出る、と言い出したのだ。

無論モモンガから「そういったことを考えている」という説明は、シュヴァインは事前に受けていたけれど、案の定ナザリック地下大墳墓の部下たちからは不承認の言葉が飛び交った。

「ですよねー」と言いかけた言葉を口の中に押し込みながら、しかし今回ばかりはモモンガのほうも折れないと理解していたので、シュヴァインは我関せずとばかりにギルド長と守護者たちの論争を無言で眺めていた。

現在ナザリック地下大墳墓が握っている情報は、有効活用するにはあまりにも拙いものだ。

それを正確に補おうにも、ここの部下たちはあまりにもあくが強すぎた。そもそも人間社会の中に紛れることのできる外見をしているものが非常に少数で、その中の稀少な部下でさえ「人間はごみ以下だ」と罵る状態がテンプレートである。

こういうわけで、この事態を深刻に受けとめたモモンガが、自らナザリックの外へ出ると打って出た。それに便乗してシュヴァインも「え、モモンガさん外行くの？ 豚君もおんも行くう」と近所のコンビニエ立ち寄るような気軽さで名乗りを上げた。

モモンガの発言に最も強い反応を示したのは言わずもがなアルベドである。

ひゅー、モモンガさんもてもて！ とシュヴァインは内心でふざけていたけれども、

ふと、セバスの発言で火種は飛散した。

「もしや…シユヴァイン様もアインズ様と同じお考えなのですか」

つまり外に行く気なのかという質問だった。

無論そのつもりだ。

それは当然と言えば当然なのだが、しかしシユヴァインには先日脱走事件というモモンガ以上の前科がある。なのでセバスの警護という名の監視の目は厳しくなるものなはずだ。そうしてそれが数日と経たないうちに今度は日程が定まらない遠征をする、と言っているのだからナザリック地下大墳墓の生活面の全てをその身に担う家令の目が、一層厳しくなるのもしかたないだろう。

皮膚が蛇皮ではなく人間のものであれば今頃、ひどい量の冷や汗をかいていたはずだ。

モモンガのように精神作用無効を身につけていないシユヴァインが家令からのプレッシャーに耐えられるはずもなく、そつ、と視線を逸らす。

その姿はモモンガから見ればまさに「蛇に睨まれた蛙」のようだった。シユヴァインさんが蛇のくせに、と後日のモモンガは語る。

しかしそれはナザリック地下大墳墓に住む者たちにとって「お前に言う必要はない」という支配者の態度として受容された。つまりモモンガの考えに賛同していると、シユ

ヴァイン自身も遠征に向かうつもりなのだ。

「シユヴァイン様まで……」

誰かの言葉が静まり返った玉座の間に反響していやに大きく聞こえる。

そうしてわずかばかりの沈黙のあとで、片手を口元にやって考えごとをしていたデミウルゴスがアルベドにそつとなにかを囁いたのち、モモンガとシユヴァインの遠征は守護者たちに認められることになった。

彼がなにを言ったのかは皆目検討もつかないが、セバスの厳しい視線から逃れることができたシユヴァインは素直に感謝した。

「お前のおかげで話がうまく進んだ」という言葉に「助けてくれてありがとう」という隠語があることなど知る由もなくデミウルゴスは優雅に一礼を返す。アルベドとセバスも、至高の御方お二人の意見ならばしかたないといった様子だ。

そうして「どうか供はつけてほしい」の部下たちの言葉にうなずいて、二人は冒険者として城壁都市エ・ランテルへ足を運ぶことになったのである。

：

そうしてシユヴァインは名前を「ポルコ」と偽り、先程やつと冒険者登録を済ませた。

冒険者組合の受付の不躰な視線を受けて居心地悪そうにしていた相棒「メーア」——
マールも、開放された安堵からかほつと息をついていた。

これからしばらくシユヴァインたちは、一般の冒険者と変わらない生活を行ってこの世界の常識を学ぶのだ。

「アインズ・ウール・ゴウン」の名声のために活動する担当がモモンガだとするならば、一般の常識や民間の噂など、ナザリック地下大墳墓の部下たちにはできかねる情報収集を行うのがこれからの二人の主な仕事である。見聞の旅とも言おう。

本物のRPGみたいだとシユヴァインは口に出さず考えた。

けれども他人の家に押し入って侵入した挙げ句、箆筒を物色して瓶を叩き割るのがさすがにまずいことだとは馬鹿でもわかる。

それはシユヴァインにとって「上等な獲物」が目の前を闊歩していても指をくわえて見ていなくてはいけないという意味と同義のことだ。ならばどうすればいいのか。その解答は「そのための隠密スキル」である。正直この遠征を志願したのはこのためであって情報収集はついででしかない。

ばれなきや犯罪じゃないんですよ。

「ぼ、ポルコ様、どういたしますか？」

「んー…とりあえず冒険者組合の受付が言っていた宿屋に行く。モモンつ…もそこへ向かっただろうからな」

フルネームを呼びそうになって無理矢理に押し留めた。

紛らわしい名前をつけたものだどギルド長を少しばかり恨みつつ、シュヴァインは歩を進める。他にも気になるものがないと言えば嘘になるのだけれど……まずは冒険者としての一步を踏み出さねばならぬ、と自分に言い聞かせて。

そうしてマールが半歩後ろをついてくる気配を感じながら、シュヴァインは顔を動かさず視線だけで周囲の観察を始めた。目の周りの皮膚を隠蔽するのが保護眼鏡ゴーグルの目的だったが、どうやら視線を隠す意味でも役立ちそうだ。

やがて数十メートルも道を進むと、供として連れてきたのが「闇妖精ダークエルフ」のマールであることは失敗らしいと悟る。だが失敗だとも言えるが成功だったとも言える。

シュヴァインたちに必要なのは知識だ。相手の反応を伺うことでなにが常識でなにが非常識でないかが見えてくる。そしてそれに沿って行動することが、環境に溶け込む条件になるのだ。

「メーア、少し不便を強いるかもしれないが、悪いな」

「い、いえっ！ 僕がポルコ様のお役に立てるなら本望ですっ！」

シュヴァインは闇妖精を見る人々の目は好奇心を多分に含んでいるものだと理解した。

つまり闇妖精ダークエルフが人目につくところにいることはそうそうないのだと、しかし皆無でもないのだということを知った。

自分は今後どうするのか。

その収集するべき情報の多さと、収集したいアイテムの所在に、どの程度でその広大な範囲に見切りをつけるかを考えながら、シユヴァインはやがて見えてきた宿屋の入り口を開いた。

豚界道中膝栗毛 その二

きつたねえ。

宿屋に対する第一印象はそれだけだったが、客層からしてしかたないのだろう。

ウエスタン式の緩い戸を開けた途端、むさくるしいやつらのむさくるしい視線がおれたちじつとりと絡んだ。

まあ、それについては痛くも痒くもない。

自分とこいつらの力量差が常時^{バツシブ}発動能力^{スキル}で探知できるからだ。

今この場にいる人物でおれと競り合いができるのは上の階にいる誰か——モモンガさんと、おれの真後ろにいるマーレくらいだろう。

むしろ怖いのは「むう」と背中側から声が出ていることだ。これはまずい。

見た目は大人しくてもさすがナザリックの子、略してナザっ子。

おれに対して不敬としか言いようのない態度を取っている連中に、マーレが杖を構えるのが背中ごしにわかる。やめなさいそれ神器級^{ゴツ}アイテムだから。お前がここで魔法を発動させたら、たぶん宿屋ごとおれとモモンガさんが吹き飛ぶ。

おれとモモンガさんは強すぎるアイテムを持ち込んで起きるだろう弊害を考慮して、

装備のレア度を主力の装備より二段ほど落としてきているのだ。

しかしマーレの装備ならばぱつと見ただの木の子に見えることから、今回の所持を許可した。

もちろん神器級ゴツメアイテムを奪われるわけにはいかないのです、盗難防止のため、あらかじめいくつかの対策魔法をかけさせている。

まあつまりなにが言いたいかというと、この場所で最もレアリティが高く、凶悪な武器を所持しているのはマーレなのだ。うわおとこのこつよい。いや馬鹿を言ってる場合じゃない。

「メーア、入るぞ」

「えっ…あつ、はい！」

おれは情報収集を行う遠征の前に、マーレには二つのことを約束させている。

そのうちの一つが必要以上に人間を殺さないということだ。

英雄を目指して圧倒的な力をアピールするならまだしも、おれたちが集めなくてはいけないのは一般的知識である。突出するような行為はできるだけ避けたい。

「まあ大人しいマーレならその辺りは心配ないだろう」とたかをくくっていたのだが、ちよつと雲行きが怪しくなってきた。豚君はとても不安です。

そうしておれが声をかけたことで、マーレはその約束を思い出したらしい。指示に

従って後ろをついてきた。

薄汚い室内を進むと、視線があちこちから追ってくる。

「頭のおかしい強さのやつが来たと思つたら、今度は本当に頭のおかしいやつかよ」おいそこ聞こえてるぞ。確かに鏡見たとき布でぐるぐるしたこの顔はどう見ても変質者だったけどな。

カウンターの前に立つと、宿屋の店主らしきおっさんが無愛想に視線を向けた。

「おいおい接客態度まで底辺かよお。」

「宿は何泊だ」

「一泊で」

「銅のプレートなら、相部屋で一日五銅貨なんだがな……。飯はオートミールと野菜、肉をつけるなら追加で一銅貨だ」

「なんか含みのある言い方だな。なんかあつたのか」

「…駆け出しの冒険者つてのは普通、仲間を作るために大部屋で顔を売るんだ。あんたの少し前にも銅のプレートをぶら下げた冒険者が来たんだ。丁寧に説明してやったが、個室を選んだのさ」

「へえ」

「まあそれだけの自信を持つのがわかる程度にはご立派な装備をつけていたからな。て

めえは悪いことは言わねえから、身分相応にやりな」

「そうするとお」

だからマーレは武器を構えるのをやめなさい。普段の大人しいお前はどこに行っちゃったの？

銅貨五枚を支払って階段を登り、指定された部屋の戸を開くと、そこは四つのベッドと荷物を収納するための宝箱が並んでいるだけの質素な部屋だった。

当然だが、ナザリック地下大墳墓にある自室とは天と地ほどの差がある。うわ、心折れそう。ベッドのうえに散っている砂埃を手で叩きながら「掃除くらいしろよ……」と思わず呟いた。

「無理無理、おやつさんがわざわざそんな気をきかせるはずがないよ」

いい布団で寝たけりゃあ、これから稼いでいい宿屋に泊まるしかないねと、おれたちよりも先に部屋にいた冒険者が、おれのひとりごとを拾った。

二十歳になるかならないかくらいの、赤毛の髪をざつくばらんに切っている鳥の巣のような頭をした女だ。

「闇妖精の魔法詠唱者がチームメンバーなんて珍しいけど、銅のプレートなんだから、あんたら新人でしょ？ 私はブリタっていうんだ」

「ポルコだ」

「めつ、メーアです」

ブリタと名乗った女に自己紹介をしておれが握手を交わす一方で、びくびくぶるぶると名前だけを告げるマーレ。人前でその態度はどうなんだと思っただけで「人間はごみ以下」が通常運転の他のやつらと比較すればまだましなほうだろう。

性格面を考慮すればプレアデスのユリを連れてきてもよかつたと思うが、目が眩むような美女を連れただけの冒険者が二人も登場すると嫌でも話題にあがるのだ。

そういう理由のうえで、おれは冒険者として活動するお供として、性別が同じ男であり、異形種ではないマーレを選んだというわけだ。

いやこいつ正確には「おとこのこ」だけれども。

今は半ズボンをはかせてるから恥ずかしくないもん……！

「私のこと先輩として頼ってくれていいよ」

そうして得意げに突き出されたブリタの胸元には鉄のプレートがぶら下がっている。なるほど、こいつは渡りに船だ。

冒険者組合で聞いた話では、冒険者のランクというのは銅からアダマントタイトの八種類の金属で順位づけされている。

そして彼女が身につけている鉄のプレートは下から二番目を意味する。駆け出しというわけではないが、正直その実力の程度は知れているといったところだろう。これか

らぐいぐいと伸びていく可能性もないわけではないが、少なくとも今日明日で到達するような話ではない。

つまり彼女は、自分よりも格下の相手が登場したことで、そして偶然相部屋になったことで、新人相手に先輩風を吹かせてみたいのだ。そしておれも、彼女と行動すること
で「普通」の冒険者としての振る舞いを身につけることができる。

顔に巻いた布と保護眼鏡ゴーグルの下で考えた結論を知る由もなく、「よろしく頼むよ」と告げたおれにブリタは得意気に笑った。

：

で、おれたちは順調に依頼を受け、今やどこに出しても恥ずかしくない冒険者になるのだった、とか思うじゃん？

なんで仕事探しに行くのに個人の用事に付き合わなきゃならないわけ？ ポーションの鑑定とかそれ言うまでもなく「マイナーヒーリングポーション」マインナーヒーリングポーションの下級治療薬じゃないですか。

こつそりアップレザルマシクアアイテム道具鑑定アイテムをしたらしいマールがおれの視線を受けて：保護眼鏡ゴーグルをして
いるので顔の向きで判断したのでだろうが、うなずいてから首を振った。ですよねえ。

けれどもブリタにとってはこれが非常事態であるようだ。

とある戦士から詫びとしてもらったポーションが「普通」のポーションとは違うのだ
と言う。

おれたちの見知ったユグドラシルのそれと見比べて、おかしいところはなに一つない。つまりおれの認識がおかしいということだ。とある戦士とはモモンガさんのことだろう。早速ややこしいことになっている。

「それで、そのポーションがなにか特別なものだったらどうするんだ？」

「そりゃあ大事に使うわよ。特別なものだって、使わないとただの飾りなんだから」
「…へえ」

あつこれはだめだ。おれとブリタは価値観が合わない。

おれは特別なものは集めて大切に飾っておきたいタイプである。最近はその特別とやらを集めすぎて収納できる場所が決壊したけれども。

これから向かうのはこの都市で一番の腕を持つ薬師のところだそうだ。そんなにいい腕を持つているなら、ペナルティなしで復活できる不死薬の一つでも扱ってあげればいいのだが、これでこの反応なのだから望み薄だろう。お土産かつ実験材料として「普通のポーションでも買ってナザリックに帰ろうと思う。

そうしておれの冒険はここで終わるのだったた。

今までご愛読ありがとうございました、豚君の次回作にご期待ください！

あとはもう「最初はそんな服装をしているから強盗だと思っただけど、経験からすぐに駆け出しの冒険者だと気づいた」とかなんとか露骨に経験差をアピールをしてくるブリタ

に生返事をしつつ、むぐむぐなにかを耐えるような顔をしているマーレを褒めて、おれたち一行は、話題の薬師のいる店までやってきた。

ここら一帯は薬屋が集まっているようで、辺りから青臭い匂いが漂っている。

それぞれの店の入り口にぶら下がった看板の文字は読めないけれど、どうやら店名が書いてあるようだ。

ブリタはその中でも最も大きい店の前で足を止める。ここで間違いないわねと確認されても文字が読めないのです、おれは「んん」と適当な返事でごまかした。

それをどうとも捉えなかったのか、ブリタは特に考える様子もなく店の戸を押し開ける。取り付けられていた鐘がやかましい音を立てた。

「いらつしやいませー！」

はつらつとした声がかかる。そこにいたのは長い金髪に顔が半分ほど隠れた少年だった。

身につけた作業着には草を潰した汁が付着しているのか、つんと鼻を突く匂いが漂ってくる。

その少年の顔を見てブリタが「ンファイレア・バレアレさん？」と尋ねた。

それに対して「はい、そうですよ」と少年は答える。

「ブリタの知り合いか？」

「馬鹿言わないでよ。こんな有名人と知り合いだなんて」

「有名人？」

「はあ？ あんたまさか知らないの!？」

ずい、とブリタがおれに詰め寄ろうとしたところで、間にマーレが割って入った。

おれに近づく無礼者という認識だったのだろうがこれは少しだめなやつだ。

「メーア、話の最中だ」

「つ！ あ…つ、じゃ、邪魔をしまして申し訳ありません、ポルコ様！」

肩に手を置いて諫めると、その途端、大きく肩を跳ねさせてマーレはやつてしまったと言いたげに深く深く頭を下げる。ああこれもだめなやつ。主におれが。

第三者から見ればこれは完全にか弱い少年をいじめる不審者の図である。

「大丈夫だ、大丈夫だから気にするな」

「あー…ごめんね？」

主人を怒鳴ろうとしたからこそメーアが、目の前の儂げな闇妖精ダイクエルフの少年が割って入ったのだと理解したらしいブリタが曖昧に謝罪する。いやこちらこそほんと申し訳ない。

なんとも微妙な空気になりかけたところで助け船を出したのは、意外なことに少年だった。

「えつと、あなたはエ・ランテルの外から来たんですよね。それなら僕のことなんて知ら

なくて当然だと思います。初めまして、僕はンファイレア・バレアレといいます。僕が有名なのは、おばあちゃんや腕のいい薬師であることと、ちよつとした生まれながらの異能持ちだからなんです」

「そうなんですかあ……ちなみにどんな生まれながらの異能をお持ちなんですか？」

生れながらの異能については先日捕獲した村を襲撃した連中から特別情報収集官が聞き出した報告の内容から知っていたが、こんなに身近に存在するものとは思わなかった。

まあそれは選択したり変更できる能力ではないらしいので、環境や本人の才能などがなければ、とんだ宝の持ち腐れになるもののようなのだ。あとでとりあえず生まれながらの異能持ちを見つけたことをモモンガさんに報告しておけばいいだろう。

そう呑気に考えていたのだけれど、ンファイレアと名乗った少年の言葉は、おれを突き落すのに十分な威力を持っていた。

「はい、僕の生まれながらの異能は、あらゆるマジックアイテムを使うことができる、というものなんです」

「……へえ、それはすごい能力ですね」

のどの奥をしぼって声が低くならないようにするのに苦労した。

おれは種族レベルは石化の蛇、そしてその上位種を二、三個取ったくらいで、残りは

全て職業レベルに割り振っている。それも全てアイテムを奪うことを考慮したある意味がちビルドで、モモンガさんのようなロールプレイは一切想定していない。

いや、アイテムを収集することそがおれにとつてのロールプレイとも言える。

けれどもユグドラシルのゲームという性質上、全ての職業を満遍なく会得することとはできない。そんな育成をすれば、まともなスキルが得られず、まるで使いものにならないキャラクターになるからだ。

会得していない職業がある以上は当然使用できないアイテムがある。

それはどうやっても解決しない、しかたないことだ。

それをこの少年は、このがきは——。

そこまで考えたところで、髪の毛の蛇が鳴き出しそうになるのを察して、おれはそつとマールに合図を出す。これがおれがマールの性別や人間種であること以上に、旅のお供に選んだ重大な理由である。マールは相手を「沈黙」させる魔法を使えるからだ。

本来ならばこれは魔法詠唱者などにぶつけてこそ意味のある魔法だ。

けれども手段は選んでなぞいられない。髪の毛が人前で鳴いてしまえば、おれが人間でないことが一発でばれる。けれどもそれをおれ自身が抑制できないのだから他の対策が必要である。

そこで魔法詠唱者であるマールにおれのストッパーを頼んだのだ。

どういった用事でこの店を訪れたのかと少年が尋ね、それに答えるブリタの側らで、マーレが二人に気づかれぬようそうつとへサイレンスを唱える。

とん、とおれの背中へマーレの持つ杖の先が触れて魔法が発動した。もともと石化の蛇は状態異常に弱い。

普段は頭のとつぺんから足の先まで身につけている状態異常対策の装備も、このためにあらかじめ取り外しているのだから、魔法は問題なくおれに作用した。

おれは、自分だけに聞こえる「しゅーしゅー」と蛇が鳴く声に耳を澄ませながら、ゆっくりと自分に言い聞かせる。嫉妬や羨望で相手を殺すのは早計だ。時間をかけて探せば、生まれながらの異能を奪う方法が見つかるかもしれないのだから。

息を吸って、吐いて。

落ち着いたところでもう一度マーレに合図を出して魔法を解除させた。

そして息を吐き切ったところでどうやらブリタたちのほうが進展したらしい。奥の部屋へと案内される。そこでは一人の老婆が黙々と作業を行っていた。

というかここめつちやくさい。

少年に「おばあちゃん」と呼ばれたその婆さんはブリタの持っていたポーシオンを手渡される。

はあいおつかれさまでしたあどう見ても下級治癒薬ふつうのくすりですう、となるはずだったのに。

薬屋を出てから、誰もが無言であった。

「とんでもないものを手にした」という重圧に負けているブリタと、そんなブリタを見て「早く仕事を見つけないきたいんだけどなあ」とめんどろくさくなってきたおれ。

そして不安気にひたすらおれだけを見上げてくるマーレ。無理にとは言わないが、ブリタを心配する素振りくらいはできるようになってほしい。

金貨八枚。それがブリタの持っていたポーションにつけられた金額である。

付加価値を考えれば「ころしてもうばいとる」を実際にやらかす人物がいてもおかしくない、とあの店の薬師の婆さん：確か、名前はリイジーだったか。彼女はそうのたまった。

そしてそれをブリタに宣告したうえで、ポーションを金貨三十二枚で買い取ると言った。

金貨八枚ならば、ユグドラシルでの取り引きでも「マイナーヒーリングポーション下級治癒薬」の価値はそんなものだ。

けれどもそれはユグドラシルの貨幣が金貨しかなかった頃の話である。こちらの世界では金貨より価値を下に考える銀貨、銅貨が存在するのだ。

そうしてひどく貧相な宿屋とは言え、二人で宿泊するのに飯つき（肉なし）が銅貨五

枚程度の金額なのだから、金貨三十二枚はとんでもない財産だと言えるだろう。

「あ……あのさあ……ポルコ……」

ふと先頭を歩いてきたブリタが振り返り、おずおずと話しかけてきた。

「さっきのこと、黙つといてくれない……?」

さっきの、とは言わずもがなポーションのことだろう。ここでおれは逡巡する。

おれのモットーとは人が羨むものを奪取して収集することだ。そういう意味であるならば、ブリタが持っている「マイナーヒーリングポーション下級治癒薬」はおれが狙うのに十分な理由が揃っている。

だがポーションだ。……だってポーションだよ……?

大事なことなので何度でも言う。

いくら他人が求めてやまないものだとしても、それが下位のポーションというのはどうなのか。

下位のポーションならば、言うまでもなくおれのアイテムボックスの中に入っている。作るための材料すら揃っている。生憎スキルはないので製造まではできないが。

そうしてブリタの所有するたった一つのそれを奪い取るとなれば、おれが果たすべき情報収集の大元になる予定の「ブリタ」という価値からすれば、あまりにハイリスクでローリターンだ。

わざわざ手間をかけて下位のアイテムを奪取するより、この人間関係を大切にしたらほ

うが返ってくるものは大きい。

しかたない。用事が終わったらさくつと頂戴してとんずらしよう。

「構わないとも。それよりも早く仕事を探しに行くぞ」

「えっ…、あ、ありがとう…！　ありがとう、ポルコッ！」

なお冒険者組合に仕事を探しに行く前に、水面下で一悶着あったことを報告しておく。

「…ポルコ様」

「ん？　どうしたメーア」

「あの女の人、二度もポルコ様を呼び捨てにしました…」

とても許し難い行為なのだ、その表情が物語っている。

おれとしては相手に信頼されていたほうが、今後の方針として楽に行動できるのだけれど、マーレの顔は普段のか弱い姿からは想像もつかないほど怒気に満ちていた。この調子では先行きが不安でしかたない。

「…ここでは友好関係が大切なんだ。わかるな？」

「……………はい」

納得はいかないが、命令には従うという姿勢を見せるマーレ。安堵の息を吐いたところで真後ろから空気を読まない声が響いてくる。

「ちよつと、ポルコ！ 早くしなさいよ！」

それを聞いて「また……」と低く呟いたマールエの眉が釣りあがった。あーばばばばばばい。

「耐えろおれはお前ができる子だと心の底から信じている！」

「つ、はい！ 僕でできます！ ポルコ様のお役に立てるようがんばります！」

部下として信頼していることを、暗に計画を壊してくれるなよということ伝えて、内心で汗を垂らす。今後を考えるとわりと胃が痛い。果たして豚君はがんばれるのか。

……来週も絶対見てくれよな！

豚界道中膝栗毛 その三

ンファイア少年の生まれながらの異能については保留する。

そしてブリタのポーションについても保留だ。

それならば、もうなにも気にすることはないだろう。おれは明日からの仕事に備えて、かび臭い木製ベッドに横たわりながらナザリックの羽毛布団を恋しがって寝るべきだ。

…なんてなるわけじゃないじゃん？ だって豚君だよ？

「ばれなきや犯罪じゃないんですよ」

草木も眠る丑三つ時。おれはスキルを駆使してそつと宿屋を抜け出した。

いや、正確な時間まではわからない。だっておれの持つてる時計、時間を確認したら「シユヴァインお兄ちゃん、今は何時何分だよ」とかわざわざ音声付きでお知らせするんだもの。

偽名を名乗っている以上、別の名前が出てくるのはまずい。

というかこんな口リ声が聞こえるアイテムを所持している時点でまずい。職務質問不可避だ。

そして七時二十一分と十九時十九分に時間の確認をしたときに、それを人に聞かれた場合は現行犯逮捕もまぬがれないのである。

ところどころ明かりはついているが、ほとんどの人間が寝ついた時刻に街を明々と照らすような光源はない。脳内で流れるBGMは某ピンクいパンサーのテーマ曲である。

おれは屋根から屋根へと飛び回り目的のものを探していた。

この街に来たときからおれの盗賊スキルに引つかかっていたものが二つ、三つほどあるのだ。つまり、一定のレア度を保証するアイテムが。ちなみに宿屋から感じたレアアイテムならばそんな数では足りないのだが、言うまでもなくモモンガさんや、モモンガさんのお供として同行してきたナーベラル・ガンマの装備なので、さすがに身内から強奪するわけにはいかないだろう。

盗賊の感知スキルは一定のレア度を保証すると言っても、そのアイテムの個々のレア度までを細かく感じ取れるわけではない。これから向かう場所にあるのは感知できるレア度の範囲で、稀少価値が一番低いアイテムかもしれない。

まあそんなことを考えてももちが明かないので、とりあえずそのアイテムを見に行くことにしたのだ。後生大事にしまわれているようなものならばそのままいただいて帰るし、その辺に放り出されているガラクタならば諦めてしまえばいい。

余談だが運営側の対策によってユグドラシルでは世界級ワールドアイテムの感知はできない。

それについてはこの世界はどのようなだろう。感知できれば非常にありがたい。
そして。

「…見いつけた…」

屋根の下で、外套を纏った一人の女が歩いていた。

×××

彼女はある取引のために墓地に向かっていた。

追われている身ということもあって、尾行や襲撃の類いには十分に警戒をしていた。

しかしそれでも英雄の領域に到達した自分とまともにやり合える相手が、そう簡単に現れるとも思えない。そんな気持ちで薄暗い路地の道を曲がろうとしたところで、不意に声がかかった。

それもずいぶんと近いところで。

「お嬢さん、なんか面白いもの持ってるよねえ」

頬に息がかかる。

ざらざらとした皮のような感触が露出している腹に触れた。

そうして理解したのは、背後から抱きすくめられるような体勢になっていること。

瞬間、跳ねるように身を翻してステイレットを構えると、そこにいたのは顔や腕に布を巻きつけて保護眼鏡ゴグルを着用している奇妙な人物だった。

無遠慮に腹を撫でた感触はどうやら、相手の装備しているガントレットのものらしい。

それこそ相手が話しかけもせず攻撃してきたら自分は息絶えていたかもしれない。そんな状態になるまで「敵」の接近に気がつかなかったことに歯噛みして、彼女はステイレットをきつく握った。いったい何者なのか。聞こえた声と身体つきから男であることはわかる。

「あんた、誰え？ 風花聖典の人間じゃないわよねえ」

「フウカセイテン……？ いやそんな大層な名前は知らないけどさあ、そんなことはどうでもいいんだよ。お嬢さんに一つ聞きたいんだけどこれってマジックアイテムなの？」

「なっ……！」

男の指につままれていたのはきらきらと輝くサークレットだった。

蜘蛛の糸のような金属糸に無数の宝石が散りばめられ、中心には大きな黒い水晶のような宝石が埋め込まれたサークレットは、つい先程まで彼女が所有していたものだ。そしてこれから墓地に向かう理由でもあった。

いつの間にか奪われたのか。焦りと、それ以上に自分が出し抜かれたのだという怒りが

募った。

「…ずいぶん手癖が悪いのねえ。女の懐まさぐるなんて最低よお」

「いやあ、なにぶん盗賊家業なもんでさあ、いいものを見ると欲しくなるんだ」

「見る目は確かみたいだけど、こそ泥が持つていい代物じゃあないんだから。今すぐに返してくれたら腕の一本で許してあげるわよお」

実際返却されたとしても、生かして帰す気などさらさらなかった。

しかし相手は自分の背後を取り、さらには気取られずにマジックアイテムを奪い取ることのできる人物だ。一筋縄ではいかないだろう。

そうして警戒する彼女を尻目に男はサークレットを持ち上げて色々な角度から眺めてみたり、指の間でもてあそんで小粒の宝石が光を反射して輝く様子を楽しんでる。相手が彼女を警戒している様子は見られない。

その行動がまるで自分を馬鹿にしているような気がして、息を吸って、吐いて。そうして彼女は低く姿勢を取った。

——…頭を貫いて一撃で殺そう。

〈疾風走破〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉

背後を取った男の隠密能力を考慮して、短期で収集をつけるために武技を発動させる。

そして彼女のしなやかな両脚が地面を蹴った。

「オリハルコンかあ……あー、コーティング？ 下はミスリルかな。……んー」

彼女は間違いなく、相手の眉間めがけてステイレットを刺突させたはずだった。

しかしその剣先はむなしく空中を掻いて、体重を前方に乗せた身体は大きくバランスを崩す。

それは攻撃をいなされたわけでも、避けられたわけでもない。ただ彼女の視界から忽然と男の姿が消えたのだ。

この状況に驚愕する彼女が体勢を整えるよりも前に、その動きは完全に止まった。

抱きすくめるように。そしてこれ以上は武器を振り回せないように。片手は腹に回されて、片手はステイレットを握った彼女の手ごと握られる。

それは人間の可動域というものをよく理解した拘束だった。

直接拘束しているのは腹に回された腕と武器を握った側の手首だけだというのに、密着した背中と股の間に割って入り込んだ足が、身体をそれ以上動かすことを許さない。

最小限の力で最大限に相手を拘束する。これは間違いなく暗殺者の技術だ。それも自分をこうも容易く捕獲したのだから、よほどの手練れだろう。なんのために。本当に風花聖典からの追跡者ではないのか。

それならなぜ自分を狙って、なおかつ重要なマジックアイテムを一瞬で見抜いたの

か。

湧きあがる疑問とこれまで対峙したことのない強さを前にして額から汗が垂れる。

しかしそんな彼女の心境など知る由もなく、拘束されてももがき続けようとする彼女の腕を、男はさも当然のようにステイレットごと引き寄せた。角度を変えて、眺めて、その視線はサークレットを掠め取ったときと変わらない動作で評価を下していく。

ふと、彼女の耳にはまるで蛇が威嚇するときのような音が届いた。それは間違いなく背後から聞こえてくる。それも自分の真後ろの、頭の辺りからだ。

興奮したような蛇の鳴き声は何度も纏わりついて周囲を飲み込もうとする。繰り返される以上な音が冷静な判断力を奪い、腹をえぐるような悪寒が背筋を駆け抜けた——そのとき。

「…はいはい豚君ですよお、なんですかあ？ …あ」

ほんの一瞬だけ男の腕が緩んだ。

その隙を見逃さず、彼女はすぐさま身体を捻って拘束から抜け出した。たった一度、天から与えられた最初で最後の機会を、獲物の側が得た瞬間である。そうして背後を十分に警戒しながら一目散に走り出した。

目で追うことのできない速度で彼女の背後を取る相手だ。今は勝てないだろう。今は。

「いつか絶対殺す」と決意して、彼女はエ・ランテルの夜道を駆け抜けた。

×××

ふええ…逃げられちゃったよお…。

走り去っていく女の背中を見送ってから、おれは今回見事に入手した「獲物」をアイテムボックスに叩き込む。本命は手に入ったのだからこれ以上同じ人間からものを奪うのは可哀想だろう。

きやああ豚君優しいいいすてきいかつこいいい（裏声）

武器のほうもコーティングじゃなくて刀身まるごとオリハルコンだったら欲しかったけどなあ。

そんな馬鹿なことを考えていたら意識を^{メッセージ}へ伝言を送ってきた人物に引き戻された。『どうかしましたかシュヴァインさん』

「なんでもないですう。豚君、モモンガさんのお話ちゃんと聞いてますよう」

『酔ってるなら早く寝るべきですよ』

「いや素面^{しらふ}です」

『救いようがないですね』

そんなことを言うギルド長はせいぜい背後に注意してください。ナザリック地下大墳墓へ帰還したあかつきには、隠密を最大限に駆使してメリーさんごっこしますからね。わたしぶたくんいまあなたのうしろにいるの。

「ていうかモモンガさんこそどうしたんですか、こんな夜中に^{メッセージ}〈伝言〉なんて。よい子はもう寝る時間ですよ」

『その言葉そっくりそのまま打ち返します。そもそもアンデッドは飲食や睡眠は必要ないですから問題ありません。シユヴァインさんこそ寝たほうがいいんじゃないですか？』

「性欲はちよつとだけあるんでしたっけ？ 魔法使いですもんね！」

『やめてくださいいしんでしまいます。∴現状確認のためにマールレに^{メッセージ}〈伝言〉を送ったら「秘密裏に動くことがある」とか言って宿屋を出たそうじゃないですか。あなたのことですから収集癖を拗らせていたんでしょ！』

「やったねモモンガちゃん死体が増えるよ！ ∴収集癖についてはあたりですう」

ぶひい、と豚の鳴き真似をしてみせれば、溜め息が返ってきた。さーせん。

『せめて一言くらい言ってくださいよ』

「モモンガさんが寝てるのを起こすのは可哀想かと思つて」

『だから寝てませんよ。どうせ起きてるなら定時報告をしようと思ひましてね。∴まあ

わたしたちのところはあまり収穫はありませんけれども』

「収穫…あー、おれのところは一つか二つくらいありますね。…そうだ、言おうと思っただんですけどモモンガさんどこかの冒険者に「マナーヒーリングポーション下級治癒薬」をあげたでしょう」

『ああはい、ちよつといろいろあつて渡しました。……なにかありました?』

「やばいですよ。おれたちの低位のポーションがまじ弩級でサティスファイですよ」

『ちよつとなに言ってるかわからないです』

かくかくしかじかなんですよう、と今日のできごとを報告する。すると今度はおれに對する呆れではない、自嘲気味の溜め息が聞こえてきた。モモンガさん呼吸してないけどな。

自分でめんどくさい種をまいた自覚があるんだろう。

「ヤツチマツタナー。まあ運よくその冒険者と一緒に行動できそうなんで、適当に見張って問題ありそうならおれのほうで処分しときますすすー」

『すみません、よろしく願います』

人間一人を殺すかもしれないという状況に罪悪感はない。だって不利になるということはおれたちに危機があるということだ。安全のためならばしかたない。

「…あー、あと。生まれながらの異能トについて。異能持ち見つけましたよおお…」

『それはすごいですね! それはどんな人物なんですか…機嫌悪いです?』

「聞いてくださいいよおおお」

ンフィーレア少年についても報告報告う。

おれの超個人的な意見が入りつつ、その生まれながらの異能持ちの少年がそこその有名人であること、そして婆さんが有名な薬屋だということ、本人もポーシオンに興味を持つていたことなどを報告していく。数秒おきにはおれの彼に対する恨み言が出現するので、報告の終わり頃にはモモンガさんの返事もかなりおざなりになっていた。

ちよつとわたしの話ちゃんと聞いてよ！ 仕事とわたしどっちが大事なのよ！

「あらゆるマジックアイテムを使用可能とかなにそれチート。うらやましぬ」

『確かに厄介ですね。気をつけるべき人物だと思えます』

「薬屋らしいんですけどポーシオンに対する食いつき尋常じゃなかったんで、なにかしら接触してくるかもしれませんよ」

『了解です』

真面目な話には真面目に対応してくれるようだ。いや当然だけれども。

モモンガさんも明日は早朝から仕事を探しに行くようだ。

がんばっててくださいいねえ、と緩く応援の言葉をかけると「シユヴァインさんのほうもがんばってください」とお返事をいただいた。

「あつそうだモモンガさん今一つ言いたいんですけどね」

『はいなんですか』

「…豚君めつちや眠い」

『早く宿屋に戻ってください。そこで寝落ちしたら翌朝ちよつとした騒ぎになりますよ』

「やだー、まだ一か所行っていないところがあるんだもんん」

『大丈夫です明日も明後日も獲物に足は生えませんかから寝ましよう？　ね？』

「…かーちゃん…」

『違います死の支配者です』

…

そうしてかーちゃん…間違えた。モモンガさんの言葉に素直に従って宿屋に戻ったおれを出迎えたのは、言うまでもなくマールレである。爆睡しているブリタは除外。

「おれのことには気にせず寝ていいのよ」と言って収集活動に出ただけけれど、どうやらマールレはおれのことを律儀に待っていてくれたらしい。申し訳ないとは思ったが悪い気はしなかった。慕われて嫌な気持ちになるやつなんていないのだから。

そして嫌な気持ちにはならないが、気になることが一つ。

マールレ君さあおれのこと出迎えてくれる直前におれのお布団の中に入ってたよね。

「ポルコ様が戻って来られたときに暖かいほうがいいと思ひまして…」

まじかよ。おれが仕事ですう（はあと）とか言つて趣味に没頭してる間にマールはそんな豊臣秀吉みたいなことをしてたのか。これは素直に良心が痛む。だつてこの貧乏宿屋のベッドマット、中身が綿じゃなくて藁なもんだからほとんども暖まらないんだもの。

「あー…お前の気づかいは嬉しく思うが、ま…メーア、お前は どうするんだ」

「えっ？ ぼ、僕はポルコ様が戻つて来られたので、こちらのベッドで寝させていただきます」

お前そつちのお布団寒いでしょう…。

きちつとシーツの敷かれたベッドにはどう見ても温もりなんてものはない。

こんな真夜中からもう一度布団を暖めることを考えると、冬場に夜勤から帰宅したばかりの絶望感を思い出す。

「……………風邪をひいたら仕事に差し支えが出るから、お前も今日はこつちで寝なさい」

「えっ！」

「声大きい。…無理にとは言わない。電気がついていたら寝れないとか枕が変わつたら寝れないとかいろいろあるだろう。他人が横にいたら寝れないなんて当たり前のことだから気にしなくてもいい。ただ一人で寝るならお前はこつちのベッドを使いなさい」

い。おれは一応疲労回復のマジックアイテムを持つてきているからだいじょう…」

「いえ！ 全然問題ないです！ 大丈夫です！ ぜひポルコ様と同衾させてください
！」

「声が大きい」

あと同衾つて言いかたなんかやだ。おれが悪い大人みたいだ。

ぶくぶく茶釜さんほんとうに申し訳ございません。悪気はないんです、ただあなたの息子が、いや娘…？ いや息子…、…あなたの子供が風邪をひかないようにというおれなりの配慮なんですけしてやましい気持ちはないんです事案発生してません通報しないでええええええ！

ひとしきり悩んだもののしかし睡魔には勝てないため、おれは素直にマールレが暖めてくれたベッドにもぐり込んだ。そして懐に入り込んでくるマールレの子供体温。あつたかいんだからあ…。

布団に入つて数秒で意識は遠退いた。

翌朝になってブリタがおれを汚いものを見るような目で見てきたが、誤解である。

やめろ…！ そんな目でおれを見るな…！

密命

「ああ、やっぱり接触してきたと…」

それは疲れきったような声だった。

うんざりしたような、勘弁してくれとでも言いたげな声だ。

それを不安気に見つめる視線に気づいたのか「至高の御方」はマールレと視線が合うと、ゆったりとした動作でその頭を撫でた。

表情の変化は乏しい人物なのだけれども、本当はとても優しい方なのだと、ここ数日でマールレは思い知っていた。

明朝と呼べる時間を少しばかり過ぎた頃。

同室に寝泊りしている人間が朝食を食べに部屋を出たところでポルコは——シユヴァインは、身に纏っていた外套を脱ぎ捨て、保護眼鏡ゴーグルを外して、身体に巻きつけていた布を取り払った。

そこに現れたのは皮膚に描かれた見事な鱗模様と整った青年の顔、そして見るものを畏怖させるような蛇の髪の毛だ。

思わず見惚れて「ほう」と溜め息を吐いたマールレにまるで気づく様子もなく、シユヴァ

インは部屋の隅に置いてあつたたらいを部屋の中央まで転がすと、アイテムボックスから「無限の水差し」を取り出してそこに水を溜め始めた。

それは湯浴みのためである。城壁都市エ・ランテルともなれば冒険者のための公衆浴場もいくつが存在しているのだが、二人はその浴場を使うことができない。理由はマーレが闇妖精だから、そしてシユヴァインが人間だと種族を偽っているからだ。

石化の蛇という異形種である以上この肌と頭を衆目に晒すわけにはいかない。しかしそれでも身体は汚れるものだ。ずっと風呂に入らないわけにもいかないので、シユヴァインは宿屋の店主に大きなたらいを一つ借りて部屋へと持ち込んでいた。それを使って湯浴みの代わりに身体を清拭するためだ。

それを不審に思われない言い訳として「おれは顔や身体中に重篤な火傷の跡があるので人目のあるところに出たくない」と「異種族が利用できない浴場で闇妖精であるメーアを一人ぼつちにできない」とシユヴァインは周囲の人間に説明していたのだが、マーレにとつてそれは、納得できるものではなかった。

なぜナザリック地下大墳墓の支配者たる人物が、人目を気にしてこのような貧相な小部屋で過ごさなければならぬのか。

これがもう一人の支配者たるアインズによる命令で、自分が人間の中に紛れて生活するという任務ならばマーレはいかようにも耐えられる。けれどもこのお方は支配者な

のだ。

支配者が、こんなところでこんな扱いを受けていいはずがない。

これはとてもよくないことだ。仲間たちの言葉を借りるならば万死に値する重罪だ。なぜ人間はナザリツクの支配者たちの偉大さを理解しようとしなのか。

「マールも一緒に拭くか?」

「いえ! 僕はあとでも大丈夫ですのでシユヴァイン様がお先にお使いください!」

ふつつつとしたなにかがこみあげてきたところで、それは自らの主人の言葉で掻き消された。

主人が自分に言葉をかけて下さったのだから、それ以外のことはどうでもいいことだとマールは思う。ナザリツク地下大墳墓の支配者たちの意思を尊重する、それに重きを置くべきだ。

「あの、シユヴァイン様、よろしければ僕がお背中をお拭きしましょうか?」

「お、頼んでもいいか?」

「はっはい! もちろんです!」

シユヴァインは上半身の衣服を脱いで、たらいにタオルを浸す。

それを固くしぼってからベッドの片隅に腰を下ろすと、シユヴァインは背中を向けてタオルをマールに手渡した。マールがそのタオルを受け取って引き締まった身体に押

しつける。

「ごしごしと上下に擦り付けて汚れを落とすべく奮闘すれば、背中がシュヴァインの呼吸の動きに合わせて大きく動く。その溜め息が落胆や失望の類いではなく安息から来ているものだとかかったので、喜びがマーレの胸中をいっぱいに満たした。

「…あー、もうちよい右…」

「はいっ」

幸福とも言える時間にうっとりとしつつも、マーレは気を引き締め、先日のデミウルゴスや姉のアウラの言葉を思い出す。これは、至高の御方にも悟られてはいけない重大な仕事なのだ。

×××

ナザリック地下大墳墓で過ごすものたちにとって、至高の四十一人のうち、モモンガが「柔」と例えるならば、シュヴァインは「剛」と呼ぶべき人物である。

他の至高の御方が隠れてもなお、ナザリックのために動き続けた偉大なお方だ。

しかし彼が生まれついた種族は決して強靱な肉体を持ち得ないものだった。

至高の御方が常識の枠組みにとらわれることはないという認識は、数日前に起きた事

件をもって覆されることになる。

まずは第七階層で転倒しかけたという事件。

そこでのなにか起こったのかという説明の過程で、デミウルゴスの許されない行動を知ることになったが、至高の御方であるシュヴァイン本人が許したという事実と、すでに懲罰を受けたということで守護者一同の中では言及しないことになっている。自分が同じ場面に遭遇したときは、同じことをするだろうと確信していたからだ。

どのような懲罰だったかについてはなぜか首の辺りを押さえて言いよどむのだが、アルベドやシャルティア、そして姉であるアウラはその意味に気づいたらしい。

とくに前者の二人は「私たちを差し置いて」と食ってかかっていたが、デミウルゴスは始終「誤解だ」と訴えていた。それが結局どういう意味なのかはマールレにはわからなかった。

そして二つ目にアウラが遭遇した、ナザリック地下大墳墓の外で倒れていたという事件だ。

本人は倒れていたということを否定したが、アウラからその状況を聞いたアルベドとデミウルゴスは、シュヴァインはおそらく守護者たちに知られないようにしたのだと告げた。

本当に気分転換をするだけならば地面に寝そべる必要などない。

アウラが駆け寄ったときに気を失っていたわけではなく、すぐに身体を起こしたということは、つまり弱っている自分を守護者たちに見られまいとしているということだ。

そのあとに空を眺めるために寝転んでいたのだと主張するような周到な演技すら行つて。

「このナザリック地下大墳墓が転移したとき、しばらくの間シュヴァイン様の口調が変わっていたことを皆は覚えているかい？」

当然覚えているだろうね、と言いたげな態度だったが、事実、守護者たちは数日前までのシュヴァインの口調が硬いものだったことを覚えている。

無論、至高の四十一人に名前を連ねる人物が威厳あふれる支配者として相応しい態度で振る舞うことに感動こそすれ、落胆する者などナザリック地下大墳墓にいるはずもない。けれども。

「…シュヴァイン様…なんだかお疲れのようでありました…」

シャルティアがぼつりと呟いた言葉に、守護者全員とセバスが同意した。

会話の途中で言葉を探すように、視線が動くことがあった。

ほつと息を吐くような仕草をすることがあった。

まるで一人になりたくてしかたないのだと言うように、近衛の前から姿を消すことがあった。

考えてみれば至高の御方が一人、また一人と隠れていく中で、ナザリック地下大墳墓のために活動し続けてきたのは最高責任者であるアインズとシュヴァインのたった二人だけなのだ。

そうしてかのお方は活動を行うたびに必ず宝物を持ち帰ってきた。

それは時間が経過すればするほど量を増して、世界級アイテムすら一人で手に入れたことがある。

疲労しないわけがないのだ。

石化の蛇メドゥーザという種族の弱点を補うため、その指には耐性を付加するマジックアイテムの指輪がいくつもある。疲労無効をつける隙間は存在しない。

それでもなおシュヴァインが平然と振る舞い続けたのは、生き物としての本能ではないかとデミウルゴスは考えた。自分を使って体調が回復したと告げたのもブラフだったのだ、と。

数日程度では癒せぬ疲労がシュヴァインを蝕んでいるからこそ、彼は気丈に行動して見せた。

その結果がああ口調だ。

隙を伺わせることのないように、守護者たちへ偉大な支配者として顕現してみせたのだ。

「ツマリ、ドウイウコトダ」

「…シユヴァイン様は、私たちが裏切ることを危惧していらっしやるわ」

コキユートスの質問に返答したのはアルベドだった。

そして、その言葉に誰もが息を呑む。

アルベドと同じ意見を持つデミウルゴスですら、改めて直視した現実には悲しげに目を伏せた。

「ありえないでありんす！」

「そ、そうよ、あたしたちが至高の御方であるシユヴァイン様を裏切るなんて！」

悲鳴にも似た声を上げたのはシャルティアとアウラ、そしてそれに同意するように、コキユートスの口から凍てついた呼吸が漏れる。

その反応も当然だった。この場にいる全員が「至高の御方」を最上の存在として崇拝しているのだから。けれどもアルベドはこぼれる涙をハンカチで拭いながら首を振った。

「シユヴァイン様の種族である石化メドゥーサの蛇は本来ならば状態異常にも、物理攻撃にも弱い種族よ」

速度と魔力が上昇しやすい、実際ならアインズとはまた違った方向で魔法詠唱者マジックキャスターに向いている種族だ。守護者たちが知る由もないのだが、ユグドラシルでプレイヤーキャラ

として石化^{メドゥーサ}の蛇を選んだものは、回復役の聖職者^{クレリック}として活動することが多かった。

後衛の最たる職業として挙げられやすい魔法詠唱者^{マジックキャスター}タイプの種類をシュヴァインが盗賊として、それも超耐久型に育成できたのは、徹底したデータに基づいた廃人プレイと、あの収集癖の賜物とも言えるアイテムの装備による結果だと言える。

たとえシュヴァインが鉄壁たる装備を外していても、守護者たちと同等以上の戦いを行えると守護者たちは信じて疑っていない。しかし疲労困憊している状態ならばどうだろうか。吹けば飛ぶような貧弱な人間たちが相手ならまだしも、その名前に恥じない、ナザリック地下大墳墓の守護者を務めるものたちならば。

「無論、これは一時的なものだと私は信じている。けれども私たちがそれに違和感を感じたことを察し、改めて口調を直して行動するほど、現在のシュヴァイン様はお疲れだ。決して追い詰めるようなことをしてはいけない。浅慮で行動すれば、これまでお残りになつてくださったっていたシュヴァイン様までが……お隠れになるかもしれないからだ」
シュヴァインが隠れてしまう。

それは間違いなく彼が自らの生命の危機を感じたときだ。

当然、守護者たちにそのようなつもりはない。しかし意識していないところできか不敬な行動を取つてしまえば、自分たちは仕えるべき主人を——存在理由を失つてしまふ。

デミウルゴスの言葉に含まれた恐ろしい意味を知ってマールはぶるりと身震いした。これはナザリツクで「至高の御方」に仕える者たちにとって最大の危機だと言っている。

しかしできることと言えばシュヴァインが回復するのを待つことのみ。至高の御方が苦しんでいるときに、なにもできないことがもどかしい。

「本当に自分たちになにかできることはないのか」と、マールがそう言いたげにアルベドの顔を見上げればアルベドはもう一度、今度は言い聞かせるようにゆっくり首を振った。

「考えてもみなさい。かつて至高の御方々が揃っていたときでさえ苦難して、かの方々は十一個という世界級アイテムを集めたわ。けれどシュヴァイン様は、それをたった一人で二つ集めるという偉業を果たされたお方よ。その御身を蝕むものをひ弱な私たちでどうこうできるはずがないわ」

そこで一旦言葉を切り、アルベドは周囲の守護者たち、そしてセバスを見回す。

「これは私たちの、シュヴァイン様への忠義が試されているときよ。お身体の調子が優れないのならば、自らの命を投げ打つても御方をお守りするのが被造物たる我らの使命」

全員が真剣な面持ちでうなずいた。

「けれどもそれをシュヴァイン様に悟られてはいけないわ。これは恐れ多いことだけれど、あのお方がなにを欲し、なにを求めているのかを考えてひそやかに行動するのよ。そうしてそれらの積み重ねが、いつかきつとシュヴァイン様の信頼を得ることになる。私たちが御身の命を脅かすものではなく御身の身辺を守護をさせるに足る忠実なシモベであると認めていただけるはずだわ」

アルベドがそう言って口を閉じたときには、全員の目に強い意志が宿っていた。無論、アルベド自身の目にも。これはナザリック地下大墳墓の被造物たちによる聖戦とも言えるできごとだ。

「これからも自分たちが至高の御方にお仕えさせていただけるように」そんな存在意義を勝ち取るための神聖な戦いだった。

もしこれをシュヴァインもしくはモモンガが聞いていたならば、視線のことも溜め息のこともモモンガが骸骨だからわからないだけだと主張しただろう。

これはシュヴァインが骨ではなく生身だということが悲しいほどの格差を生んだ瞬間だった。

「ところでデミウルゴス、シュヴァイン様が自分を使って体調が回復したと告げた、というのはどういうことかしら？」

「……おや？ 私はそのんことを言いましたかね？ アルベド」

「ええ確かお聞きしましたとも。さあ正直におっしゃってくださいな」
「確かに聞き捨てならない話でありんすなあ」

別の戦争があつたことはマールレにとっては余談である。

×××

それでもシュヴァインという人物が本当は優しいことを、マールレは、そして他の守護者たちは理解している。疲労を感じて、なおかつ周囲のシモベに気を許せない状態ならば、他の至高の四十一人のように隠れてしまえば話は早い。

それをしないのはひとえに彼の慈悲深さに他ならない。こうしてマールレに背中を拭かせてくれることも、マールレの申し出を無下にしないための気づかいに違いなかった。

その慈悲に報いるためにも全力を尽くしてお役に立つのだ。

そう意気込んでシュヴァインの背中をタオルで丁寧に拭いていると、不意にシュヴァインの身体が硬直した。

それにつられてマールレの身体も大きく跳ねた。

シュヴァインが冒険者として活動するときのお供として選ばれた際「シュヴァイン様に悟られないようお役に立つように」と守護者全員に口を酸っぱくして言われた言葉を

思い出す。

まさか……、まさか……！

「…ああモモンガさん、二日振りです」

うんともすんとも言わないその背中をどきどきしながら見守っていたが、やがてこぼれたその言葉で、もう一人の主人からの連絡が来たのだと理解した。

ほうつと息を吐きそうになったのを飲み込んで、マールは邪魔にならないよう広げたタオルを畳み直してシュヴァインの隣で待機する。なんらかの指示があればすぐに動けるように。

そうして場面は冒頭に戻る。

「いえ、報告が遅かったことについては気にしてませんよ。他のチームと一緒にならば単独で動き回るわけにもいかないでしょう。…おれのところはこれといったものはないですね。ええ、他の冒険者の連中と一緒に夜間の街道警備です」

これまでの経過を報告している声が、マールの耳に心地よく届いてくる。

このお方に、ナザリックに最後まで残ってくださったお二方に変わらぬ忠義を尽くすため、これからマールは行動していかなくてはならない。

それをするのが自分であることが不安でたまらないが、同時にとても誇らしい。

「じゃあその生まれながらの異能をどうするかについてはおまかせします。…へえ、こ

の前の村にいますか…、ではこれからは本格的に別行動で…」
これは至高の御方にすら気づかれてはいけない密命である。

豚の蛇は慰める

モモンガさんからの伝言によると、やはりインファイレア少年はモモンガさんに接触を
図ってきたようだ。この泥棒猫！ アルベドに密告してやるわ！ いや、
生まれながらの異能が跡形もなく消し飛ぶのは困る。

少年から名指しの依頼を受けたモモンガさんたちは偶然だけでも先日の村…名前
はカルネ村だっけ？ に来訪しているところらしいので、おれはそれを気持ちで見送っ
た。いつてらっさあい。

言うのが遅い気もするが、こういうのは気持ちが大変だつてばっちやが言つてた。
さてここから数十時間ほど場面は飛ぶ。

おれとマーレ…ポルコとメーアという新人冒険者はブリタ先輩○からの誘いがあり、
三、四日ほど他の冒険者チームの一団と街道の警備をすることになった。

ちなみにおれたちのチームの名前は「三元」だ。理由は推して知るべし。

この世界ですらおれの仕事は夜勤かよおと思つたけれども、さすがに文句は言わな
い。

稀少そうなアイテムを獲得できたことで、おれの機嫌はすこぶるいいのだ。

マーレに鑑定を頼んだところ、このアイテムは装備すると精神抑制が入って自我がなくなり、取り外せば発狂状態になるというとんでもないものらしい。

というか一番大事なアイテムの効果が「自分の使えない上位の魔法すら使用できるようになる」だなんて、豚君そもそも魔法職持ってないよお…。

しかし集めることに意味がある。このアイテムを所有していた女は「こそ泥が持つていい代物ではない」と言ったのだ。その一言におれが集める意味が集約している。

「あ…ポルコ、お前は盗賊だから相手の気配を察知するのに長けているだろう。お前のチームメンバーの魔法詠唱者と、我らのチームの野伏レンジャーと組んで後衛をしてほしい」

「……………わかった」

めっちゃテンションあがるう、と浮遊していたおれの意識を引き戻したのは同じ仕事を行う人物の声だった。すみません目え開けたまま寝てました。

街道警備も今日で二日目。

初日の警備は人通りのない街道をただ睨みつけているだけで終わったのだが、この辺りに野盗のねぐらがあるという情報が入ったらしい。

それを見つけて討伐できれば冒険者組合から支払われる報酬がアップするとのこと、本日のおれたちの仕事は森を捜索して野盗のねぐらを見つけて、そしてその中にいる野盗を討伐することになった。

することになったた：のはいいのだけでも。

野盗のねぐらとやらはだいたいこの辺りにあるだろうなあという場所は感知していたが、普通ということを学ぶ以上は、周囲の連中が見つけられないのならばそれに同調して行動するべきだと判断した。

付き合つて捜索を行うこと二、三時間ほど森の中を歩き続けて、ようやく洞窟をそのまま活用して居住環境を整えたようなその場所を見つけたのだが、見張りの人間が一人もいない。

いや正確には見張りをしていただろう人間が潰れていたのだ。なにかを豪速球でぶつけられたように身体がぺしやんこになって死んでいる。

そして周囲に人の気配がないと冒険者メンバーの一人である野伏レンジャーが訴えたので、これは異常事態だと、チームを二分して行動することになったのである。

片方が強行偵察を行い、片方がよそで罫を作る。おれとマーレはその前者のほうの後衛として組み込まれ、なにか問題が起きればおれがマーレと野伏レンジャーを援護しながらエ・ラントルまで救援を求めに行くという算段になった。

「この無礼、なんと、なんとお詫びしてよいか……！」

それがどうしてこうなった。

結論だけ言うと豚君の所属していたパーティは全滅しました。おおぼうけんしゃよ、

しんでしまうとはなさない。

その原因はおれの目の前で謝罪を繰り返しているシャルティアである。

野盗のねぐら：…もとい洞窟から飛び出してきたのは、なんとまあシャルティアだったのだ。

洞窟から出てきたときの形相があまりにも筆舌に尽くし難いものだったので、最初はシャルティアだとは気づかず「うわ」と言ってしまったことは秘密だ。だってあんな美少女がヤツメウナギに変身するなんて思わないもの。

そうだよなあ、可愛らしくメイキングされても真祖トゥルーヴァンパイアの吸血鬼だもんなあ、こうなるよなあ。

そしてシャルティアの耳はおれの「うわ」の呟きを拾い、窪地の陰に隠れていたおれたちに向かって襲いかかってきたのである。

まあその攻撃はおれに届く前に気がついたシャルティアの機転と、マールマジックシールドの魔法の壁マールによって防がれたので、結局おれは無傷なのだけれど。

…えー緊急連絡用に待機してた野伏レンジャー？ 永眠的な意味でおれの隣で寝てるよ。

ほんの一瞬の差で相手がおれたちだと気づいたシャルティアの一撃は、全て真横レンジャーにいた野伏のほうへ叩き込まれた。

その時点でなんの問題もないと思うのだが、シャルティアにとっては「おれが射程に

入る範囲内で攻撃をした」という事実が許せないことのようにだ。

がたがたぶるぶると震えながら謝罪を繰り返しているのだが、はたから見ればこの状況は不審者がゴスロリ美少女をいじめている図にしかならないのでそろそろおれも勘弁してほしい。

そしてその震えが伝播しているように一歩後ろに控えたマーレまでがたがたぶるぶるしているのはどうしてなのか。

「シャルティア、お前はお前の仕事を遂行しただけだ。おれはそれを責めるつもりはない」

「し、しかしッ：わた、わたしがもう少し気をつけて行動していれば、シユヴァイン様にお、おそいかかるなんて無礼なことを…っ！」

ぎよっ。

まさにそんな気持ちが正しいと思う。

シャルティアの真っ赤な目から、涙がぼろぼろとこぼれ始めたのだから。

助けてえ、という気持ちを込めてマーレに視線を送ったのだけれど、すぐにそらした。一言でも話しかければ泣き出すだろうと想像できる表情で、マーレもこちらをじっと見ていたからだ。思わず「これあかんやつや」と口の中で呟いたところで事態が好転するはずもなく、窪地にはシャルティアの嗚咽とマーレの鼻をすする音だけが響き渡る。

こんなときどんな顔をすればいいかわからないの。

「……………シャルティア、顔を上げる」

「…っ、シユヴァインさ、きやあっ！」

考え抜いた末の行動である。けして事案発生ではない。

今回のことがどう問題になるのかはわからないが、地面に伏してべそべそと泣いている少女をそのまま放っておいていいはずもないだろう。ましてやシャルティアを追い詰めているのはおれへの罪悪感だ。いいよう、豚君気にしてないよう、と言っても気持ちを受け取ってもらえないのなら、あとはもう子供をあやすのみである。

これはどう見積もっても六歳くらいまでの子供に対してやる行動だが、おれはそれ以上の年齢の子供のあやしかたなんぞは現金を握らせることしかわからない。

ここで現金を渡すのは違う気がしたので、強硬手段に出るしか手札が残されていないかった。

だっこ。

抱くこともしくは抱かれること。以上とある国語辞典より抜粋。

おれたちの今の状態の場合はホールドよりもキャリーまたはテイクの意味を取る。

事案じゃない、事案じゃないですぞお、と自分に言い聞かせながら子供を寝かしつけるようにシャルティアの背中を軽く叩く。ほうら泣き止みなさい。いい子にはあとで

豚おじさんがでんでん太鼓を買ってあげようねえ。

「しゅ、しゅばいんさま……っ」

「大丈夫だ。お前の危惧していることは起こらないとも」

あとから思い出したように怒ったりしないよお。そんな気持ちを込めて背中を叩き続ける。気持ち身体もゆっくり揺らす。完全に赤ん坊を寝かしつける状態だこれ。

ここまでやらかすとシャルティアに「赤ん坊ではありんせん！」と怒られるかと思つたが、存外に彼女は大人しい。もしかして寝たかと思つたがそんなはずもなく、ぐすんと鼻をすすする音が聞こえた。と思つたところでシャルティアのほうからものすごい音の暴力が響き渡つた。

それに続いてマールも泣き出す。号泣である。

「なんでや」

呟いた言葉はやはり泣き声に飲まれた。

…

あれから小一時間、窪地にはシャルティアとマールの泣き声が木霊していた。

おれはそんな二人を両腕に抱えて「よおしよしよし」と慰める。この短時間で二児の父親になつた気分だ。嫁さんもいないのに勘弁してえ。

そうしてしばらくすると泣き喚いたことですつきりしたのか、冷静になつたのか、

シャルティアはこの現状を把握したようで抱えたときとは違う類いの悲鳴を上げた。

「ももももうしわけありませんしゅばいんさま」という言葉でマーレも我に返つたらしい。同じような悲鳴を上げた。ほぼゼロ距離でその甲高い音の暴力は勘弁してください。

「…涙は止まったか？」

「お、お見苦しいところをお見せして大変申し訳ありません…」

二人を地面に下ろしてやりながら尋ねれば、シャルティアは心底後悔していますと言いたげな顔で謝罪してきた。マーレも似たような顔をしてそれに続く。

あれだけわんわん泣き喚いたらね、そりやあ恥ずかしいですよ。

微笑ましい気持ちになつているおれの内心など知る由もなく、シャルティアは謝罪の言葉に続いてその場所へと膝をつく。内容は言うまでもなく先程の急襲事件のことについてだ。

「この無礼、いかなるものをもつてしても償います…！」

いかなるものという文字に「いのち」というルビが振つてあるのが見えた。なんでナザリック地下大墳墓の守護者つてこんなに自殺志願者多いの？ それとも豚君に無礼とやらを働いたら自殺しないとまずいつて風潮でもあるの？ これが至高の四十一人パワーなの？

やるせなさに脱力しつつシャルティアには「考えておくとも」と適当な返事をする。守護者が真面目すぎるせいで管理職がづらい。

しかしそんなことをしている最中にも考えるべきなのは今後の方針だ。

ともかくにも、シャルティアに一掃されたことで同行していた冒険者たちを全てなくした。壊滅である。つまり仕事がふりだしに戻ったということ。しかしそれについて、おれがシャルティアを責める気持ちはない。

今回のことは不幸な事故だ。

たとえおれがいなかったとしても冒険者たちは野盗を討伐するためにここへ足を運び、シャルティアの手で容易く屠られたことだろう。戦力差について考えれば想像に難くない。こんな言葉を使うのは恥ずかしいような気もするが「運命」だったのだ。

ただあの野伏^{レンジャー}についてだけはおれのミスである。

知覚能力も搜索魔法も所有していないシャルティアが相手だったのだから、あのままうまくことが進んでいれば、野伏^{かれ}は作戦の通りエ・ランテルまで助けを求めにいったかもしれない。それを潰したのはおれの間抜けな眩きだったのだから申し訳ないと思う。ごめんねえ！

そうして問題はおれたちの「よりどころ」をなくしたこと以外にもう一つある。

銅、鉄、そしてわずかに銀と金のプレートを交えた冒険者集団が壊滅した状況の中で、

最もランクの低い銅プレートの冒険者であるおれたちが、どうやってエ・ランテルまで帰還するのか。

これが「普通」の事態ならば、冒険者は全員死亡して帰還者は一人として現れないという結末になるだろう。それでは困るのだから、解決策を考えなくてはならない。

「……んー」

どうするべきか。一度モモンガさんに連絡を取ろうとも思ったが、モモンガさんはモモンガさんで自分の仕事の最中だろう。

前回の報告ではよその冒険者チームと一緒に行動していると行っていたし、そんな状況ではいもしもしとへ伝言メッセージに対応できるとも思えない。そうなるとやはり今回のことはおれたちで解決するべきだ。こういうときこそ諸葛孔明の出番なのだけれどなあ、ない袖は振れない。

「とりあえずマール、お前は野伏レンジャーの代わりにエ・ランテルに帰還して救援を求めろ。これは最終手段だが『おれがお前をかばって逃がした』といういで話を進めて、あとから幻覚魔法かなにかで重症を負った状態で発見されれば、苦しい言い訳だとは思いますが冒険者組合も納得するだろう」

「はいっ、かしこまりました！」

そのあとしやしきしやしき行動する点については「義足をつけたんですう」で誤魔化そう。

心の傷について？ ふええ：豚君難しいことわかんないよお…。

貧相な頭ではまともな解決策がまるで浮かんでこない。

そうしておれが眉間に手を当ててうんうん唸っているところに、ふとなにかを感じたのと、シャルティアの部下である吸血鬼の花嫁が声をかけてきたのはほぼ同時のことだった。

「報告いたしました、」

「お前！ シュヴァイン様がご高察されているところを邪魔をするとはどういうつもりだッ！」

「も、申し訳ありません…！」

おれがぎりぎり目で追える速度で、シャルティアが吸血鬼の花嫁ヴァンパイア・ブライドの胸ぐらを掴んだ。うわこわ。ゆさゆさと揺さぶられる彼女を放置しておいたらたぶん数分後には首からうえがなくなっているだろう。ご高察と言われましても「これからどうすっぺかなあ」とか気軽に悩んでいた程度だからそんなふうにいじめるのはやめたげてよお！

「よせシャルティア、おれは問題ないとも。：何者かがこちらへ近づいている件だな？」
「はっ、はい！ ご推察の通りでございます！」

まじありえないんですけどお、という言葉は口の中で飲み込んだ。完全にスケジュールが総崩れである。シャルティアとの接触で冒険者チームが壊滅した時点で計画なん

ぞあつてないようなものだがそれにしたつてこれはないだろう。ここでおれは「失敗した」と確信した。

おれが感知しているのは配置されているアイテム、もしくは範囲内に現れた人物が身につけている装備品のレア度である。

そうして先程おれの感知できる範囲に出現したアイテムの数が、あまりにも多いのだ。

この常時発動能力はユグドラシルという広大なフィールドに隠匿されたアイテムを発見するためのものであつて、その能力を精密に鑑定するものではない。そのため登場した連中がどれほどの装備を身につけているかはわからないが、よくて最上級、悪くて神器級ゴツメのものを持っているやつが十一人もいるということは事実だ。

いくら常時発動能力バツシブスキルに秒2%体力回復があると言っても、ヒットポイント以上の攻撃を食らえばおれは死ぬのだ。

おれの選択した石化メドゥーサーの蛇という種族は弱い。状態異常は言わずもがな、防御の基礎値がそこまで上がる種族ではない。それを超耐久型として成り立たせているのは、徹底的に厳選して作り抜いた装備があつてこそなのだ。

しかし現在のおれは最もレアリティが高いものから二段も劣る装備を身につけている。

もしも相手が全身を神器級アイテムで固めていた場合、おれが勝てる見込みはだいぶ薄いだろう。特殊条件で発動するスキルを使用すれば勝てる可能性はぐっと大きくなるが、それでもスキル発動によるペナルティの部分突かれて返り討ちに合うことを考えると、その選択は危険だ。

「…シユヴァイン様」

「わたしたちは、どうすればよいでありますか…?」

不安気な声かしてはつと意識が戻る。

「守護者」という厳めしい名前で呼ぶには違和感のある子供たちがおれを見つめている。ああそうか、モモンガさん仕事を頼まれている以上、そして子供を守らなければならぬ以上、ただ自分の趣味だけに走るわけにはいかないなあ。

死んでいった冒険者たちよりもよほど強い人物を子供扱いするのはどうかと思っただけ、おれの行動一つを気にして泣いてしまうような二人を強者と表現するには、おれにはどうしても無理だ。

ナザリツクには子供たちがいて、この仕事はそれを守るために必要不可欠なものだ。ならば多少無理をしても「大人」としての義理を通さなければいけない。

「…マール、計画通りエ・ランテルに迎え。そしてそのあとに〈伝言〉でモモンガさんに一連のできごとを報告しろ。シャルティアはおれに同行して援護を、吸血鬼の花嫁は非常

時に備えて後方にて待機。万が一のことがあつた場合は即座にナザリックへ帰還しろ。そのあとでモモンガさん、アルベドもしくははデミウルゴスの優先順で指示を乞え」

はッ、と揃つた返事が聞こえて自分に似合わない立場だなあと肩を竦める。

おれは自分のことをもう少し淡泊な人間だと思つていたんだけれど。

「絆されたかなあ」

「なにかおっしゃられましたか？ シュヴァイン様」

「なんでもないとも、シャルティア」

「 ×××
×××
」

「現在の状況は数分前に^{メッセージ}へ伝言でお伝えした通りです。シャルティア・ブラッドフォールンが反旗を翻しました。そしてその時点から、シュヴアイン様の消息が途絶えております」

「ああ、マーレからも成り行きは聞いている」

凜としたアルベドの声は静かな空間によく響いた。

モモンガー——アインズ・ウール・ゴウンは皮膚も肉もない眉間を押さえて最悪の事実を改めて飲み込む。いったいなにがあったのかという質問に答えてくれる人物がいるはずもなく、とにかくこの問題を解決するべきだと自分に言い聞かせ、顔を上げてアルベドに向き直った。

カジットという名前^{マジックキャスター}の魔法詠唱者を造作もなく屠り、冒険者組合よりミスリルのプレートを与えられたところで入ってきた情報は、アインズを悪い意味でひどく驚かせた。もしも表情筋が残存していたのであれば、ありとあらゆる方向に動かされたに違いない。それでも踏みとどまったのは、すでに精神作用無効によって鎮静化されたから、そして目の前の彼女がこれまで見たことがないほど落ち込んでいるのがわかったから

だ。

花のようなかんばせは翳り、アルベドも不安を感じているのだとわかる。

ならば彼らの長たるアインズが泣き言を言うべきではない。アインズが第一にしないでほならないことは、シャルティアがなぜ裏切ったのか原因を究明すること、そして行方がわからなくなってしまうたシユヴアインを見つけることだ。

どちらにせよ、まずは玉座の間へ行かなくてはならない。

そう判断したアインズは、アルベドの後ろのほうで待機していたユリ・アルファから指輪を受け取ると、それを薬指にはめて転移の力を発動させる。転移先の大広間から玉座の間までを進む間にアルベドにいくつかの確認を済ませ、玉座の元へ辿り着いたところで目的的操作を行った。

「マスターソース、オープン」

言葉に反応して空間に浮かび上がった半透明の窓の中から、アインズはNPCのタグを選ぶ。そこに並んだ名前の一つに視線をやった。

このようになっております、というアルベドの言葉の通り白い文字で書かれた名前が続いている中で「シャルティア・ブラッドフォールン」の項目だけが黒くなっている。ありえない。精神支配を意味するその状態にアインズは大きく叫んだ。

：

セバスの話では、シャルティアは野盗と遭遇し、そのあとは野盗を捕獲するためにアジトへ向かったという。その一方でシュヴァインはマーレと他の冒険者たちと一緒に、同じく野盗を討伐するために森を搜索していた。

偶然にもその野盗のアジトが同じもので、不幸な行き違いから冒険者たちは壊滅したらしい。

そのあとで「なにものか」が接近してきたことを感知したシュヴァインたちは、つじつま合わせの意味も兼ねてマーレは別行動を取るようになったそうだ。

そうしてシャルティアとともに問題の元へ向かったところで消息は途絶えてしまった。

そのなにもものかがシャルティアに、そしてシュヴァインになんらかの害を与えたことは想像に難くない。考えたくはないが、シュヴァインは精神支配を受けたシャルティアの手にかかってしまったのだろうか。まだ見ぬ敵に強い殺意がにじむ。

至高の御方に手をかけた不屈きものを処すための討伐隊の編成を、と勇むアルベドをなだめて、次にアインズが向かったのはナザリツク地下第五階層であった。

その中にある二階建ての洋館、氷結牢獄。

目的の場所に辿り着く間にアルベドに防寒具としてマントを与えたら「アインズ様の腕に抱かれているようです」と意味深なことを言われたり、アルベドが天井に突き刺

さつたりと紆余曲折あつたものの、扉の前までやってきた。

アルベドが壁から生えた手に渡された赤ん坊の人形を受け取って、そうして扉を開く。アインズは何百という赤ん坊の泣き声に迎えられ、部屋の中央で揺りかごを揺らしている喪服の女を見つめた。

「そろそろ始まるかな？」

「だと、思われます。ご注意を」

その会話を合図にしたように女の動きが止まる。

そしてゆっくりと揺りかごから赤ん坊を、いや人形を取り出した。けれどもそれは、女の手で壁に叩きつけられてしまった。全力投球された人形は壁にぶつかって粉々になる。

「ちがうちがうちがうちがう」

「わたしのこわたしのこわたしのこわたしのこわたしのこわたしのおお！」

「おまえたちおまえたちおまえたちおまえたち、こどもをこどもをこどもをこどもをさ
らつたなさらつたなさらつたなさらつたなああああ！」

巨大な錠を構えて、こちらへ走り寄ってくる。ここまでがテンプレートだ。

「お前の子供はここのだ」

「おおおお！ …これはモモンガ様、そして私の可愛らしいほうの妹、ご機嫌よう」

人形を受け取って母親のように抱きしめてからそれをそっと揺りかごへ戻す。そうして女は、ニグレドはようやく二人にまともな視線を向けた。

「はつきり言おう。目標はシュヴァインさんとシャルティア・ブラッドフォールンだ」

「階層守護者と、……至高の御方であるシュヴァイン様をですか？」

今はモモンガではなくアインズ・ウール・ゴウンと名乗っていることを手短かに伝え、挨拶もそこそこにアインズは氷結牢獄を訪ねた理由を告げる。

そうして探している人物の名前を聞いたニグレドは、皮膚のない顔を少しばかり聳めた。

その反応は当然と言えば当然だ。アインズが「至高の四十一人」の最高責任者だと言えどその立場は平等のものだから、そのプライバシーを職権乱用で侵害していいはずがない。

これが平常時のことであればニグレドが言うことはもつともだが、アインズはゆつくりと首を振った。事態は急を要するのだ。

「現在ナザリツクは非常事態に陥っている。シュヴァインさんの行方がわからなくなっていて、最悪の場合は命の危険すらある。これだにこともなければシュヴァインさんに謝罪すると約束しよう。よろしく頼む」

「……か、畏まりました」

自分の存在理由とも言える「至高の御方」を失う状況を想像したニグレドが、ぶるりと身体を身震いさせてアインズの命令を承った。そんな姉と同じことを想像したのかアルベドの顔色も悪い。

「お願いね、姉さん」

さすがのような妹の言葉にうなずいて、ニグレドは魔法を複数発動させた。

皮のない手に汗がにじむ。もしも自分が見つけることができなければシユヴァインはすでに、という可能性がぐんと上がるからだ。

「…シャルティア・ブラッドフォールン、発見いたしました」

クリスタル・モニター
「へ水晶の画面」を」

アインズの言葉に従ってニグレドは搜索用とは違う魔法を発動させ、名前の通り水晶の画面を空中に浮かび上がらせる。どこかの森の開けた場所でシャルティアは一人だけぼつんと佇んでいた。

そこにシユヴァインの姿はない。それを確認したニグレドはすぐさま引き続きシユヴァインを探す作業に戻る。

目的の人物が片方しか見つからなかったことに少しばかり落胆する一方で、アインズはシャルティアの厳めしい武装に目を見張った。

身体に纏っているのは血に濡れたような真紅の全身鎧。白鳥の頭部に似た兜には左

右から鳥の羽のような装飾が突き出して、胸から肩を經由したところにも、鳥の翼をイメージしたような装飾が垂れている。普段はレースやフリルをあしらった豪華なドレスを身につけている腰には、戦うために邪魔なものを一切切り払った真紅のスカートを巻きつけていた。

そしてなによりも目を引くのは、片方の手にしかと握りしめられたスポイトの形に酷似した巨大な槍だ。

——それは彼女にとつての完全戦闘態勢である。

「スポイトランス！ ペロロンチーノ様がシャルティアに与えた神器級マジックアイテム！」

シャルティアの持つその武器を見て、アルベドが驚愕の声を上げた。

無理もない。神器級アイテムというのはそれほどの価値と威力を兼ね備えたものだ。

……つまりこれで、同行していたシユヴァインが生存しているという確率はますます下がった。

それを理解してアルベドがさらに顔色を悪くする。身体に皮膚や肉があり血が巡っていればアイズも同じ顔をしたはずだ。

「生きていてほしい」と願う側ら「もうだめなのは」とそんな恐ろしい考えがよぎり、それを振り払うように首を動かしたところでニグレドが叫んだ。

「シユヴァイン様を発見いたしました！」

悲鳴にも歓喜にも聞こえるニグレドの声が響いて、もう一つへ水晶の画面クリスタル・モニターが浮かび上がる。

そこに映っていたのは鱗模様の皮膚に無造作に束ねた蛇の髪をした男、間違いないシユヴァインであつた。

「ああ、ご無事だったのですね……！」

「……いや待て、アルベド。様子がおかしい」

ナザリック地下大墳墓を出立したときには身に纏っていた外套や巻きつけた布、保護眼鏡ゴーグルは全て取り払われている。冒険者として活動していることを「なにものか」にばれないために外したのだとしても森の中をそのまま歩くのは不自然だ。

そうしてなにより彼は、片手に恐らく人間だろう、首からうえない死体を引きずっている。

ゆつたりとした足取りは頼りなく、だらりと首を垂らして猫背のまま歩を進めていた。

「お怪我をされているようです」と告げたのはニグレドだ。黒い装備のうえからはわかりにくかったが、その言葉の通り、腹の辺りが濃い色をしている。傷をかばって歩いていると言われれば、なるほどと思うような歩きかただった。

しかし、アインズの中の疑問は尽きない。こうして無事ならばなぜ一度としてへ伝言（メッセージ）に応答してくれないのか。シャルティアの状態を見る限りなにもなかったということはないだろう。

むしろ自ら連絡してきてもおかしくないほどの非常事態が起きているのに。

シュヴァインの様子とこの状況を比較して考えれば、シュヴァインも「なにものか」によつて精神支配を受けていると判断したほうがいいだろう。

そうしてアインズはシュヴァインの石化の蛇（メドゥーサ）としての能力を思い出して、ない舌を打った。

「厄介だ…、あのスキルが発動している」

シュヴァインの選択した種族である「石化の蛇（メドゥーサ）」は状態異常にとても弱い。

それでも彼がこの種族を選んだ理由がこのスキルがあるからだ、と話しているのを聞いたことがある。特殊条件で発動するスキルが、精神支配とぶつかりあつて彼を能動的に動かしているのだ。

コンソールが開かない以上は確認することができないが、シュヴァインの現状も精神支配、もしくは混乱状態に陥っているはずだとアインズは考えた。

「っ！ アインズ様！」

「なっ…！」

ふと「なにか」に気づいたようにシユヴァインは顔を上げた。うつろな目は空中をさまつて、やがて一点を捉える。

遠隔視の魔法越しであるはずだというのに、アインズとシユヴァインの視線が合う。そうしてシユヴァインはにたりといびつな笑顔を浮かべると、いつの間にか手に握っていた細いスティックのようなものをへし折った。ばきんと硝子の割れる音がして〈水晶の画面〉にひびが入り映像はそこで消滅した。

「も、もう一度投影いたします…！」

「…いやいい。今のはわたしがシユヴァインさんに渡していた対探知魔法対策アイテムだ」

アイテムはあれ一つではない。これ以上は無暗に魔法を放つても対策される可能性があるとして、ニグレドに説明してから、アインズは先程の光景を胸中で繰り返し思い出す。

ただ一人、ともにこの世界へ来た仲間が生きていた。

仲間たちが残してくれたNPCも自ら裏切ったわけではなかった。

「…糞が！ 糞、糞！」

しかしどちらでも無事だとは言いがたい。かけがえのないものたちをこのような状態にしたまだ見ぬ敵に、煮え立つような殺意が精神作用無効で打ち消されるたびに湧き上がる。

見つけ次第皆殺しにしなければ気が済まない。それも一瞬で昇天させてやるのではなく、生まれてきたことを心の底から懺悔するような処罰を下してやらなければ、この怒りは決して納まらない。

しかし現在とはともかくにも、まず彼らを取り返さなくてはならない。

「アルベド、早急に守護者たちを集めろ。部隊を編成する必要がある」
「畏まりました」

×××

これは数時間前のことである。

まず彼らの前に現れたのは吸血鬼^{ヴァンパイア}であった。

耳のうえまで避けた口が大きな半円を描いていて、無数に生えた小刀のような歯が口を動かすたびにきちきちと音を鳴らしている。その怪物が異様な強さを持っていることは、この場にいる誰もが理解できた。

災厄の竜王の家臣か、はたまた別の怪物か。

そう身構えた仲間のうち二人の首が宙に投げ出され鮮血を噴き出したところで、彼らは背後から奇襲してきた敵に気づいた。

「おい……おいどうしたー」

完全に動きを止めた吸血鬼ヴァンパイアを案じてか、怪物がそのすぐそばに降り立ったことで、ようやく部隊はその姿を視認する。

月明かりに照らされた顔や腕はてらてらとした鱗模様の皮膚で覆われていた。

縦に割れた瞳孔は金色をしていて、動かなくなつた吸血鬼ヴァンパイアの様子を不安気に伺っている。

そうしてなにより異質なのはその髪の毛だ。いや、それは毛髪ではない。その一本一本が一匹の蛇で、蛇たちはまるで怪物の感情に合わせているように複雑に身をくねらせている。

それを無造作に束ねてはいるものの、狂暴そうな蛇たちを拘束しておくにはあまりにも心もとない繊細な作りの飾り紐だった。

人と蛇を掛け合わせたようなおぞましい姿に隊員数名は息を飲んだ。

怪物が吸血鬼ヴァンパイアの肩を抱いて何度か声をかけても、当然、傾城傾国ケイセイケイコクによつて精神支配を受けた吸血鬼はその問いかけに反応を示さない。

そうしてすぐさまその怪物はこちらがなにかをしたことが原因だと察し、恐ろしい目付きで隊員たちを睨みつけた。すると、ぱきんという硬質な音と誰かの断末魔が木霊する。

「石化能力を持つている！ 目を見るな！」

武器の腐食に石化の力。蛇の類いであることから毒や麻痺の状態異常を負荷させてくることも想像には難くない。この怪物はどれほどの能力を持った存在なのかと、隊長は薄ら寒いものを感じて唇を噛む。

傾城傾国の使用者が復活するまでは、なんとか時間を稼がなくてはならない。

自分たちをはるかにうえをいく速度で動く相手にどこまで持ち堪えることができるのか。

「うちのこになにをしたんですかねえ」

ぬたりと地を這うような声が聞こえて左右に立っていたものの首が飛ぶ。

その怪物が手にしていたのは刀身、握りの部分にいたるまで鮮血の色をした細身のフランベルジェだ。まがまがしいオーラを纏った刀剣はそれ本体が脈打つように蠢いている。

しかし、

「あー…、くそ…」

これまでなんの反応も示さなかった吸血鬼ヴァンパイアがその姿を変えて、その巨大な槍で、武器を構えた怪物の腹部を背後から貫いた。

怪物は口から血を吐いて携えていたフランベルジェを取り落す。

アンデッドである仲間がまさか「精神支配」を受けるとは思っていなかったからこそ、怪物は不用意に武器を構えてしまったのだ。そしてその範囲内で攻撃する動作を行った。それを敵対行動と見なし、吸血鬼は対象を攻撃するというプロセスを決行したにすぎない。

——攻撃そのものが当たらなくても彼女はあれほど泣いたのだ。この状況を自分を知ったらどこかでひっそり自死してしまうかもしれない。

このときばかりは相手の意識がなくて助かったなあと口の中で呟いて、怪物は前方の敵対者を睨みつける。万全にはほど遠いが身体を横たえたまま、老婆が先程のアイテムをもう一度発動させようとしているのが見えた。

相変わらず老婆の持ち物から自分のスキルに対する反応は感じられない。

それでもあれほどの力を行使するアイテムとなれば、その答えは決まっている。

「世界級アイテムとかまじ受けるんですけどお」

狂喜と憤怒がないまぜになった感情が、「怪物」のきしむ頬を持ち上げた。

そうして天秤は傾いた

一つ、系譜を辿ろう。

そもそもメドゥーサというのは、ユグドラシルというゲームの中では種族の一つとして分類されていたけれども、本来はギリシャ神話に登場する女性の名前だ。

ゴルゴーンと呼ばれる三人姉妹の末の子で、元は目も眩むような美女だったという。

しかし傲慢なメドゥーサが「自分の髪はアテナの髪より美しい」と自慢したことで女神アテナの怒りを買って、その美貌は身の毛のよだつような醜さに、そして自慢の髪は一本残らず蛇に変えられたという物語がある。

その他に海神ポセイドンと、アテナの神殿でみだらな行為をしたため怒られた、などという説もあるが神話について語り始めたらきりがないうえに正解もわからないので以下省略する。

そのあとメドゥーサはペルセウスという若者に怪物として退治される、という落ちまであるのだけれど、この辺りもあまり重要じゃない。

ここで一つ言いたいのは、メドゥーサというのは大地母神ガイアという偉大な女神を祖母に持っているということ、間違いなく神という一族に血を連ねているということ

だ。

ユグドラシルに話題を戻すと、石化メドゥーサの蛇という種族は皮膚がなかなかグロテスクな見た目もさることながら、あまりにも状態異常に弱いことからたいへん不人気な種族であった。

けれども石化メドゥーサの蛇には重篤な状態異常時に発動することのできる隠しスキルが存在する。

「蛇神の憤怒」
ライスオブゴゴン

一定時間プレイヤーの操作を受け付けけないが全能力の値が三倍に跳ね上がり、攻撃した相手を二分の一ほどの確率で即死させる。また一部の習得していない職業の第八位階までの魔法を使用可能にして、対象の攻撃を行うようになるという壊れ性能のスキルだ。

攻撃判定はパーティを組んでいる仲間にも及ぶため、石化メドゥーサの蛇の不人気を加速させるものになっていった。しかし趣味によるあれやそれでソロ活動をするが多かったおれにとっては、一撃必殺ともなるこの能力は素晴らしい恩恵だった。

ユグドラシルプレイヤーの常識のように推奨されている魔法職をかなぐり捨てて「盗賊」として育成したおれの非常事態における切り札だとも言える。

ゲームのときならば、おれも自分がそこまで追いつめられた相手に執拗な執着はしな

かった。しかしこれは残念ながら「遊び」ではなく「現実」である。
 ——やつらは、神の怒りに触れたのだ。

×××

玉座の間は渦巻くような憎悪と怒りに包まれていた。

目に見えるものと錯覚するほど色濃い負の感情がうねり、ないまぜになって、粘着質な空気が広い空間を満たしている。

シャルティアを除いた各守護者たちも、そして彼らの偉大な支配者であるアインズ自身も、この場にいる誰もが例えようのない激情を抱いていた。

アインズが「シユヴァインとシャルティアはなにものかによつて精神支配を受けたのだ」と確信して守護者たちに召集をかけてから、一時間ほどが経過した。

遠方に向向いている者のことを考えると人をひとところ集めるにはいささか短い時間ではあったが、守護者たちはその半分の時間で集合していた。

そうしてアインズは時計を確認するともう一度、今度は何重にも対策を施したクリスタル・モニター〈水晶の画面〉を発動させ、シャルティアとシユヴァインの姿を空間に投影させる。シャルティアはやはり微動だにせず同じ場所で佇んでおり、その一方でシユヴァインは人間

の死体を引きずって森の中をさ迷っていた。課金アイテムを使用した嚴重な対策が功を奏してか、今回の投影はシュヴァインの感知に触れずに映し出すことができたようだ。

シュヴァインに、そしてシャルティアに、なにがあつたのかということとはあらかじめ聞き及んでいたが、実際にその光景を目の当たりにするとより強い憎しみが守護者たちの身を焼いた。

「…やはりだめだな。念のために時間を置いてみたが、一定時間を経過してもシュヴァインさんのスキルが解除されないのは、間違いなく世界級アイテムの影響だろう」
 それでは流れ星の指輪の効果は無効になるだろう。

明確な敵意を見せたシュヴァインよりも、反応を示さないシャルティアのほうが多少なりと安全だろうと——無論、敵の罠があることを想定して——アインズは転移し、シャルティアの精神支配を打ち消すべく超稀少アイテムである流れ星の指輪を使用した。しかしその効果を無効にされたことで、シャルティアに、そしてシュヴァインに使用されたのは世界級アイテムだと知る。

敵は世界級アイテムを持つ一団。それがどこかに潜んでいるかもしれない危険を考慮しても、アインズは二人を諦めるつもりなぞ微塵もなかった。けれども、刻一刻と時間が迫っていることもまた事実であつた。

「シュヴァインさんの蛇神ラースオブゴゴンの憤怒は、無差別に攻撃を行うスキルだ。このままではシャルティアと鉢合わせで、戦いになる可能性もある」

そうなればどちらかが死ぬまで戦いは止まらないだろう。それだけは避けねばならぬ事態だ。

とも同行していたはずが、ああやつてシュヴァインがシャルティアから離れて行動している理由はわからない。わからないけれど、それが「不幸中の幸い」とも言えた。「ぼ、僕のせいです…。僕がシュヴァイン様のお側から離れなければ…こんなことには…！」

掻き消えそうな声でマールレが言葉を発する。その言葉の後半はもはや涙声で、聞き取ることも難しい声だった。

しかしマールレの言葉を聞いたアインズはゆっくりと首を振る。それは違うともと告げた声は、激情渦巻く腹の底から響くにしてはあまりに優しい声だ。

「シュヴァインさんはお前に別行動をするようにと指示を出した。同じ状況であれば、わたしも似た指示を出したことだろう。相手がこれほどの脅威だったことは不運であり、わたしたちの不注意だったと言える」

マールレは嗚咽を無理に飲み込んでアインズの声に耳を傾ける。自分の泣き声で至高の御方のお言葉を遮ることは許されない無礼だからだ。

「けれども、なんらかの非常事態が起こることを見越して、シユヴァインさんはお前という情報を伝達できる人物を残したのだ。それは事実、お前がいてくれたからこそ今回の事態の情報整理はうまく進んでいる。もしお前が情報を持ってきてくれなければ、わたしはシユヴァインさんという友人を、そしてシャルティアという忠義を尽くしてくれている大切な部下を、ほんの一瞬でも裏切られたのではないかと疑っただろう」

そこで一つ呼吸を置く。

「マール、お前は立派に自分の仕事を果たしたのだ」

至高の御方のお言葉を遮ることは許されないことだ。

頭の中ではそう理解しているのにマールの涙は、そしてのは、あふれる衝動を抑えられずにとうとう決壊してしまった。

両手で目を擦るマールには見えなかったが、この場に集った守護者たちは全員、目頭を押さえ、涙を取り出したハンカチで拭い、涙の流れないものはアインズのその慈悲深さの感動と崇拜で身体を震わせていた。

「さあ顔を上げる守護者たちよ。我々はかけがえのないものを取り返さなければならん」

穏やかな、しかし見えざる敵に対する憎しみに満ちた声が玉座の間に静かに木霊した。

途端、彼らの表情が引き締まる。そこにあるのは主人の命を絶対とする忠臣たちの姿だった。

×××

森の中は風の音と、それに身を揺すられる枝葉の音だけが響いていた。

デミウルゴスは手の中に握った最上級アイテムである小刀の存在を確認してから、ぐるりと周囲を見回した。視界はいいとは言いがたい場所だ。盗賊やアサシン、その上位職である忍びが身を隠すのならばこのうえない条件が揃った環境だと言えるだろう。

デミウルゴスがアインズから拝借した小刀は、ユグドラシルプレイヤーからすればなんといいことはない、ただ回復魔法の回復量が上昇する程度の小道具に過ぎない。アインズ自身も、課金ガチャのはずれとして手に入れた思い入れもくそもない一品である。

けれども今回この道具の役割はその能力ではない。デミウルゴスは鞘に納まった小刀を懐にしまつて一歩足を進める。

瞬間、獲物はかかった。

「なあんだ、はずれアイテムじゃないですかやだあ」

背後から心臓の位置を一突き。同時に懐にあった小刀の重さが消えた。

その正確な攻撃は即死耐性と何重にも及ぶ防御魔法がなければ致命傷だったことを想像させる。

「…私の元までご足労いただきましたこと、お礼申し上げます。シユヴァイン様」

身体から引き抜かれた刀は自分に追撃をしてこなかった。

まだ会話をする知性は残っていると判断したデミウルゴスがゆつくりと振り返ると、そこにはやはり探していた人物の姿がある。

整った容貌に流れるような蛇の髪と鱗模様の皮膚。

その造形は至上の芸術のようだと感嘆の溜め息を吐きそうになるのを飲み込んで、デミウルゴスは面白くなさそうな顔で小刀を捨てるシユヴァインを見た。その視線に気づいたシユヴァインは肩を竦めて芝居がかった動作で周囲を見回す。

「そんなこと言っちゃって、まだ二人隠れてるでしょ。豚君の目はごまかせないですよお」

「私どもの浅知恵は見透かされているようですね」

「そう言われると隠れ場所を見つけれない豚君が馬鹿みたいじゃないですか」

「今回の作戦のためにアインズ様よりかきんアイテムなるものを下賜されまして、シユヴァイン様が隠れている二人を見つけれないのはその恩恵かと」

「まじで？ 大盤振る舞いだね」

会話をしながら、このお方は、本来はこういう口調なのかとデミウルゴスは考えた。

思っていたよりもずっとくだけた口調に不意を突かれたが、そこに軽蔑などというような感情はない。ただ、やはりシユヴァインが信頼するに足る忠実なシモベには及んでいなかったという事実を再確認して自分自身に落胆した。そしてこれから自分が、自分たちが取るのは「忠実なシモベ」という位置からはひどくかけ離れた行為である。

「いくつか質問をお許してください。シユヴァイン様の発動されているスキル、ラースオブゴゴン蛇神の憤怒には二つの解除方法が存在するとアインズ様より聞き及んでおります」

「そうそう合ってるよ、時間経過で解除されることが多いけどね。そのときに打ち漏らしがあった場合の過酷さよ」

「…すでにその一定時間が経過しておりますが、第三の選択肢としてシユヴァイン様ご自身の意志で発動している蛇神の憤怒を解除するということは不可能なんでしょうか？」

「さあ、どうだろう。豚君難しいことわかんないですう。今のところやろうという発想も浮かんでこないですけど、デミウルゴス君はそんなことを聞いてなにか言いたいのかな？　かな？」

「…第二の選択肢を取るしかない、ということですね」

「えへ」

急速に放たれたその一撃は、寸分違わずデミウルゴスの首に狙いを定めていた。

それをぎりぎり回避したものの、すぐさま二撃目が迫り、刀が脳天目がけて振り下ろされる。

「今です！」

「シユヴァイン様、才覚悟ヲ！」

「はあん？ なあに？」

〈次元デイメンの移動シヨナル・ムーブ〉で突如シユヴァインの頭上から出現したコキュートスが攻撃を放った。

衝撃で地面が振動し、追い打ちをかけるようにコキュートスのクラス能力「フロスト・オーラ」で周辺が音を立てて凍てついていく。

「やりましたか？」

「イヤ、サスガ至高ノ御方ダ…全撃避ケラレタ」

「万全の装備ではないとはいえ、ご自身のスキルによつてシユヴァイン様は普段よりもお強いはずよ。二人とも気を引き締めなさい。そうしないと私たちの首が飛ぶわ」

魔法を発動させた以上、位置は感知されてしまったと判断したのだろう。ヒールを鳴らして森の中から現れたのは、先程〈次元デイメンの移動シヨナル・ムーブ〉を発動させたヘルメス・トリスメギストスを身に纏ったアルベドだった。

これで周辺に隠れていた人物は出揃った。シユヴァインはそれぞれの顔を見て舌を

打つ。

「隠れてた二人ってアルベドとコキユートスかよ……がち勢とかつらすぎ……。てか寒い……」

コキユートスの攻撃地点からおよそ二十メートル。あの一瞬であの場所まで移動したのか、と守護者三人は舌を巻いた。

だが感心してばかりはいられない。彼らがアインズから命じられたのは、蛇神ラースオプゴゴンの憤怒の二つ目の解除条件である、使用者の体力を現時点から七割を削り取れというものなのだから。

「なに？ みんなしておれのこといじめに来たの？ それとも、……おれにアイテムくれるの？」

けして殺さず、しかし体力のほぼ七割という生き物がぎりぎり動ける程度の傷を負わせること。

蛇神ラースオプゴゴンの憤怒が解除されれば、生死の境界に足をつけたような自分の姿を、そしてそこまで追い詰めた守護者たちを「至高の御方」はどう思うだろうか。

きつと、お隠れになつてしまふだろう。

アインズの命令を聞いて守護者たちが真つ先にたどりついたのが、その結論であった。

しかし拒否することもまたできなかつた。それも「至高の御方」の指示であり、なによりシユヴァインを救出するために示された唯一の手段だったからだ。自分たちの存在理由と至高の御方の開放と。それを天秤にかけたとき、はかりは容易く後者に傾いた。

ならばと、そこから彼らの行動は早かつた。

現在のシユヴァインの装備による強さの計算を行い、そしてシャルティアと戦うほうを請け負ったアインズとアウラに接触しないようマーレの魔法で広範囲の防壁を展開させ、シユヴァインをその中へ隔離する策の提案など、綿密な計画が立てられた。

至高の御方にお仕えするシモベの中でも計画の立案者がその頭脳の一、二を誇るアルベドとデミウルゴスであり、それを切り込んでいくのが守護者随一の攻撃力を持つコキユートスだ。

そしてシユヴァインにダメージを与える際、一番の難関であるだろう徹底して作られた「問題の装備」は、ナザリック地下大墳墓のシユヴァインの自室にあることは確認済みである。

ラースオプゴゴン

蛇神の憤怒を発動させたシユヴァインであつても、三人同時に相手をするのは至難の技であるだろう。

けれども。

「お許しください、シユヴァイン様」

「ああ、お前の全てを許すとも。……なんちやつてえ」

いつか言われた言葉に、自分が仕えるべき主人の言葉に、アルベドの決意が揺らぐ。一気に距離を詰めて繰り出されたシユヴァインの攻撃はアルベドの脇腹を強く叩いた。

すぐさまコキュートスが切り伏せようとしたところを潜り抜け、シユヴァインは甲冑とも表現できる屈強な肩を押さえ、飛び上がり、虫類の弱点とも言える頭と身体を繋ぐ首の節を狙う。

構えた武器の切っ先は常時発動能力の効果により表面にどろりと毒がにじんだ。

「ジユデツカの凍結！」

レベル差によって、デミウルゴスがシユヴァインの時間を止めたのはほんの一瞬のことだった。

けれどその一瞬はコキュートスに十分な時間を与える。斬神刀皇が傷を負ったシユヴァインの腹を捉え、叩きつけるように放たれた。

「い……ッ！」

吹き飛ばされたシユヴァインの身体は木々をなぎ倒して見えない壁にぶつかった。マールによって展開された防壁である。

「アト何撃ダ。…至高ノ御方ニ我ガ剣ヲ振ルウ日ガ来ルトハ、自責ノ念テ身ガ裂ケソウ

「ダ」

「全員が同じ気持ちだともコキュートス。そしてさすがと言うべきか、悲しむべきか、今の攻撃ならばあと数十回は繰り返す必要があるようだ」

フロスト・オーラの効果も出ているようだが、この調子だと三日はかかるね、とライフ・エッセンス〈生命の精髓〉を発動させたデミウルゴスの目はシユヴァインの残りの体力を正確にコキュートスへ伝言する。

「…シユヴァイン様?」

けれど、戦闘の最中だというのにのろのろと立ち上がって、ぶつかった壁の向こう側へ視線を送るシユヴァインの様子に、追撃を放とうとしたデミウルゴスの手も止まる。解放するために攻撃をしなくてはいけないと理解していても、相手は全てを捨てても仕えたい至高の四十一人の一人である。身を案じて心配してしまうのはしかたのないことだった。

「アインズ様がいらっしやる方向ね」

体勢を立て直したアルベドが、シユヴァインの見つめる先にいる人物を思い出す。けれどシユヴァインはその方向にアインズがいることを知らないはずだ。盗賊のスキルで感知するにもあまりに距離が遠い。

しかしシユヴァインがその向こうにいると知っている人物をあげるとすれば、それ

は、

「…やめろよ、おれ、こつちには行きたくない」

鉄の塊を打ち合わせたような音と、静かな声が響く。

再び距離を詰めてきたシュヴァインの武器とアルベドのバルディツシュがぶつかり合う音、そして嫌悪するかののような表情で咳かれるシュヴァインの言葉だ。

「それは、なぜでしょう？ …はアツ！」

「なんでだろう、ね、つと、危なかったあ！ はい次イ！」

シュヴァインの攻撃は、三者に、平等に切りかかる。誰かの攻撃を避けるついでとばかりにその先にいる誰かへその切っ先を振り下ろすのだ。踊るように三人の輪の中から外から繰り出される攻撃は、武器の性能もあり大きなダメージを与えてはこない。けれども確実に蓄積していく。

そうして思うようにこちらの攻撃を与えられないこと、耐性を持っていない状態異常が負荷されていくことが、ゆつくりと守護者たちの身体と精神を蝕んでいた。

少しずつ動きが鈍くなれば、その隙を逃さずシュヴァインが攻撃を畳みかける。

三人の守護者を同時に相手にしてもこれほどの力を持っているのだ。尊敬の念を抱くと同時に、焦りが守護者たちの内心に産みつけられていく。

けれどその心を打ち直したのは、皮肉にもシュヴァインの言葉であった。

「ああそうそう、思い出した！ 巻き込むから！」

「巻き込む？ ぐう……ッ！」

「そう、蛇神ラースオブゴゴンの憤怒つて無差別じゃん？ だから豚君は問題の婆さんだけ殺して、こんなところまで引きずってきたのよお。戻ったら意味ないじゃん？」

「いったい誰を巻き込むというのか。そう問いかける必要もなかった。

精神支配を受けた影響でスキルの能力に浸食される直前に、このお方はシャルティアを巻き込むまいと距離を置いたのだ。それが、この不自然に開いた距離の真実だ。そしてその意志は浸食されてなお、堅牢に保たれている。

アルベドは唇を噛み締めてシユヴァインをきつく睨んだ。そうでもしないと、すぐに泣いてしまいそうだったから。泣けばさらに隙ができて、相手はそれについて切りかかってくるだろう。作戦を遂行するためには自分が動けなくなるわけにはいかないのだ。

「必ず、必ず私たちが、シユヴァイン様をお助けします」

それは言うまでもなく、ナザリックに属するもの全ての総意だった。

雨降って地固まる

知覚に引つかかるものがあるなら切り伏せてしまえばいいと本能が訴えている。

おれの食指が動かないアイテムごと生き物をなます切りにして、生暖かい血液やら肉片を頭から浴びればそれはそれは面白いぞと何度も言うのだ。

そうして欲しいものを奪ってしまえば、最高じゃないかと。

それなのに干からびた婆さんの死体一つを引きずって、おれが自分の盗賊スキルも及ばない場所へのこのこと歩いてきたのはなぜだろうか。

この婆さんが世界級アイテムを持っていることは間違いない。だからこんなに重たい荷物でも、わざわざ持つて歩いている。ああでも世界級アイテムが切り落とした首のほうについていたらどうしようか。これだから感知できないものはどうしようもなくめんどうくさくて、いい意味でも悪い意味でもたまらない。

そう思って元来た道を戻ろうとして、——けれども足が動かなくなる。

今戻るのはよくないだろう。

それはなぜだ。

あの子を巻き込むから。

「あの子」とはなんのことだろうか。邪魔者なんて潰せばいい。

いいから先に進もう、アイテムの使用者がいなければ精神支配されていたってうまく制御できないだろう。

そもそもおれがここまで来たのはどうしてだろう。あの場所にまだ獲物はいたのに。このどうしようもない衝動にあの子を巻き込んだらだめだろうとなにかが言う。

結局戻ろうとすれば説明のしようのない不快感に苛まれるので、おれは婆さん一つで諦めて、目につくはしから動物を切り殺して森の中を闊歩し続けた。

ああ、でも戻りたいな。盗賊スキルに引つかかったアイテムを回収したいな。でも「あの子」を巻き込んだらいけないからな。戻れないならしかたのないことだね。

もうおれの知覚できる範囲内には感知できるアイテムも、気配を感じる生き物もない。い。

けれどもその繰り返しばかりで森の中をぐるぐる歩いていると、不意に湧いて出たようになにかが盗賊スキルへ感知された。

婆さんの死体を木のうろに隠してアイテムの匂いをさせる方向へ進めば、そこにはよく見慣れた男がいた。だから、心の臓を狙って突いた。なぜおれは知り合いを殺すつもりで突き刺したのか。そこにぼんやりと疑問が湧いたけれど、本能がそうしろと言うからしかたない。

しかし即死を狙ったおれの攻撃に相手はびくともしなかった。

多少のダメージは負っただろうが、攻撃力もレア度もそこでしかない武器でレベルをカンストした相手に与えられるものなどたかが知れている。一撃で仕留められないのなら、この状況は厄介だ。負荷が足りない。確率が外れた。これはそういう理由ではなく、どうやら相手が魔法やアイテムを使用して即死に対する耐性を身につけているらしい。

「私の元までご足労いただきましたこと、お礼申し上げます。シュヴァイン様」

本当に厄介なことだと小さく舌を打つ。おれはまんまと相手の策にはめられたようだ。

知覚が訴えてくるのは目の前の男だけではなく、どこかに二人、隠れてこちらの様子を伺っているのがわかる。

そうして「めんどろくさいなあ」とおれの中の人間らしい部分が愚痴を言う。

けれども「これはこれで面白そうじゃないか」と笑うのもおれの中の人間らしい部分なのだ。

仲間たちが作り出した彼らは、言うまでもなく集めるに相応しいアイテムを身につけているのだから、そのままころしてしまってもしかたがない。

なぜ仲間の子供と呼べる人物をころす必要があるのだろうか。それはやはり、本能が

そうすべきだと言うのだから、どうしようもない。

ころす？ 殺す？ なんでころすのだろうか。どうしようもないからだ。

Q：神様の言うことは？ A：ぜったーい！

だからおれはもう一度、迷いなく刀を振り抜いた。

：

「いいわね、デミウルゴス」

「無論です」

「…ヨロシク頼ム」

この場にいる誰よりも速度は勝っている。けれど装備の都合で防御力や攻撃力は少し劣る。

そんなおれの目の前にいるのは、その「少し」が敗北要因となるやつらばかりだ。

時間が長引けば、回復アイテムを使用されれば、それだけの理由でおれは負けという位置まで追い詰められてしまうだろう。

だからできるだけ早期に決着をつけなくてはならない。耐久戦を重視して育成してきた結果がこんな場面で裏目に出るだなんていったい誰が考えるだろうか。ナザリツク地下大墳墓の自室に置いてある装備が恋しい。

「悪巧みかな？」

「おっしやる通りでございませう、つゝはアッ！」

おれが振るった刀をバルディッシュで受け止め、アルベドは微笑んだかと思えばおれの体重ごと勢いを打ち返した。あの美女の腕力はどうなってるの。

着地しようとした地点ではコキュートスが待ち構えているので、腹から分割されないためにも空中に浮いた身体に回転をかけて体勢を整える。視界に入るのは振り下ろされる斬神刀皇——神器級アイテムだ。

「いいよいいよお」

がぁん、と鉄の板を打ち鳴らすようなけたたましい音がして装備していた武器がへし折られた。そうして右腕がびりびりと痺れるのを左腕で押さえながらも、おれは顔に満面の笑みが浮かぶのを耐えられない。おれの半分麻痺したような右手に握られているのは斬神刀皇、コキュートスの持つていた神器級アイテムである。

「ひとのものをとつたらどろぼう？ 笑わせるなよ、おれは盗賊だぜ」

馬鹿でかい大太刀は地面について引きずられるような状態になっている。それを野球バットのようには振って切りつけければ、風圧で周囲の木々がなぎ倒された。まるで笑い話のような切れ味だ。手で握る感触はまだ麻痺しているのに、装備した斬神刀皇は吸いついたように離れないのがまた笑えてくる。

攻撃力の問題があるのなら現地調達で解決すればいい。

コキユートスから放たれるフロスト・オーラに当てられて顔や身体がみしみしと薄氷に覆われていくのを感じつつ、おれはもう一度握りしめた大太刀を振り上げる。これで攻撃力の問題は解決したのだから、こちらがとどめを刺される前に三人を仕留めればいだけだ。

武器装備で負荷される荷重？ 重戦士系の武器によるペナルティ？ 三倍まで上がった速度の前には微々たるものだよお。

確かに装備する前と比較すれば速度は落ちる。けれども先程までの攻撃力を計算すれば、こちらのほうがよほど勝率が跳ね上がるのだから装備しないという選択肢はないだろう。

「悪魔の諸相、八肢の迅速」

「まだ遅いんだなア！」

弾けるような血飛沫が上がった。

デミウルゴスの腹に深々と突き刺さった斬神刀皇を見て、頬に付着した血液を舌で舐め取る。あと二人。身につけているものは全員始末してから選別すればいいと体勢を整えて、デミウルゴスの腹から斬神刀皇を引き抜こうとしたところで異常事態は発生した。

太刀が抜けないのだ。それどころか血塗れた手で胸ぐらを掴まれて身体にしがみつ

かれて、まともに身動きすることができない。

斬神刀皇でも一度切りつけて引き剥がそうにも、身近でしがみついてくる人物の腹に突き刺さった長大な太刀はある程度距離を置かなければ取り扱うことすら難しい。

——ああ、くそ、これも策のうちか！

「離せ、……ぐうっ!？」

コキユートスの二本目の腕に構えられた武器が振るわれて、デミウルゴスごと地面に叩きつけられる。身体を起ここそうとしたところで視界からコキユートスが消えていくのが見えた。転移魔法の類いの魔法陣が糸を引くように霞んで消えていく。

「これから私たちが乞う許しを、けして許さないでください。シュヴァイン様」
上等な鈴が響くような声が聞こえた。

そこにいたのは、ヘルメス・トリスメギストスの兜を取り払ったアルベドだ。

フロスト・オーラで霜の降りた草地を踏んで近寄ってきたその悪魔は、おれとある程度の距離を置いて立ち止まる。背筋を伸ばして、凜とした顔でおれを見据えて、そうして表情を一転させてとても悲しげに眉を寄せた。まるで今生の別れのように。

その厳めしい戦士の装備に不釣り合いなその手に握られている異様な造形の短杖は、
「真なる無……!」
ギンヌンガガブ

「シュヴァイン様が左手の人差し指につけていらっしやる指輪は体力以上の攻撃を受け

たとき、即死を防ぐ特性があると他の至高の御方々と玉座の間でお話していらつしやいましたね。それをこうして利用する無礼をお許しください」

「嘘だろ、それを発動したらデミウルゴスが死ぬぞ！」

おれにしがみついたままのデミウルゴスの顔色は悪い。そりやあそうだ、大振りな刀が腹を貫通して平然としている生き物なんていないだろう。

それをしでかしたのはおれだというのに、ひどく追い詰められた気持ちになる。

「どう、どうか…お、おゆるし、くだ、さい…」

そうしてアルベドが転移する直前に聞こえたのは、嗚咽と涙声が混ざった声だった。深く頭を下げていたのでその表情まではわからない。

けれどそれに気を取られている暇もなくおれを中心に空へ魔法陣が描かれて、ここ一帯を見る間に包み込んでいく。

「くそ、離せ、デミウルゴス…！ 諦めてたまるか…！」

「いいえ、お許しください、その命令に従うわけにはまいりません！」

口から血を吐きながら、デミウルゴスは一層強くおれの胸ぐらを掴んだ。

ここでようやく守護者たちは本気なのだと悟る。守護者たちはデミウルゴス一人を犠牲にして、おれがまともに身動きできなくなるようなダメージを叩き込もうとしているのだ。

死をもつてしても得られるのは敵の負傷だなんてそんな納得のいかないことがあるだろうか。

「馬鹿か、お前ここで死ぬつもりか！　こんなろくでもない男一人を捕獲するのに命を捨てるなんて無意味だろうが！　殺そうとしたおれが言うのもおかしい話だけどさア！」

「いいえ、至高の御方を御救いすること、これほどの名譽の死がありましようか！　シユヴァイン様、あなたは、あなた様方、至高の御方々は、生きていて下さるだけで我々の存在理由であり、命であり、唯一無二のかけがえのないものなのです！」

怒鳴っているからなのか見開いた宝石の目に何人ものおれが映った。

なんだそれ。

「別におれじゃなくてもいいんだろ？」

一瞬、息が止まったようにデミウルゴスが動きを止めた。

そうして視界に映る限りの世界が輝く。

燃え盛る業火か、怒濤の吹雪か、よくわからない衝撃が全身を包んで、目を開けていられない。やがてそれが消失したと思えば代わりに例えようのない激痛が身体を駆け巡った。

頭が痛い。垂れてきた血で視界も霞んでいる。

足が痛い。たぶん両足とも折れている。

腹が痛い。恐らく衝撃で内臓の一部が潰れたのだろう。

「けれどまだおれは生きている。デミウルゴスがいた場所に残された斬神刀皇を手探りで探し、なんとか見つけたところでおれのうえに影が落ちた。

「シユヴァイン様、オ加減ハイカガデシヨウカ？」

「あ、が、あああああ！」

潰れたのが断末魔のような濁声を上げる。

折れた両手で斬神刀皇を握り、折れた両足でなお立ち上がろうとするおれを見て、コキユートスははゆつくりとした動作で武器を構えた。

「……ドウカ、オ許シクダサイ」

武器が振り下ろされてそこからおれの意識はない。

×××

全身が痛い。

ただそればかりを感じて重たい目蓋を開けば、そこにいたのは世にも恐ろしい骸骨の顔だ。

「目が覚めましたか？ シュヴァインさん」

ぼんやりと周囲を見渡せば、目の前の骸骨のすぐ後ろに大きな虫が控えている。誰だ、どこだここと自問自答を繰り返していればだんだんと記憶が蘇ってくる。ここはナザリック地下大墳墓で、おれの自室だ。

「あー……あー……あー……、あー……、………寝るう」

みしみしと痛む腕を無理に動かして頭から布団を被れば「この様子なら蛇神ラースオフゴゴンの憤怒は解除されているだろう。下がっていいぞコキュートス」「畏マリマシタ。ナニカ必要ナコトガアレバ、イツデモオ呼び下サイアインズ様」という会話が聞こえてくる。

そうして部屋の扉が閉まったところで、布団という名前の心の壁がモモンガさんの手によつて容易く奪われてしまった。

「きやーえっち」

「しばき倒しますよ。もうすぐペストーニヤが来ます。それで身体を一気に直しましよ
う」

「秒2%回復がまるで効いてる気がしない」

「すみません、まだスキルが続いている場合を考えて課金アイテムで抑制しました」

「ええ？ おにのこかきさ、…いや、今回は大変ご迷惑をおかけして、すみませんでした」

のどが潰れてざらざらとした声を見かねてかモモンガさんからポーシヨンが一本差

し出される。

それを飲み干して一息つくとおれはぶるりと身震いをした。ユグドラシルでPKするしないの遊びではない、殺し合いの世界を思い出したからだ。

いや、殺そうとしたのはおれだけで、きちがいとも言える状態になったおれを生かしてここまで運んできたのは優秀な守護者たち、そしてそれを指示したモモンガさんだ。おればかりがただただ迷惑をかけた。

おれはこの直面した環境を甘く見ていたのだ。続編のゲームを楽しんでいるだけのような生温い精神で、ふらふらと遊んでいた結果がこのありさまだ。そうしてその怠惰のせいで、出してはいけない犠牲が出てしまった。

「モモンガさん、おれのせいでデミウルゴスが…」

「ええ、ええ、大丈夫です。シャルティアも、デミウルゴスも、アインズ・ウール・ゴウの仲間たちが残してくれた大量の金貨で無事に蘇生されました」

宥めるようにおれの肩を撫でながら、モモンガさんがおれの言葉に返答する。

けれどその解答はおれに新しい不安を植えた。

「シャルティア？ シャルティアがやつらに殺されたっていうんで、いつ！」

「落ち着いてください、傷だらけのままナザリックまで連れて来たんです。…なんの心配もいりません。事態は無事に落ち着きました」

「……………はい」

「シャルティアはね、わたしが…俺が殺したんです。流れ星の指輪も効かず、かと言って今後のことを考えれば世界級アイテムを使用するような度胸もなく、仲間たちの作りあげた子供を俺がこの手で屠ったんです」

それは「軽蔑しますか？」という質問を匂わせた沈黙だった。

モモンガさんは考えていたよりもずるい人だったらしい。そんな言いかたをされてしまつては、おれのほうが重罪になるじゃあないか。

「質問に質問で返しませうか。さんざん暴れまわつて他人に迷惑をかけて、挙げ句に無事に蘇生することができたとは言え、部下を死に追いやったおれを軽蔑しますか？」

「字面だけ見るとひどい状態ですね」

「お恥ずかしい限りです」

そこでようやく、おれたちに少しばかりの笑いが訪れた。

「治療魔法での治療が終わつたら守護者たちに顔を見せてやってください。とりわけシヴアインさんを攻撃したからと、アルベド、デミウルゴス、コキュートスの落ち込みようがひどくて…」

「あー…あー…あー…」

「どうしました？」

「おれも顔を合わせるのが死ぬほど恥ずかしくて。特にデミウルゴスにはさんざん暴言を吐いたというか、めんどくさい彼女みたいなことを言ったというか」

「わかりました、治療が終わったらすぐにデミウルゴスを呼びますね」

「鬼の子か貴様」

…

そうして玉座の間ではおれが謝罪を述べ、守護者たちも快く許してくれたのであった。とか思うじゃん。本気でデミウルゴスを連れてくるとか思わないじゃん。じゃん。

「シユヴァインさんがお前に話したいことがあるそうだ」とか会話に対するハードルを上げてくるあたり嫌がらせとしか思えない。目覚めたときは「シユヴァインさんが無事でよかった」とか言ってくれたけれども、あとからじわじわ「心配かけさせやがってあの豚野郎」とかそういう類いの怒りがきたパターンと見た。

「…まあ、座れ」

「…はッ」

気まずうい。

デミウルゴスの背後からサムズアップして部屋から退室したモモンガさんにもギンヌンガガフ真なる無の制裁が落ちてくれないだろうか。無理だろうな。持ち主がアルベドだもん

な。

モモンガさんに手渡されたアイテムを手の中で転がしながら沈黙に耐えるが、そりゃあ呼び出したはずの上司がなにも言わなければデミウルゴスも発言できるわけがない。つまりおれがなにか言わなければ、この沈黙は続くのだ。うわ…つら…。

「今回のことは礼を言おう…いや、悪かったな…これも違うな」

ぶつぶつと訂正を繰り返して謝罪とお礼の言葉を考える。

けれど支配者として威厳を保ったまま今回のことをお詫びできる気の利いた台詞は、おれの陳腐な頭ではまるで浮かんでこない。そうしている間にも時間は経過しておれを追い詰めるわけでありまして。

「…あああもういいい！ 威厳とか知らん！ この度は多大なご迷惑をおかけしまして本当にすみませんでした！ あと助けてくれてありがとうございます！」

「なっ、シュヴァイン様…！」

ペストーニヤの治癒魔法を受けて完治しているのだから怪我人もくそもないと思うのだが、安静だと口を酸っぱくして言われたのでベッドのうえで頭を下げる。気持ちは平身低頭だけれども身体の構造的にこれ以上は下がらないので許してほしい。

これ以上頭の位置を低くしたら豚君の背中から背骨が突き抜けちゃう。

「どうか、どうか頭を下げないでください！ 私はシュヴァイン様のお気持ちも考えず

に行動した愚か者なのです！ 責められこそすれ、頭を下げられることなどなに一つしておりません！ いいえ、至高の御方が誰かに頭を下げることなど、ツ…申し訳ありません失言でした」

「あああやつぱり覚えてる！ 忘れて！ そのめんどくさい彼女みたいな発言忘れて！」

「で、ですが…」

「後生だから忘れてえ」

威厳なにそれうまいの。

逃がすものかと言わんばかりにデミウルゴスの両手を両手で捕まえて、ぎゅつと握る。頼むから忘れてくれたまえ。無言で見つめると「か、かしこまりました…」と小さな声で返事をしてデミウルゴスは顔を伏せた。よっしや言質取ったり。

×××

これはいったいどういう状況だろうか。

守護者たちの中で自分だけが呼ばれたことに、デミウルゴスは十分に心当たりがあった。

なにか処罰を——今度こそ自害の類いを命じられると考えていたというのに、デミウルゴスに与えられたのはしばしの沈黙と、謝罪、謝辞の言葉であった。

けれどもデミウルゴスは考えるよりも早く高揚する心臓を無理に鎮めて、頭を下げている主人に撤回する。今回のできごとで自分は至高の御方にお仕えするにはまるで理解の足りていない愚か者だということがわかったからだ。

「別におれじゃなくてもいいんだろ？」

自分が死ぬ直前にシュヴァインから与えられたのは、的の中央を射抜いた言葉だった。

もし、もしも至高の四十一人に優劣をつけるとするならば、デミウルゴスにとってその頂点にいたるのは他でもない自分を創造したウルベルト・アレイン・オードルその御方になる。

叡智は尽きることを知らず、悪魔としての至高を探究し続けたデミウルゴスの絶対的な創造主。

けれどもそんなウルベルトも今ではナザリックを去りどこかへ隠れてしまった至高の四十一人のうちの一人だ。

——至高の御方々はそれを悟っていたのではないだろうか。

ナザリック地下大墳墓のシモベたちは、至高の四十一人を崇拜している。

しかしその崇拜の念はその四十一人全員に対して平等なものであったと言えるだろうか。答えは否だ。だから、至高の存在たちは隠れてしまったのではないか。

自分たちの慢心が、落ち度が、自分たちの存在理由を奪っていたのだとしたら。

デミウルゴスは自ら導き出した解答に絶望し、嘆いて、それでもこの場所に答えてくれる人物がいるはずもなく、静かに語られるシュヴァインの言葉に耳を傾けた。

「まあ今回のことではれたと言うか、自爆したと言いますか、おれが普段偉そうな態度でいるのは演技でありまして」

デミウルゴスは自分の浅慮を心底後悔していた。

自分たちの落ち度を考えればシュヴァインの演技は最もだ。崇拜に優劣をつけるものを、信頼のできる忠臣だと言えるはずがないだろう。崇拜に優劣をつけるも

「日頃との言葉づかいの差とか、ひどいものだったと思うのに、おれを最後まで見捨てずに助けてくれてありがとうございました」

「そんな…」

至高の御方を助けるのは当然ですという言葉を飲み込んでデミウルゴスは他の言葉を探す。

それなのに言葉が見つからず、ただ自分の手を握るシュヴァインの手を見つめるばかりになってしまう。なにか、なにか言わなければ。そんな焦りは思考を空回りさせるば

かりで、ろくな提案を生み出さない。

こんな自分に落胆してシュヴァインが隠れてしまったら。

すでにナザリックを捨てて去ってしまうだけの材料は十分に揃っている。それどころかこれまでの無礼な態度を考えれば、シュヴァインだけでなく、モモンガ——アイズですらシモベたちを見捨てても不思議ではないのだ。

それでもまだこうして二人がナザリックに残り、あまつさえシュヴァインが自分の手を撫でてくれているのは、慈悲とも慈愛とも呼べる彼らの温情に他ならない。

だからこそデミウルゴスはその温情に甘えるわけにはいかなかった。本来ならば崇拜の念に差をつけるという無礼な行為に自ら気づいて、怠惰な思想を戒めなくてはならなかったのだから。

「シュヴァイン様、どうか、どうか私を、私たちをお許しにならないでください……」

「許すも許さないもないだろう。それどころか今回のことはおれに全部責任があるわけだし、デミウルゴスたちを責めるならまず罰を受けるべきなのはおれのほうだ」

「そんな、シュヴァイン様は被害者なのです」

「そう言うならデミウルゴスだって被害者だとも。おれのせいで、一度命を落としたんだ。頼むから自分を卑下するのはやめてくれ」

金色の目がデミウルゴスを真っ直ぐに射抜いて言葉に詰まる。

いまだに内心では納得いかないけれども、支配者たる偉大なお方が「是」と言えば全てが「是」になるのだ。ならばこれ以上デミウルゴスが謝罪の言葉を口にするべきではない。

「おれは今回のことを本当に感謝している。それと同時にとても申し訳ないと思っている。それはアルベドにコキュートス、他の守護者たちにもだ。…ひいてはお前だデミウルゴス、おれのせいでつらい目に合わせて、本当にごめんな」

「…勿体ない、お言葉です…」

とうとう耐えきれなくなったデミウルゴスの目から雫が浮いて、ほろりと落ちた。それは何度も頬を滑り落ちてシユヴァインの手に小さな水溜まりを作る。見かねたシユヴァインがデミウルゴスの両手から片手を離してそつと背中を撫でた。

それがまるでいつかのできごとのようにで悪魔は嗚咽を噛み殺すように唇に歯を立てる。

意識を改めよう。

至高の四十一人は一人として欠けてはならない。

その忠誠心に優劣をつけてはならない。

心を入れ替えて、至高の御方々に絶対を誓うとその働きで証明してみせるから。

「どうか、私たちが御方々に仕えることをお許し下さいますか…?」

「ぜひともよろしくお願いします。そしてこれはほんの感謝の気持ちなんだけれども、これからおれとモモンガさんを、皆で助けていただけませんか？」

そうして手のひらに握らされたのは「リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」

それは至高の方々しか持つことを許されない至宝の一つだ。

恐れ多いと断ろうとしたデミウルゴスがかを言う前にシユヴァインが指輪を握らせた手を両手で塞ぐ。困惑して、頼りなく眉を寄せるデミウルゴスへ指輪を与えた「至高の存在」は緩やかに微笑んでみせた。

なんとずるいお方だろうか。

こんな顔をされてはなにも言えなくなってしまうではないか。

「…無論でございませすシユヴァイン様。私、第七階層守護者デミウルゴスはいかなる難行と言えども全身全霊をもって遂行いたします。造物主たる至高の御方々に恥じない働きを誓います」

悪魔は優雅な姿勢を崩さずに、それでいて非常に心のこもった礼を見せた。

幕間前篇

謹慎処分。

わりと汚い字で紙に書かれたそれを見せられて「いやです」と答えられるはずもない。自宅謹慎とか何年振りだろうか。

「ちなみに自宅の範囲とは」

「ナザリック地下大墳墓第九階層より上層には出ないで下さいね」
厳しいのか緩いのかわからない範囲だ。

今回のことはおれに負い目があるので「脱走」の選択肢も選び難い。

というわけで、およそ一か月間、豚君は自室という名前のナザリック養豚場にて食事と睡眠を繰り返すだけの怠惰な生活を送ることになりそうです。

これで謹慎期間が満了するころには本物の豚として出荷されることもやぶさかではない。

モモンガさんがナーベラルとともに冒険者としてエ・ランテルへと向かうのをわざとらしくハンカチを振って見送り、一人また一人と指示された仕事をこなすために出張していく守護者たちも見送る。とくにマールは森に現れた吸血鬼と戦闘になり奇跡的に

命が助かった重症患者「ポルコ」の幻覚を作るという仕事がある。

おれのせいでめんどうなことになってごめんねえ、と謝罪はしたものの「いいえ、シュヴァイン様はお身体の療養に専念してください！」とうるうるしたおめめで言われてしまった。

ごめん豚君の傷はメイド長の必殺治癒魔法で完治してるの。

謹慎処分という響きが間抜けすぎて支配者として相応しくないだろうと判断したギルド長の配慮なのだが、まさかここまで良心を抉られることになるとは思わなんだ。

さてここで大本命の登場である。

「デミウルゴス、お前にはモモンガさんの指示とは別途で頼みたいことがあるんだが……あー、すまないが少しばかり席を外してくれるか、アルベド」

「畏まりました」

頭を下げて部屋から立ち去ったアルベドが扉を閉めたところで、おれは視線をきゅつとデミウルゴスに向けた。今のおれの顔は、そりやあもうにまにまと歪んだ薄気味悪いものになっていることだろう。

「お願いがあるんですよお！」

「はッ、なんなりとお申し付けください。シュヴァイン様」

この他の守護者との差はなんだろうか。聞いてくれるな。素のゆるゆるの口調でも

デミウルゴスはどん引きせずにおれの話を聞いてくれるんだもの。

すでにばれていることだとは言え華麗な女性と敵めしい侍を相手に馬鹿みたいな態度で会話をする勇気がないとも言う。

「アイテムを！ おれに代わってアイテムの搜索を！ お願いします！」

両手を顔の前に合わせて平に願った。

今回のできごとは大変な騒動ではあったが、その収穫はとんでもないものだった。

そのうまみに味を占めたおれが謹慎処分ごときで自分の収集癖を諦められるはずがないのだ。

「しかし、私ごときではそのような素晴らしいアイテムを見つけれられるかどうか……」

「これはだいたい特殊な例だからしかたないね」

これ、それ、あれ。そう表現されている物品。それは、ただいまおれが身につけている世界級ワールドアイテム「傾城傾国」のことである。わんこの治療でおれのあの大怪我が完治した直後、モモンガさんに頼み込んで戦場跡から拾ってきた装備だ。

…ふともものあたりから生足を露出させるのは成人男性としていたたまれないのでさすがに中華風のズボンはいた。

ちなみに死体を蘇生させればなにか情報を得られるのでは、という期待もあったのだが、戦場跡に残っていたのは傾城傾国一つだけで、ギンメンガガブ真なる無によって現場は死体どころ

か森全体が消し飛んでいたため回収は断念することに。

現在は更地になった森を元に戻す隠蔽作業がシモベたちにより着々と進められているそうだ。

話を戻そう。

「確かにおれが今回手に入れることができたこのアイテムは横に並ぶものがないほど稀少なものだとも。けれどもいいかねデミウルゴス、おれが追い求めているのはそのアイテムそのものの効果や価値ではないのだよ！」

大事なものは人が求めているものなのか！ それとも否か！

「これは市場の動きとよく似ている。大量の金が出回ればその価値が下がるだろう？

おれは、このアインズ・ウール・ゴウンで人の欲する全てを壟断していたんだ」

ギルドに所属したまま上位ランクを保持し続ければ、毎月報酬が貰えた時代を思い出す。報酬を受け取ることはユグドラシルではなくった現状到底無理な話だが、それを抜きにしても特別なアイテムを手にするというのはやはり心が躍るものである。

だからこそそれをおれに「謹慎処分だから一か月間は我慢しなさい」と言うのは、禁煙する気のないヘビースモーカーから煙草を取り上げる、もしくは酒豪に禁酒令を敷くようなものなのだ。

禁断症状出まくりい！

「無理にとは言わないから、仕事のついでで構わないから。…豚君の一生のお願い、聞いてくれないかなあ？」

自分より背の高い男が腰をかかめて上目遣いをするという状況がどれほど見苦しいことか。ここにモモンガさんがいたら第十位階魔法を叩き込まれても文句は言えない。

けれどもおれはすでに学習しているのだ。NPCたちは、それを製作した人物に似通ったところがあるのだ。そしてデミウルゴスの製作者であるウルベルトは、おれがこうしてヘルプを入れるとさんざん罵詈雑言で罵ったあとに必ず助けてくれる人物であった。そこを利用することに多少良心は痛むけれども、アイテムというおれにとつての情熱を天秤にかけたなら背に腹は代えられないのである。

「ね、ね、お願い聞いてくれたらなんでもしちやう」

「っ…：シユヴァイン様、そういうことをあまり軽々とおっしゃいますのは、その…」

「趣味に付き合わせる平等な対価だって。いや、アイテムをくださいって言われたらかなり悩みますけれどもやぶさかではないのよ？ 肉体労働だったらきびきび働く自信もありますし」

ブラック経営の会社に勤めていた夜勤労働者の忍耐力を舐めたらいけませんよお。

けれども力こぶを作って働く意思を見せたおれにデミウルゴスは厳しい顔をして首を振った。

「至高の御方に労働をさせるわけにはいきません。そうでなくとも、我々は至高の御方のお役に立つために造られたのですから、こうしてシュヴァイン様のご命令を下さるだけで私にはこのうえない喜びなのです」

「ええ…無償労働とか…つらすぎ…。もつと欲に忠実に生きてもいいのよ…?」
豚君を見て? このありさまよ?

そうしておれたたちの話はえんえんと平行線を辿ることになる。

最終的に「はい決定! これは上司命令だからね! ちやんと考えてね!」と職場の権力を振り回す事態となったが悪用はしていないし、モモンガさんにもばれてないから平気、平気。

困った顔をするデミウルゴスに支配者○としての口調でいつてらっしやいと告げればもう反論の言葉は出てこないようだ。

やりました。

ご帰還の際にはどうかこの哀れな豚めにアイテムを! お土産を! よろしくお願
いします!

×××

デミウルゴスが出立して数時間が経過していた。

ナザリックの荘厳な景色を眺めて歩くシュヴァインは、なんともないように言葉を吐いた。

「なにも怒っていないとも。おれは今回のことで三人を責めるつもりなぞ微塵もない
さ」

それをコキュートスにもよくよく伝えておいてくれと言う主人の足取りは緩やかで、散歩に出ると言う言葉は本当だったのだとアルベドはそうつと息を吐く。

もしもシュヴァインが他の至高の御方のように隠れてしまうことになれば、理由は言うまでもなくアルベドの過失によるものになる。それはこれまでと違い「自分」が至高の御方を追い詰めたのと同義ということだ。

けれどシュヴァインは「気にしていない」と告げて、気落ちしているアルベドを連れて散歩に出てくれた。なんと寛大な心の持ち主なのだろうか。

アルベドは目尻からにじみ出た水滴を気づかれぬよう拭って慈悲深い主人の後ろに付き従った。

：

アルベドにとってシュヴァインは敬愛すべき主人である。それ以上でもそれ以下でもない。

このナザリツク地下大墳墓に残ってくれた「至高の御方」という点では、自分の創造主であるタブラ・スマラグディナよりも崇拜の念は勝っている。むしろこの地を去った「至高の御方」については彼らは自分たちを捨てたのだという恨みの気持ちさえ持っていた。

けれども先日、デミウルゴスに吐露された予測によってその気持ちに揺らぎが生まれている。

「我々の至高の御方々に対する崇拜の念に優劣があつた」

「それに気づいたからこそ至高の御方々はナザリツクから立ち去ってしまったのではないか」

それを聞いたアルベドを筆頭に、守護者たちは息を飲んだ。

一人、また一人と至高の存在が隠れていたその時期に、自分たちが自らの創造主を頂点に考えていなかったと言えば、それは嘘になるからだ。その当時のアルベドでさえそうだ。あのころは自分の創造主が「至高」の中でもさらに崇高なものだと信じて疑っていないかつた。

ナザリツクのものたちはその気持ちを入れ替えて、これからは至高の四十一人に対して平等な忠誠心を持つべきだとデミウルゴスは言った。とても素晴らしい心構えだ。ナザリツクのシモベとして見るならば。

けれどもアルベドの心の霧はいまだに晴れない。

デミウルゴスが皆に語ってみせた話は、言うならば我々から見ても前提は同じなのだ。

至高の存在に自分たちと同じ視点を求めるのもおかしな話だが、それでもアルベドは考える。偏った忠誠心に気づいて至高の御方々が立ち去ったならば、これ以上「自分たちは捨てられた」などという泣き言は言うまい。

しかしその偏りを理解したうえでナザリックへ残ってくれた至高の御方がいるのも、また事実なのだ。ならば与えられた恋慕も、寛大な慈悲も、それを与えてくれた二人だけのために捧げたいとアルベドは思う。それが守護者統括としてどれほど歪んだ気持ちだとしても。

得てして「偏り」とは生まれるものだ。

それをアルベドに教えたのは他でもない至高の御方々だ。

今日まで与えられてきた恋慕を、慈悲を、そして温情に報いるためならば、どんな手でも使ってみせるとも。

幕間中篇

「Not in Education, Employment or Training」省略してニートという言葉がある。

その意味は「教育を受けておらず、雇用されておらず、職業訓練も受けていない者」を指す。

さておれの現状を見てみよう。

教育は受けていない。義務教育はそれなりに前に修了させた。

就業状況については果たして今の状況を働いていると言えるのだろうか。いや言えない、反語。

職業訓練は上記に同じなので以下省略である。

おっとお、これは…

「まぐろことなきニートなのでは？」

その事実気がついたのは、すでに謹慎期間の二分の一ほどを消化したあとであった。

シャルティアの持ってきてくれた茶菓子うめえとか言ってる場合ではないようだ。

ちなみにおれが療養期間という名前の謹慎処分に入入したときから、シャルティアは半日置きに茶菓子配達してきてくれるようになった。

それと言うのも、謹慎処分の原因であるあの騒動のことをシャルティアはずいぶんと気にしているらしい。精神支配を受けたうえで死亡したためか、数十時間の記憶をすっぱりなくしているそうだが、デミウルゴスからこの成りゆきを聞いたというシャルティアの落ち込みようはそれはそれはひどいものであった。

状況的に過失割合は同罪どころかおれのほうに天秤は傾くのではと思うのだが、彼女には「至高の御方を敵対者から守れなかつた挙げ句に手を上げた」という事実が荷重となっているようだ。

シャルティアには騒動の翌日に土下座の勢いで謝罪されたのだけれど、おれは自分を棚に上げてふんぞり返るつもりなど微塵もない。

けれども「そんなん気にせんでええのよお、おばちゃんも悪いんやからあ」と軽い感じでごまかそうとしたら昼間から謝罪切腹ショーを開催されそうになったので、それを防ぐためにも提案した折衷案で現在に至る。

「要約：一か月間、豚君の暇つぶしに付き合つてよね！」作戦は見事成功を収め、今のところ、ナザリック地下大墳墓で自傷他傷による事件は発生していない。

この茶菓子を持つてくるという行為もシャルティアの考えた「おれを楽しませる」仕

事の一環なのだろう。大成功しておりますとも。入れてくれた紅茶との相性が抜群すぎて、このまま豚になってしまいうのも問題ないのではとすら思えてきた。

これでシャルティアが元気になったのかと言えば微妙なところだが、正直なところ豚君からこれより有効的な提案をしばらく出すのは不可能だ。助けてモモえもん豚太君のおつむが回らないよお。

さて話を戻そう。

あんな小さな女の子でさえ真面目に仕事をしているのにおれときたら…。そう思うとニートという肩書きが恥ずかしく思えてくるものだ。すでに手遅れ感が尋常ではないけれども。

「…私たちの手伝い…でございませうか…」

アルベドが呆然とおれを見る。

お前さんざん遊び呆けていまさらなに言っつてやがるとかそういう類いですね、すみませんでした。

もつともらしく「部下に負担ばかりかけるのはよくないと思っつてな」とかなんとか理由をつけたところで、本当に思っつていたらあと十日は早く動いていたはずなんだなあ。

腹の底から本音を吐き出せば「豚君ちよー暇なの」というくそみたいな言葉しか出てこないのどうしようもない。

ねえねえなにかない？　ねえねえ？　と期待を込めてアルベドを見ていたらぼろつと大粒の涙を流し始めたので普通に焦った。ごめん母ちゃんおれこれから真面目に働くから泣かないで。

膝から崩れ落ちるほどにおれのニートぶりはやばかったのかと反省したが、アルベドが泣いた理由はどうやらそういうあれではないらしい。

「なんと、なんと…慈悲深い…、私たちのことまで気にかけて下さるなんて…恐悦至極にございます。そのお気持ちだけで報われます。…です、どうかシユヴァイン様は御身体のことを一番に考えてご療養ください」

「アッハイ」

ささ、どうぞご寝所へ、と布団のところへ案内されそうになったけれども待つて待つておれ数分前にお昼ご飯食べたばかりなんです。

…

『仕事ですか』

「なにかお手伝いしますうで第九階層を歩き回つたら泣かれるだけで二時間が過ぎました。このままでは豚君がいじめっ子と噂されるのも時間の問題なのです」

『実際いじめっ子じゃあないですか。だいぶ前に掲示板で「豚野郎被害者の会」でスレ立てされていたの見たことありますよ』

「誠に遺憾である。そんなことを言う子のアイテムは奪っちゃおうねえ」

『いじめっ子じゃないですかやだー』

〈伝言〉にてモモンガさんと会話中である。

内容は言わずもがな「ぐう暇」「なにか仕事くれ」というものであるが「アルベドに貰ったらどうですか」と役に立たないような返事しか戻ってこない。最初に玉砕しましたけどなにか。

「暇すぎて蛇の三つ編みが七本目に突入するんですけれども」

『なにしてるんですか』

「こいつらおれの髪なのにわしづかみしたらものすごい抵抗するんですよ。あと強く引いたら何匹か抜けて逃げていきました」

『なにしてるんですか』

「すぐ新しい蛇が生えてきたんですけど抜けたのはそのまま元気いっぱい動き回ってるので、全部モモンガさんの部屋に放り込んでおきますね」

『やめてくださいいしんです！』

毒蛇らしいけどモモンガさんは毒無効があるから平気ですよ、と適当に慰める。

そろそろ暇すぎて豚君が本物の豚になっちゃいますよ？ 泥で入浴とかやらかしま

すよ？ と脅しをかけたなら「どうぞどうぞ」と返事をされたのでこの死の支配者こそ本

物のいじめっ子だと思われます。いじめよくない。

負い目があるので「謹慎処分免除してよお！」とも言えず、豚君は暇すぎて暇すぎて茶菓子を食べるしか選択肢がない。うわ…うま…。

モモンガさんがふむうと悩んだ声を漏らしているのを脳内電波で聞きつつ、どうせなにも案が出ないんでしょ、そうなんですよとささくれていたら「シュヴァインさん、冒険者組合から回ってきた依頼を俺とやる気はありますか」思ってもみない声がかかった。

「おれモモンガさんに一生ついてく」

『なんとという現金な豚』

「ぶう。…いやでも謹慎処分の件はいいんですか?」

『シュヴァインさんにかかった世界級アイテムの効果が本当に打ち消されたかどうかを見るための期間だったようなものですから。なんの異常もないなら、ギルドの仲間の自由を拘束する権限なんてわたしにはありませんよ。まあ冒険者として復帰するならもう少し時間を置いたほうがいいと思いますけど』

「やだこのがいこつちよういけめん…」

『冒険者組合の情報いわくとても貴重な薬草を取りに行つてほしいとのことです。報酬はおそらく金貨で支払われるでしょうが…シュヴァインさんは金貨がいいですか?』

「ええ？ その説明をしておいて本気で言ってますか？」

『確認ですよ。この世界じゃ俺たちとの「貴重」の根幹がだいぶ違ってはいるんですから。…そうですね、シユヴァインさんにはその薬草半分をお渡ししましょう』

「はあんモモンガさん…しゆきい…」

『酔ってるなら仕事は諦めて早く寝るべきですよ』

「昼間から酒におぼれるほど人間性捨ててないですけど」

×××

モモンガさんのお手伝いだから！ ギルド長の許可が出たんだからしかたないね！

アルベドの「どうかご自愛下さいね」という言葉に「うんわかつたあ！」と返事をし
てナザリツクから出てきたのはいいけれど、有頂天になりすぎて演技するのを忘れてき
た気がする。

先日の騒動でアルベドにはおれの素の口調がばれているとは言え、いい歳した野郎が
元氣よく「うんわかつた」とか。

「ふええ…いたたまれないよお…」

「いたたまれないのはいつものことでしょう。と言うかここでも気を緩めないでくださ

いね、もうすぐここにアウラが来るので。あとそいつも新しい部下です」

「もふこ」

「と、殿…お助けください…」

待ち合わせ場所に来ればそこにはすでにモモンガさんと、…巨大なハムスターが待つていた。

こんなのもふもふするしかないじゃない。支配者の演技とかなにそれうまいの。

先日の騒動でアルベド、コキユートス、デミウルゴスの三者におれの素の性格がばれましたとモモンガさんに白状したとき「口調がばれちゃったならしかたないね、でもできるだけ身を引き締めていこうね」という方向性が決まっていたのだが正直そろそろ自信がない。

デミウルゴスにいたってはもう隠す気もないしね。彼の面倒見がいいからしかたないね。

おれを見た瞬間に震え上がったハムスターには申し訳ないが、まんまるい背中へばりついて毛皮の感触を楽しませてもらう。見た目よりも硬質だが許容範囲の触り心地だ。

「なんと言うか、こう…かつてないときめきを感じる…」

「シユヴァインさんて小動物は好きでしたっけ？」

「小さい動物とはなんだったのか。いや動物の好き嫌いについては一般的だと思いますけど、なんて説明するべきでしょうね、子供のころの願望が達成されそうだなという類いの高揚感が」

「子供のころの願望？」

「ホールケーキを一人で丸ごと平らげるのって一度は考えませんでした？」

「えっ」

バケツプリンでも可。標準のものよりも何倍もかい食べものって浪漫があるよね。

毛皮の下についた肉のことを考えてうっとりしながら背中を撫でると、ハムスターはとうとう耐え切れなくなったのか悲鳴を上げて暴れ始めた。

おれを振り落とすようにごろんごろんと転がる動作も混ざったところで、下敷きにされては堪らないとモモンガさんの真横に飛び降りる。

その動きで小規模とは言え周辺に地震が起きているのだから、やはりこいつはおれの知っている小動物とはだいぶ違うようだ。いやそもそもキングサイズのベッドよりもでかい生き物を小動物とは認めない。

「急に暴れるなよ危ないだろうが。…ええっと、名前はウマソーでしたっけ？」

「ハムスケです」

「安直じゃありませんか？ ヒジヨウシヨクとかのほうが似合ってますね？」

「シユヴアインさん、あなたついに齧歯類の生き物を食料と見なしたんですか……？」
すつ、とモモンガさんから視線を逸らした。なにも聞かないでくれたまえ。

そうして「食べないよお、お利口にしてたら食べないよお、たぶんね」と言ってもう一度ハムスケの背中によじ登りふるもつふにしていると、森のほうからアウラがモモンガさんを呼ぶ声が聞こえてきた。やばばば起きねば。

「アインズ様あ！ お呼びに従いまいましたあー！」

元気なのはいいことである。それが例え豚君の寛ぎ時間終了のお知らせであつても。毛のうえを滑るようにハムスケの背中から降りると「シユヴアイン様!？」と驚く声も聞こえてきた。はあい、齧歯類はおやつに見えるほう、豚君ですう。

「シユヴアインさんは乗りませんか？」

「いい歳こいてハムスターに乗るのは恥ずかしいので遠慮しておきます」

「……いつの間に精神攻撃を会得したんですか？」

「謹慎期間中に新規実装されたニートという職業を獲得しまして。そのスキルの一つです」

「ちなみに取得条件は？」

「数十日間なにもしないで過ごすことですかね」

「まごうことなきニートですね」

「…うつ、うつ…」

…

「デミウルゴスを呼び戻していたのか」

「ん？ ああ、シユヴァインさんとすれ違いになるかたちでナザリックに到着したと、アルベドから報告も入っているが、なにか不都合でもあったか？」

「特別な問題はないとも」

ハムスケと並走しながら今後について話し合う。無論口調は支配者（ ）である。

この状況にいたるまでに「シユヴァイン様が走られるのにあたしが騎獣に乗るなんて！」と遠慮されたり「どうぞあたしではなくシユヴァイン様がお乗りください！」と勧められたりいろいろあったけれども、豚君はハムスターには乗りたくないし、そもそも野郎二人でハムスターに二尻するとか絵面がひどすぎる。

「死ぬほど嫌です」という気持ちを込めて「おれは構わないとも。ぜひアウラが乗るといい」と告げ、モモンガさんが御伽話に登場する王子様もかくやとアウラに手を差し伸べたことで事態は收拾された。

そうしてモモンガさんとハムスターで二尻をする権利は見事アウラへ押しつけられたのだった。

モモンガさんとアウラが交わっていた会話の中で気になった点はいくつかあるけれ

ども、なにより気を引いたのはデミウルゴスの帰還についてだ。

いやあデミウルゴス帰ってたのかあ。まさかこんな短期間で謹慎処分から解放されるとは思っていなかったからな、アイテム搜索の件は悪いことしちゃったな。

いやでもデミウルゴスの出張先のアイテムも気になるし、二手に分かれて搜索したほうが発見する確率は増すのだから搜索は継続する方向で進めてもらえばいいだろう。

「それにしてもデミウルゴスは一度労ってやらなければならぬな。モモンガさんに指示された仕事といい、おれの件といい、今回といい、こちらの都合で東奔西走させてしまっている」

「ああ全くだ。ふむ、どうだアウラ。守護者を労ってやるならばどんなものかいいだろうか」

「ええっ！ あたしですか!?!」

二人で話していたところへ話題を放り投げられて驚いたのか、アウラが手をわたわたと動かしている。

その慌てぶりはなんだか見えて可哀想になるけれども、おれたち支配者（）ではなかなか守護者が喜ぶものを想像できないので同じ守護者であるアウラが頼みの綱だったりする。

さあがんばれちようがんばれよろしくおねがいます！

期待を込めてアウラを見つめっていると、アウラはおれとモモンガさんをちらちらと見てから「あたしは：至高の御方に、あ、頭を撫でていただけると、すごく：嬉しいですよ」という解答が返ってきた。もう好きなだけ撫でてやるよ。

おれと同じ気持ちになったらしいモモンガさんがアウラの頭を撫でている。

照れ照れとして喜びを隠しきれないアウラにおれも微笑ましい気持ちになるが、だがしかし考えてほしい。その標的がデミウルゴスになることを。ふええ：目も当てられないよお…。

×××

キング・クリムゾン！ 時間は消し去って飛び越えるもの。

あれからおれたちの行動として特筆すべき点はない。

過程を簡単に説明するなら「夕方までに目的地へ到着したい」と言ったアインズ様（）のためにアウラがハムスケに能力上昇系のスキルを使用したものの、さすがに無理があつたのか体力が尽きて途中挫折した。

モモンガさんが「ここを野営地とする！」的なことを宣言したところでふと盗賊スキルが発動したような気がしたので「豚君ちよつとお花摘んでくるねえ」と告げて、おれ

は少しばかり離れた森へとやってきたのだ。以上説明終わり。

そうして相変わらず腹の底から湧いてくる根拠もない自信に従って森の中をさくさくと進んでいると「ちよ、ちよとそこの君、そっちのほうは危ないよ！」と声がかかった。

危険感知に引つかからなかったのだから敵意はないのだろうけれども、こんな至近距離まで発見できなかった相手に対して警戒がにじむ。

「…誰だ」

「お、怒らないでよつ、親切のつもりで言ってるんだからー」

頼りなさげな声を合図にして、めりめりというか、むによーんというか、木が成長する映像を早送りで見せらるるように木の幹から一匹の生き物が生えてきた。

すぐさまスキルで強さを確認すれば、おれよりずいぶんと弱い相手のようだ。

それなのにおれが見つけることができなかつたのは木の中に隠れていたからであるらしい。

拍子抜けして息を吐く。

ドレイアード

そうしておれの前に現れた森精霊は「この先には君よりもおつかない、とんでもない怪物がいるんだよ！」とのたまう。豚君よりもおつかないとしてもない怪物ね、へえほおふうん？

「興味があるな」

「いやいや違うでしょ！　そこはなんだってー！　って驚くところだよ！」

「なんだってえー」

「棒読み！」

だつてこう言つちやあなんだけど豚君はレベルカンストしたガチ勢ですよ？

それより恐ろしい相手となるとそれはもうレイドボスの類いだろう。

前日の一件から「これは現実なんだからゲームって認識したらだめえ！」と自分に言い聞かせてはいるが、おれより強いがレアアイテムをドロップするという等号で構築されておれのおれの頭は、強い相手と聞いてうきうきそわそわするのを我慢できない。

どうする？　世界級アイテムとかドロップしたらどうしちゃう？　みなぎってきた。

そこるところちよつと詳しく、と森精霊ドライアードに話を聞こうとしたところで背後から声をかけられる。

「シュヴァインさん、そちらは？」

「モモンガさん、彼女は貴重な情報源だ」

「えっ」

幕間後篇

前回の展開からして「これは間違いなく豚君が活躍する場面が来る」と思うでしょう。だがしかしそんなことはなかったた。だ。

ただいまのおれがやっていることと言えば、周囲近辺の監視役だ。夜間警備員のバイト時代を思い出すような暇さである。豚君退屈でとろけちやうらめえ。なぜおれが警備員のような仕事をしているのかと言えばそこには深い理由があるのだ。

：

昔、昔。それは、そう語った森精霊ドライアードすら生まれていない大昔のできごとだそうで。

つまり話を要約すると「大昔に封じられていたなんかやばい木の怪物がもうすぐ復活する」ということらしい。その怪物についての説明で「ときどき一部が目覚めて暴れるんだ」と森精霊ドライアードが語った時点ですでに封印するもくそもない状態ではないのかと思っただけれど、それを口には出さまい。

そうして森精霊ドライアードはかつて「約束」したという、魔樹の一部を撃退することのできた七人組が帰還したのではないかと思ひ、森へとやってきた集団との接触を試みたそうだ。結果がおれたちとの遭遇である。まあそんな森精霊ドライアードの期待もむなしくその実際は戦士

と闇妖精エルフと石化メドゥーサの蛇と巨大ハムスターの集まりであつたわけだが。

「シユヴァインさん、ここは一つ提案なんだが」

「ん？」

森精霊ドレイアーの話聞いたモモンガさんは、対プレイヤーの戦いになつた場合を考えて怪物—

—魔樹「ザイトルクワエ」を守護者たちの練習台にしてみてもどうだろうかと言ひ出した。

やめて！ 謹慎処分から解放されてモモンガさんのお仕事を手伝うことになつたのに、予定変更で守護者たちのチームとしての戦闘能力を高める練習台にするなんて、そんなふうになつて落とされたら豚君の精神まで燃え尽きちゃう！

お願いそんなこと言わないでモモンガさん！ おれが今ここで倒れたら、さらにめんどうくさいことになつちゃうのよ？ 成人男性が駄々をこねる光景ほど見苦しいものはないんだから！

次回「豚君死す」デュエルスタンバイ！

「心配しなくても報酬は約束した通り引き渡すつもりだ」
「それなら全然大丈夫ですよ」

：

説明以上、冒頭に戻る。

予測範囲内のできごとだが、魔樹「ザイトルクワエ」は復活した。現在進行形で守護

者たちがその討伐に当たっている。守護者たちの戦闘中、敵対するかもしれない第三者の存在を発見し監視するべくモモンガさんが魔法での警戒を、おれがスキルでの警戒を行うものと話し合って計画した。

そうしてそれは順調に進んでいる。確かに順調に進んでいるのだけでも。

「おれの場合敵意があるやつが接近しなかったら反応しないんだよなあ……」

「どうしたでござるかお館様」

「いやなんでもないと、ウマソー」

「ハムスケでござる」

腹這いに伏せたハムスケの横腹を背もたれにして、おれはぼんやりと守護者たちの戦闘を眺めながらあくびを噛み殺した。

豚君こう見えてちゃんとお仕事してますう。外部からの敵意がないからスキルが発動しなだけなんです。そんな誰に対してなのかもわからない言い訳を胸中でこぼしながら、おれは魔樹ザイトルクワエの登頂部に思いを馳せた。

そこには目的の「薬草」があり今すぐにも飛び出していきたい衝動が湧きあがってくる。

目の前で餌をちらつかされるといふのは本当につらいものだ。

守護者たちの邪魔はしないのであれだけむしりに行ったらだめですか？　だめです

か。

まあ謹慎処分が解除されたのだから明日からは、いや今日の夜からだつていい。おれはこれから外で動き回ることができなのだ。自由つて素晴らしい。

冒険者としての仕事も、重症患者「ポルコ」が治癒する期間を考えればまだ復帰するには早い。

つまりそれまでの時間はおれにとつて長期の有給休暇のようなものである。有給。なんと甘美な言葉なのだろうか。

あの連続夜勤の職場では都市伝説とまで言われた休暇制度だ。

「謹慎処分」という軟禁状態と自由に過ごせる「休日」は似ているようで非なるもの、その本質は天地ほども差があるのです。外出時には供を連れて行くよう言われるだろうけれどもこの数日間の缶詰め状態と比較すればそんなことは容易いとも。

そうして「これからどうしようかなあ」とかなんとか考えながら意識を霧散させていたら、魔樹の触手がこちら目がけて降ってきた。あらまあ。

それを見た森精霊ことナザリック地下大墳墓の新しい従業員ことピニスンが、この世の終わりが訪れたかのような悲鳴をあげる。魔樹と守護者たちのレベル差を考えればこの状況はなんの問題もないと思うのだけれども、ここはあえておれも便乗しておこうか。はあんたしゆけてえ。

暇を持ってあまりすぎて馬鹿なことばかりを考えていけば、魔樹の触手はおれたちにまるで届かない距離でコキュートスに斬り飛ばされてしまった。ですよねえ。

こちらのほうに被害がないかを振り返って確認してくる守護者たちに緩慢な動作で手を振って返答すれば、全員が「ほっ」と息をついたような顔をする。そしてほぼ同じ速度で魔樹のほうへ顔を向けた。

ここからでは守護者たちの表情を見ることはできないのだが、殺気がすごい。真正面から睨まれている魔樹は堪ったものではないだろう。

「攻撃のダメージが効いてきたのかな、魔樹が二、三步下がったよ！」
「んー…、お前がそう思うならそうなんだろう」

お前の中ではな。

×××

ててててててーててーん！ 守護者たちは 魔樹を やっつけた！

魔樹がおれたちのほうに暴力行為（未遂）を取ったあと、守護者たちはそこから魔樹の行動を一つとして許しはしなかった。

魔法による拘束と弱体化の連鎖に、畳みかけるような追撃とスキルの雨に、測量でき

ないとされたはずの体力は体勢を整える暇さえ与えずに削り取られていったのだ。うわしゅごしやつよい。

あれ最後のほうはたぶんオーバーキルしてた。

彼らとおれにはレベル差がないことを考えればこのチームワークの手にかかった場合、装備を揃えていても生き残るのは厳しいであろう。

自分には忠誠を誓ってくれているのだと頭では理解していても、触手を引きちぎり魔樹の濃緑色の体液を頭から浴びる様子を目撃してしまっただけだ。

「あいつらはぜったいにおこらせないようにしよう」……そう囁くのを、わたしのゴーストが。

「……チーム戦は問題なさそうですね」

「……そうですね」

おれもモモンガさんも目の前で繰り広げられた光景にどん引きしている。

それほどまでにえげつない戦術で、磨き抜かれたそれぞれの動きで、隙のない団体戦によって、魔樹は息絶えた。

ピニスは元よりハムスケも恐怖で白目を剥いて気絶している。気持ちはわかる。

せめてものの心の防壁にとおれが頼りないハムスターの肉団子にしがみついていたら、

心的外傷を作るには十分すぎる働きをした人物の一柱であるアルベドがこちらのほうへ駆け寄ってきた。

ドレスの裾がはためいているというのに上品さを損なわない動きは平常であれば見惚れただろうけれども、あれが本来は濃緑色ではなく純白の衣服だと知っている立場からするともはや恐怖の対象でしかない。ぼくわるいぶたくんじやないよお…。

「シユヴァイン様、お怪我はありませんか！」

「も、問題ないとも。少しばかり驚いたが心配をするようなものではない」

「…此度の失態は全て私の責任でございませぬ、どのようにも罰をお与えください」

「まさか。アルベドに罰などを与えたらおれがモモンガさんに怒られてしまうだろう…
なあ？」

「あ、ああ、シユヴァインさんの言う通りだとも。今回は我々の警護ではなくチームとしての能力を見るための戦闘だったのだ、むしろ周囲に気を配りつつ戦闘を行えた守護者たちを褒めてやらねば。お前が気に病むことはなに一つないぞアルベド」

「ありがとうございます、慈悲深き至高の御方々に感謝いたします！」

実際の心境的には「まさか」なんて偉そうな言葉ではなく「滅相もございませぬ」という言葉が入るのは言うまでもない。総戦力がおれとモモンガさんよりうえの守護者たちに罰を与えるなんて恐れ多いです。

豚肉加工食品にされる前におれはこれからの態度を改めたほうがいいだろうか、と悩み始めたところで、けれどもその意識はどこかへ飛んでいくことになる。

後方から枯草を踏む音が聞こえてきたということは、守護者たちが近づいてきたという事。そして守護者たちが近づいてきたという事は。

「アインズ様、シュヴァイン様、どうぞお納めください」

薬草きたー！ おれは薬師の職業なんぞ獲得してないので、道具としての使い道はそのまま生で食べるくらい選択肢しかないのだけれど、アイテムは手元にあることが重要なですよお！

そうして待ちかねていた薬草がデミウルゴスからおれへと手渡された。

「はあんありがとうございますう」と言いたいけれどもデミウルゴス以外の守護者もいる手前、自重という言葉を大切にして行動しなければいけない。

薬草の見てくれは正直に言えばただの青臭い苔なのだがこれに「貴重な」という形容詞がつくだけでおれのなかの愛情メーターが振り切れる。すごく幸せ。これが自力で獲得したものならば達成感もひとしおだろうが、そこまでの贅沢は言うまい。

だから、それを潰さないように両腕で抱えて頬ずりしながら口にしたのは嘘偽りのない感謝だ。

「お前たち、ありがとう」

たとえその言葉で感極まったらしい守護者たちが咽び泣いたとしてもおれに罪はないです、本当です、豚君なにも悪くありません！

激録！ 至高の御方、密着二十四時！（午前篇）

時刻：午前八時五十八分。

ナザリツク地下大墳墓第九階層、至高の四十一人が過ごすそれぞれの部屋の一室。

とあるメイドの人造人間^{ホームンクルス}——リユミエールは主寝室の扉の前で、壁にかかった時計を確認してはドアノブを見つめるといふ動きを繰り返していた。

リユミエールは手のひらが汗でじつとりとにじむのを感じながら「大丈夫よ、落ち着きなさい、これはとても重大な使命なんだから」と自分に強く言い聞かせている。

そうして彼女がまるで神に助けを求める宗教信者のような表情をして両手を組んだとき、不意をついて主寝室のほうから「どすん」とも「どさり」ともつかないなにかが落ちる音が聞こえた。驚きに肩が跳ねて意識を引き戻される。慌てて時計を確認すれば時刻はちょうど九時を指し示したところだった。

リユミエールが注意深く耳を傾ければ、分厚い扉の向こうから「シユヴァインお兄ちゃん、時間だよ」と繰り返して告げる少女の声が聞こえてくる。少し待機してみたけれども、それ以上の変化が訪れる様子はまるでない。——ならばやらなくてはならない。

一つ呼吸を置いて自分を落ち着かせるとリユミエールは控え目に主寝室の扉を叩い

た。部屋の中から返事はなく、少女の声が無機質に響いているだけだ。これが平常であれば静かに撤退し至高の御方が起床するまで待機するのだけれど今日はそうもいかないう重大な事情がある。

そうしてリュミエールは戦場に向かう兵士のような顔をする、できるだけ音を立てないようにしながら目の前の扉をそうつと押し開けた。

薄暗い部屋の中央には天蓋の降ろされたベッドだけが鎮座しているはずだったのだが、その側らには弾き出されたように枕が一つこぼれ落ちて見えた。そして「先程の物音はこれだったのか」と納得すると一礼をして部屋の中へと入り、リュミエールは部屋中の照明器具に「永続光」の明かりを灯して回った。

その間にも天蓋の向こう側からは「時間だよ」と少女の声が聞こえてくる。

普通感覚を持つ：例えば人間であるなら、どれほど愛らしい声であってもここまで同じ言葉を繰り返されればわずらわしく思うだろう。しかしリュミエールはそうは思わない。それは自らを創り出した支配者たちのうちの一人の声を取り込んだ素晴らしいアイテムによる音声だと知っているからだ。

高貴な声をこれほど聞くことができ感動こそすれ、わずらわしく思う愚者はこのナザリツク地下大墳墓には存在しない。

そうして最後の照明が灯ったところで、リュミエールは改めて遮蔽されたベッドと向

き合う。

こぼれ落ちた枕を拾って邪魔にならない位置に避けてから、彼女は意を決して降ろさ
れている天蓋に手をかけた。

淀みない動きで開かれたベッドのちょうど頭が来る部分には布団の塊が鎮座してい
た。本来身体が横たわっているべき場所にはバンドが転がっていて、そこから繰り返し
「お兄ちゃん時間だよ」という音声が続り返されている。そしてそのバンドを手に取る
うとしてそのまま力尽きたような位置で、布団の塊から伸びてきた腕が転がっていた。

「シユ、シユヴァイン様、お目覚めの時間でございます」

のどから出た声がどもってしまったのは悲惨な寝相に呆れたのではなく、これから自
分が至高の存在の眠りを妨げることに緊張しているからだ。

これがどれほど無礼な行為なのかは重々に承知していても、これを望んだのは他でも
ない目の前の人物——シユヴァインなのだから、リュミエールはその責務を果たさなく
てはならない。

「至高の御方」という絶対的な存在から命令を受けている以上は、それがたとえ爆弾を抱
えて敵地に向かうような内容であっても決行するべきだとリュミエールは考える。そ
れが創造されたものの存在理由だからだ。ナザリック地下大墳墓のものならば誰もが
この考えに肯定を示すと確信している。

事実これが本当に「爆弾を抱えて敵地に向かう仕事」だったならばリュミエールは嬉々としてそれを行える。自分の命が至高の御方の役に立てるのだから、それ以上の名誉はないだろう。

けれども彼女に与えられたのは「至高の御方の安眠を阻害する仕事」であった。それは彼女にとって、そしてナザリックに仕えるものにとって、自ら崇拜している存在に無礼を働くことと同義のものだ。緊張しても仕方のない仕事だった。

けれどもそれを他でもない本人が希望したのだから、リュミエールの罪悪感や緊張などはごみに等しいものになり下がる。だからこそ彼女は決死の覚悟でシュヴァインが眠っている主寝室へ踏み込んだのだ。

「…あと五分」

至高の御方がおっしゃるのならば。

×××

結局のところ、シュヴァインが寝返りを打ってベッドから落下したことで、引き延ばされた彼の睡眠時間は三、四分程度であった。

布団ごと床に転がり落ちて、その場でそのままもう一度巣作りを始めようとしたシュ

ヴァインに対し「至高の御方を地べたで寝かせるわけにはいかない」とリユミエールが声をかけたことが意識の覚醒に繋がった。

ぼさぼさの髪と言うべきなのか、絡まった蛇たちを無造作に解きながらシュヴァインが自室のダイニングルームまで歩いていけばそこにはすでに朝食の準備が整っていた。机のうえには銀食器のナイフやフォークが並び、あとはシュヴァインが座り次第食事を持ち込めばいい状態だ。

「朝食はいかがなさいますか？」

「…あとでもらう…」

「畏まりました」

シュヴァインが告げれば、控えていた男性使用人たちが静かに食器を片づけ始める。出しっぱなしでは埃がかかるかもしれない。そんな食器を、至高の存在に使っていただくわけにはいかないとその男性使用人は判断したのである。

リユミエールはまだ眠気から覚醒しきっていないらしい足取りで歩き始めた主人の後ろに付き従った。数メートル歩いては壁に寄りかかり、目を閉じて微睡む様子をよく観察する。主人が大怪我を負った事件からまだ一か月ほどしか経過していないのだから、なにかあればすぐに対応しなくてはならない。

「んー…」

「水桶をお持ちいたしますか?」

「だいじょうぶですう」

そう言った途端に腰を柵にぶつけたので、とても大丈夫そうには見えなかった。口が裂けても言わないが。

つまるところシユヴァインという人物は寝起きにめっぽう弱かった。

異形種が低血圧になるのかは本人にすらわかるはずもないけれど、シユヴァインの「中の人」とも言うべき人間であった男は、夜勤による夜型の生活習慣と生来の低血圧とで、寝起きの覚醒状態はとても良好とは言えない人生を送っていた。

それに引っぱられてしまったのか、異形の身体を手にしてもなお低血圧のような肉体の反応は健在のままだった。

敵意などを感知すればさすがのシユヴァインも対応するべく頭を無理矢理にでも覚醒させただろうが、残念ながらここは「ナザリック地下大墳墓第九階層」である。彼とその友人を絶対的支配者だと認識し忠誠を誓っている部下たちだけが往来する場所だ。

冒険者として活動していたときには警戒心もあり幾分かましな生活を送っていたのだが、それも療養のためと銘打った謹慎処分を送っている間にすっかりなりを潜めてしまった。

それを鍛え直そうにも、ナザリック内部では自分に対する敵意を感知しろと言うほう

が難しい。これが寝起きのシュヴァインの緩みきった状況に拍車をかけていた。ひどいときには間延びした口癖も出る。

そうしてそれをシュヴァインが自覚しているはずもなかった。

身体を壁にもたれさせてずるずると動く姿は支配者としての威厳など露ほどもない。

この光景を録画して見せれば本人もモモンガも内心で顔を青くすることは言うまでもないが、今日にいたるまでその無様な姿が露見していないのは、ひとえにメイドたちがこのシュヴァインの姿を受け入れているからである。

「さ、シュヴァイン様、洗面台はあちらです」

「んー……」

日頃の威厳あふれる姿もさることながら、この様子はメイドたちの庇護欲をひどく刺激した。

不敬な考えであるとは理解しつつも至高の御方の素面の姿を見て歓喜しないものはこのナザリツクにはいないのだ。

ただでさえ一般メイドというのは守護者たちや戦闘メイドたちと比較して、モモンガ——アインズ並びにシュヴァインという支配者たちとの接点が少ないものだ。

それでも至高の存在に創造された身として、己の神である至高の存在のために働くことこそが最大の喜びであり存在意義である。その働きぶりは狂信者と呼べるほどで、ほ

とんどのメイドが睡眠すら取らず二十四時間を休憩なしで動き続けるほどだ。

けれどもその働きはやがて「至高の存在」によって待ったをかけられることになる。休憩を取ることを余儀なくされたのだ。

ブラック企業に勤めていたアインズの心の内を理解できるはずもなく、メイドたちは直談判して休日の返上を願い出たものの、聞き入れられることはなかった。

けれどもあまりの落ち込みようにアインズが代替案として示した仕事の内容は、メイドたちにとつて砂糖に蜜を垂らすよりも甘いものであった。

それは「メイドたちは一人一人順番に、アインズもしくはシユヴァインの側近くに侍つて一切を手伝う仕事を与える」というもの。メイドたちは即座に飛びついた。

そういう経緯があつて「シユヴァイン様当番」になったメイドたちがまず知ったのは、シユヴァインの寝起きの姿である。

最初に目撃したメイドはまさか体調が悪いのではと心底心配したらしいが、二度寝の体勢に入ったその顔を見て心臓を打ち抜かれたと言った。

それはそうだろう。

普段は厳めしい高潔な人物が無防備に眠る姿を見て、舌の回らない寝起きのとろとろした言葉遣いを聞いて、ときめかないのは至高の御方に手ずから「不感症である」として創造されたものくらいだ。

そしてなによりメイドたちの結束を絶対のものとしていたのが、シュヴァインのこの姿が見れるのは寝起きのみであるということ。つまり起床したシュヴァインを迎える人物——つまりメイドやほんの一部の使用人だけということだ。

メイドたちは守護者たちのようにいくつもの要件で支配者たちの役に立つことができなない。それだけで支配者たちの側面を見ることができる機会が減っているのだ。

その環境へ「寝起きのシュヴァイン」が投下されたことで「わたしたちのしゅばいんさま」という図式は、瞬く間に成立した。

本人が聞けば飲みかけの紅茶でも吹き出しそうな内容であるが、アイドルを独り占めたいというようなメイドたちの心理が、シュヴァインの無様な姿を口伝で伝播されないう強固な防波堤になっているのだ。

そうして今日もシュヴァインは洗面室の戸を開けるといふ行為を理解できず、戸にもたれてそつと二度寝を始めたのを止められるのであった。

：

冷えた水滴をタオルで拭つたところで「シュヴァイン様：プレミアバージョン」は幕を閉じた。

眠気がようやつと引いたようで、切れ長の目に見られると日頃は冷静なりユミエールであつてもどきりと心臓が高鳴る。けれども至高の御方の前で無様な姿は見せられな

いとすぐさま気を引き締めて「どういたしますか」と問いかけた。

「第六階層の畑のほうに行ってくる」

「近衛の準備は整っております」

「……様子を見に行くだけだからすぐに帰ってくるが」

「至高の御方に万が一のことがあった場合、我々が盾となるためです。そしてシュヴァイン様がお出になられるときは護衛をつけることはアインズ様からの命令でもありません。ご容赦ください」

一拍置いてシュヴァインがうなずいたのを見てリュミエールは息を吐いた。

×××

近衛をぞろぞろと引き連れて第六階層を訪れたシュヴァインの視界には一匹の巨大な雄鶏が映っている。それもただの雄鶏ではなく尾羽のあるべき部分に蛇の頭を生やした魔物の雄鶏だ。

種族の名前をコカトリス。そのコカトリスの名前をプーレという。

コカトリスはユグドラシルでも平凡な魔物なのだから、異形種ばかりが集まるナザリック地下大墳墓に存在していてもなんの違和感もない。

ただ、湧いて出る他の魔物や、購入して集める魔物と比較して特異な点を挙げるとすれば、彼もまた至高の御方に創造されたNPCだということだ。

プーレはその鋭い鉤爪で何度か地面を引っ搔いたあとに嘴でその場所を突いている。シュヴァインにはその様子が餌を探している鶏のようにしか見えなかったが、違うんだろうなあと自分の中で無理矢理完結させた。

プーレは職業レベルだけで七十以上を食い潰している技能重視のNPCだ。種族レベルを合わせれば八十と少しの強さになるのだけれど、その戦闘能力はレベル三十代の恐怖公単体にも劣る。

「これはこれはシュヴァイン様。いかがなさいましたか？」

こちらに気づいた雄鶏がゆったりと首を下ろした。お辞儀をしているのだろうかやはり餌を探しているようにしか見えないと、揺れる鶏冠を見ながらシュヴァインは思った。

「この前に預けた薬草の様子を見に来たんだ。ナザリックの土壤に根付きそうか？」
「問題ありません。お二方が連れて来られた森^{ドレイアード}精霊の話を聞く限りでモ、色や成長速度に大きな異常は見られないと言っております」

そうしてもう一つ思った。余計な設定を付け加えなくてよかった、と。

脳裏には先日顔合わせをした宝物殿の領域守護者の顔が浮かんでいることは言うま

でもない。

プーレはシュヴァインが手がけたNPCだ。その見た目に似合わずファーマーの職業を獲得している。むしろその系統の職業を網羅した、ナザリックにおける農夫の中の農夫である。

そのファーマーとしての手腕はユグドラシルの農夫プレーヤーに超難関と言わしめたイベント用の植物を問題なく育成させることができるほどだ。

そもそもプーレが作られた経緯としても「養殖できるけれども過程がものすごくめんどくさいアイテム」をアインズ・ウール・ゴウンで量産できる体勢を整えようという意見が出たのがきっかけである。そして農夫のイベントが開催される日付が近く、その上位入賞者に贈呈されるアイテムがお約束の「運営とち狂ったか」仕様の景品であったものだから、それがシュヴァインのやる気の導火線に火をつけたというだけの話だ。

そして「こういうのが作りたいです」とシュヴァインから送信されてきた文章メッセージを見たかつてのギルドメンバーたちが、その徹底した能力値の極振りに「あの作物を一日で育てられる農夫とかプレイヤーだったら絶対無理なやつ」「紙防御」「きちがい農夫」「ペロロンチーノあとで闘技場裏な」「なんで俺だけ」とそれぞれコメントを残したのも今となっては思い出である。

そんなプーレにシュヴァインが書き込んだ設定はただ一行だけ。——植物を育てる

ことが生きがいである。

「小学生か」と突っ込んだペロロンチーノのアバターの尻を蹴り上げて、78のダメージを与えてやったことも今となっては思い出である。

「モモンガさんの話によれば人間たちにはかなり貴重な植物らしいからな。よくよく頼む」

「畏まりました。このプーレにおまかせください」

∴

水やりの手伝いでもしようかと尋ねれば「いいエ！ これはワタクシの使命！ シュヴァイン様のお手をわずらわせずとも大丈夫です！ ええ大丈夫ですとモ！ シュヴァイン様ならば特別に∴いえやはり結構です！」と怒涛の勢いで断られたので設定の力とは恐ろしいものだとしゅヴァインは思った。あれはたぶん自分が育てている植物に触つて欲しくなかったのだろう。

気持ちはわからなくもないが、NPCが製作者に似るといふ事実を確認済みである立場としてはとても複雑な気分だ。

「おれあんなに執着強いかな∴」

シュヴァインは近衛に聞こえないような音量で、口の中で呟いた。

激録! 至高の御方、密着二十四時! (午後篇)

エ・ランテル最高級の宿屋である黄金の輝き亭。その一室で懐具合の厳しさに思い悩んでいたモモンガの脳裏に「おんもいくう」という間抜けな声が聞こえてきたのは、すでに正午も過ぎた時間帯であった。

相手が^{メッセージ}〈伝言〉を使用して自分に連絡してくることはなんの問題もないのだが、向この周囲には側仕えの部下がいるはずだ。

素面の口調を出しても大丈夫なのかと質問をすれば「本日の豚君放送局は便所よりお送りさせていただいております」と返事が返ってきた。つまり周囲に聞かれない場所まで逃げてきたのか。

まるで仕事をさぼるオフィスレディのような友人の行動に呆れつつも、会話をするのならばそれが一番正しいだろうとモモンガは正当性を見つけてなんとか自分を納得させる。

「構いませんですよ。前にも伝えた通り報告連絡相談をしてくれれば、大丈夫です」

『かーちゃん…』

「違います死の^{オーバーロード}支配者です」

モモンガはシュヴァインの「近辺には目ぼしいものがない」という愚痴を聞いて笑い、またモモンガ自身も「宿屋で出される見たこともない食事がこの身体では食べられないことが悔しい」と笑い混じりで愚痴を言った。

そうしてシュヴァインの口からナザリック周辺の地帯の情報が入るたびに、モモンガはシュヴァインの趣味に対する異様な情熱を再確認するのである。

「では^{リザードマン}蜥蜴人の集落へは侵攻しても問題はなさそうということですね」

『むしろ守護者のうち誰か一人が相手でも、オーバーキルになると思いますよ。おれが不可視化を使って集落の中央でラジオ体操しても誰一人として気づいてくれませんでしたから』

「なにしてるんですか」

『むしゃくしゃしてやった』

「そんなテレビでよくやる犯罪の動機みたいな理由で」

『誰でもよかった』

好き勝手に遊んでいるようにしか聞こえないけれど、…むしろ本人は好き勝手に遊んでいるのだろうか、情報を獲得することこそシュヴァインが最も得意とする分野である。

最初にこの能力に目をつけたのは言うまでもなくアインズ・ウール・ゴウンの諸葛孔

明と呼ばれたぶにっつと萌えだ。

後衛型の代表格とも言える石化^{メドゥーサ}の蛇を超耐久型として育成することができたのも、欲しいアイテムを所有するギルドの所在地を確実に割り出すのも、全てはその情報収集能力の高さと尋常ではない執念ゆえの賜物である。けれども「シユヴァインさんの情報は、欠点を理解したうえで活用する必要がある」と言ったのもまた彼らの諸葛孔明その人だ。

ずいぶんと昔にこんな会話が あった。

「それじゃあシユヴァインさん、敵側のギルドの地形を教えてくださいいいですか?」
「上が四階、下が二階の六階層構成で地下二階に宝物庫がありました。敵NPCは二階部分と地下一階部分までなら問題ないと思いますけど、三階と地下二階部分はカンスト勢が揃ってたので、プレイヤーがいることを考えると復活系の装備はいくつか持っておいたほうがいいと思います」

「敵側のプレイヤーでランカーはいましたか?」

「:ちよつとわかんないですう」

「世界級^{ワールド}アイテムはありましたかね」

「山河社稷図だけは確定ですね、おれあれで追い込まれて一度死んだので。あとは最悪の事態を考慮した場合でももう一つある程度だと思えます。二つ以上の所有はあり得

ません」

「プレイヤーは何人くらいかわかりますか」

「…ちよつとわかんないですう」

興味の薄いことに関しては何も役に立たない豚だとぶにつと萌えは嘆いた。

シユヴァインにとつて重要なのは「他人」の特徴ではない。攻略すべき対象とその過程を超えた末にある報酬だけだ。

それでも彼が獲得してくる情報とは他のギルドに所属している者にとつては驚異であり、味方にはとても心強いものであったからこそ、シユヴァインがアインズ・ウール・ゴウンの情報収集の要として重宝されていたのは当然のことだろう。

「それにしても今回の単独潜入でいくらくらい使ったんですか、シユヴァイン」

「んー、諭吉さん三人で神器級が四つなのでまあおれ的にはプラマイゼロですかね、ウルベルト」

「薬物に依存したジャンキーみたいなこと言ってやがる…」

「中二病に罹患したひとに言われたくないですう」

「そんな貴様に朗報だ、世界を覆い尽くすほどの悪魔を無限に召喚することのできる^{ワールド}世界級アイテムというものがあるらしくてだな」

「偉大な閣下、あなたこそ悪の中の悪と存じます。そこるところちよつと詳しく」

懐かしい光景を思い出してモモンガはない目蓋を細めるような仕草をする。

「前日の騒動」はモモンガの、そしてシユヴァインの慢心であり、油断だった。自分たちとこの世界の人間とを比較して安心していたからこそ寝首を搔かれたのだとお互いに反省し合った。

そうしてこれまで足りていなかったものを補うようにシユヴァインはナザリツクの周辺を縦横無尽に動き回っている。その範囲はへ伝言^{メッセージ}で報告を聞きたびに広くなっているのだから、やがては王国以外にも足を向けるようになるはずだ。

現在、彼の本能が足りないと訴えているのは貴重な道具もさることながら、この世界に対する知識欲なのだろう。

あれが足りないこれが足りない、湧き出す欲望のままに彼がこれから各地で動き回るだろうということは想像に難くない。

前日のような敵に遭遇するのではないか、という不安がないと言えば嘘になる。

しかし「仲間」がしたいと思うことを制限するつもりはモモンガには微塵もなかった。そのために非常事態の場合に備えた連絡手段を用意し対処法を何種類も考えたのだ。そうして他でもないシユヴァイン自身が「大丈夫ですよ、次に部外者が出現したら隠密に徹底しますから」と言ったのだから、モモンガからこれ以上言えることはなにもない。

シュヴァインが徹底するとは「徹底的に情報を得て相手の弱点を揃えたうえで、超耐久の装備において長期戦で相手を潰す」ということだ。

『緊急連絡用にはいつも通り、前にやまいこさんが課金で当ててた隠密型のモンスターを二匹借りていきますね』

「わたしがどうぞつて言うのもおかしいような気がしますが、わかりました」

『お土産はその辺で拾った草でいいですか』

「せめてもう少しまともなものをお願いしていいですか」

『カッツェ平野のアンデッドを一体…』

「うちではもうめんどう見きれないので元いた場所に帰してらっしゃい」

『かーちゃん…』

「違います死の支配者です」

× × ×

シュヴァインがナザリックに帰還したのは、日も暮れたころであった。

第九階層の自室の前に立つ人物の顔を見たときのシュヴァインの気持ちは「ぎよ」という擬音が適していた。

見間違えるはずもない明るい色の三つ揃えのスーツに丸眼鏡の人物——デミウルゴスは視界にシユヴァインを映すと、それはそれは丁寧な仕草で礼をする。なぜここにいるのか。疑問を口にしながらシユヴァインが足早に近寄れば、デミウルゴスは「お届けものにまいりました」と微笑んだ。

少し秘密裏に話したいことがあるからと舌先三寸でメイドや護衛たちを言いくるめて人払いをすると、シユヴァインはデミウルゴスを自室へと招き入れる。

「馬鹿な…早すぎる…」と口の中で呟きながらもデミウルゴスの言うお届けものの内容が気になってしかたないようで、視線はそろそろと相手の顔をうかがっていた。

デミウルゴスはそのようなシユヴァインの気持ちを知ってか知らずか、紳士然とした態度で勧められた椅子に着席する。そうしてとても優雅な手つきでいくつかの巻物を取り出して机上に並べると、そこでようやくと主人と視線が合った。

「…そんなに見つめられると、穴が開いてしまいそうですね」

「デミウルゴスでも照れちやう?」

「それはもう。至高の御方の御前ですのぞ」

「だってお届けものなんて言われたら期待するのがひとの性分でしょう」

「違いありません」

「ご期待に沿えるとよいのですが、と笑って言いながら広げられた巻物には、びっしり

と文字が書かれている。突然提供された目が滑るほどの情報量に困惑しつつシュヴァインはそれを両手で持って内容の確認を始めた。

「魔法用の巻物……じゃあないな？　普通の羊皮紙だ」

「はい。こちらの通常の羊皮紙では第一位階の魔法にも耐えられないため、現在はアイズ様よりご命令をいただき、第三位階まで魔法を込められる代理の羊皮紙を生産しております」

「あ……それ確かモモンガさんから聞いた。普通のやつだとただの燃えかすになるんだっけ」

視線で文字を追いつつもシュヴァインは適当な会話を投げかける。そしてデミウルゴスはそれに丁寧な返答と相槌を返したが、自分からはけして主人の邪魔をするようなことはせず、シュヴァインが文書を読み終わるのを待機していた。

「結構会わなかったけど元氣してた？」

「はい、問題はありませんでした。この身を案じていただきありがとうございます」

「おれのほうはナザリック周辺をうろろしてただけだよ、なかなか目ぼしいものがない感じ」

「それはそれは……」

けれどもシュヴァインが文書を読み進めるにつれて次第に会話は途切れていく。や

がて静寂が部屋を満たし、紙が擦れる音だけがやけに大きく響くようになっていた。

「いれまじゅー」

そうしてようやく紙類の音が途絶えたのは時計が半周ほど巡ったころだ。

それまで背筋を伸ばして微動だにしていなかったデミウルゴスは、ざわりとした寒気のようなものが背筋を撫でるのを感じた。さらに「しゅーしゅー」と蛇が威嚇する低い音がして、それは、まだ巻物を読みふけるシュヴァインのほうから聞こえてくる。巻物に遮られてその表情まではわからない。

デミウルゴスが息を飲んでシュヴァインの質問に肯定すると、ひとたびの沈黙が訪れる。そして、

「ブリリアントー」

場違いな言葉を吐きながらシュヴァインがぱちんと両手を打ち鳴らした。ご丁寧に邪魔にならないよう巻物を指の間に挟んで位置を調整している。デミウルゴスは突然の発言に不意を突かれたものの、普段は感情のにじまないシュヴァインの顔に喜色が浮かんでいるのを見て安堵する。

「詳しく詳しく」と急かしてくる主人に微笑んで、巻物に書かれた内容についてさらに精細な説明を始めた。

「これはあくまでも私が判断したマジックアイテムです。しかしそれを私が直接選んで

奪ってしまうよりも、シユヴァイン様が選別し、狩りを楽しんでいただいたほうがよいかと思ひまして」

「そこまで考えてもらうなんて申し訳ないね」

「滅相もございません。私はシユヴァイン様の忠実なシモベ、主人のために最善を尽くすのは当然の務めであり喜びでございます。この情報については準備が整い次第ご報告いたしますので、大変申し訳ありませんがもう少しお時間をいただければ……と」

「待ちますとも待ちますとも」

数回うなずいてから巻物を丁寧に丸め直すと、シユヴァインはそれをアイテムボックススにしまい込んだ。

「いやあ、ここまで来るとありがとうの一言では済まないね。どう？ 欲しいものとかやってほしいこととか決まった？」

「…そんな、至高の御方に奉仕させていただくことに見返りを求めるなど……」

「でも多少要求してくれないと、今後用事があるときに頼みづらくなるのがひとの心理ですよ」

「……………わかりました。大変恐れ多いことなのですが、一つ、シユヴァイン様にご助力願いたいことがあります」

「おれにできることなら勿論協力いたしますとも」

たっぷり時間を置いてからデミウルゴスはぼつりぼつりと語り出す。

職権乱用だとしか言いようのない強引な切り込みだとは思ったが、シュヴァインとしてはこういった過程を繰り返すことでデミウルゴスとは腹を割って話せる仲になりた
いと思っている。

知恵者の知識を拝借したいときにこれほどまでも畏まられるとどうにも頼みづらくなるからだ。

「支配者」としての仮面なぞ前日の騒動ですっかり剥がれているのだ。

そこから思いついた博打ではあつたが、演技だと知られているのならそもそも継続させる必要などないとシュヴァインは考える。窮屈に過ごすよりも悠悠自適にしたいという欲求もある。

——けれどそんな自分の行動がNPCたちに失望され、反逆されてしまったら?

デミウルゴスはシュヴァインにとってその答えを見定める重要なサンプルでもあつた。

ナザリツク地下大墳墓の中でも一、二を争う知恵者を実験体にすることがどれほど危険なことであるか。モモンガが聞けば確実に苦言を呈する試みだろう。

けれども「これもまた性分なのだからしかたない」と彼の中の人間ではない部分が訴えるのだ。

「難易度は高いほうが攻略したときの達成感が大きいからねえ」

「そうですね…、シユヴァイン様には刺激の足りない狩りだとは思いますが…」

「あーそっちは全然大丈夫ですう。限られた環境で一人遊びするのも得意なんで」

「より楽しんでいただけるよう尽力いたします」

「すぐく期待してます」

シユヴァインはデミウルゴスの語る内容に相槌を打ち、ときには質問をする。

二人の会話に溶け込むように髪の毛が鳴いた。

豚の蛇は無関心

「はあい、こちら豚君探偵事務所です。泥水と藻草しかない集落とか楽しいのは最初だけだね、いろいろ身体に絡みついてきてまじふあつきゆん。ナザリックに帰還したらおれすぐ風呂入る」

『シユヴァインさんの集落についての感想はどうでもいいんですけど、リザードマン 蜥蜴人たちの様子はどうですか』

「おれに気づくやつはまるでなし、二つ目か三つ目の集落には魔法系の武器を持つてるやつも一匹いましたけど、スキルにすら引つかからないのでまるでお話しになりませんね。おれの裸装備でも無傷で勝てると断言します」

『まずナザリックから出ていく前にダメージを負うんですね』
「灼熱と極寒には…勝てなかつたよ…」

裸装備つてことは耐性皆無になるってことだからね。リング・オブ・アインズ・ウル・ゴウンも外すから転移もできないし、戦う前から被ダメージとか悲しくて悲しくて震える。有言不実行ここに極めたり。

どうもこんにちは、豚君アワーのお時間です。今日はトブの大森林から数キロ進んだ

ところにある大きな湖、その畔にちらほらと点在している^{リザードマン}蜥蜴人の集落の一つに来てお
りますう。

正直泥水と藻草で足元は最悪です。来訪初日は泥！ 草！ やべえめつちや身体につくう！ と遊んでおりましたが偵察も三回目になると洗濯が憂鬱になるのです。洗濯するのはおれじゃないけれど。

視線の先にはモモンガさんが下位アンデッド召喚：作成？ 確かそんな名前のスキルで作った一匹のモンスターが「要約：貴様ら^{リザードマン}蜥蜴人に宣戦布告しちゃうぞ（はあと）」のようなことを厳めしい言葉遣いで宣言している。

おれはそれを観察する第三者がいらないか、もしくはナザリックの脅威になる實力を持つ^{リザードマン}蜥蜴人は本当にいないのかどうかの最終確認へ訪れていた。

対^{ワールド}世界級アイテム保持者に備えておれも自前の^{ワールド}世界級アイテムを持ち出し、息を殺して小屋の陰から様子をうかがっているけれど、第三者もしくは^{リザードマン}蜥蜴人たちが接近してくる気配はない。

ちなみに持ち出した本日の^{ワールド}世界級アイテムは傾城傾国ではない。着用してくれば汚泥に塗れることが確定している場所で白色の服を身につけるほどやんちゃ坊主ではないのだ。

「ひええ…：大事なお宝ちゃんに指紋ついた気がする…」

『なぜ水晶玉を握ってしまっただのか』

「手放したらすぐさま過呼吸起こす気がした」

『薬物依存症の治療つてまず監視員のいるところで薬から引き剥がすんでしたっけ』

「へへ……いつはもうおれのもんだ……誰にもやらねえぞ、へへへ……」

馬鹿なやりとりをしている間にモンスターのは姿は掻き消える。いや転移でナザリツクへ帰還しただけなのだ。

ざわめく^{リザードマン} 蜥蜴人の中にはやはりおれを見つけられるやつはいないようだ。

蜥蜴人の集落は全部で五か所。それら全てで宣戦布告をする作業は無事に終わったのだから、おれがこれ以上ここに残る理由もないだろう。

特筆すべきことはなに一つなかったことをモモンガさんに報告して^{メッセージ}へ伝言^{ゲート}を切り、おれの方もナザリツクへと帰還するべく目の前に開いた^{ゲート}へと身体をくぐらせた。

…

「きやー、ももんがさんのえっちー」

「あえて言うならいい財布になりそうだと思います」

床にばたばたと泥水を垂らす上着を脱いだところで、モモンガさんがおれの自室へやってきた。

メイドには「お洗濯はあとで頼みますう」と告げて人払いをしている。今ごろはおれが通過して汚した廊下を掃除してくれていることだろう。どうもすみませんご迷惑をおかけしますう。

まあそんなわけで開口一番おれがモモンガさんを頭の悪い口調で罵ろうともなんの問題もないはずだ。そうしておれの罵声を受けた本人も気にした様子はなく、軽口を叩きつつ部屋の主人の許可さえ取らずに椅子へ腰を下ろすのだからこの骸骨だんだん図太くなってやがる。

「蛇皮ですね。お金溜まりそう」

「シユヴァインさんの皮で作ったら貴重なアイテムが舞い込んできそうですね」

「…、…」

「自分の腕をこんな食い入るように見るひと初めて見た」

貴重アイテムが舞い込んでくる財布か。自分の皮はちよつと…いやでも回復魔法やポーシヨンでなんとかなるかもしれない。ああでも痛いのは嫌だな…しかし財布は…。

苦悩の迷路にはまったおれを救い出したのは「わざわざ財布を作らなくてもシユヴァインさんの肌についているでしょう」というモモンガさんの一言だった。そう言われればその通りだわ。

モモンガさんに「身体の骨の数でも数えていてください」と告げ、おれは衣服のいた

るところから水滴を垂らしながらバスルームへ直行した。

これが神器級の装備であろうとも泥や藻草の絡まったものを抱き締めて喜ぶことはさすがの豚君でもちよつと無理です。

そうして頭からシャワーを浴びて泥水や藻草やその類いの生臭さを落とすとやつと一息吐いた心地になる。あらかじめ準備されていた適当な衣服に身を包んで応接間に戻れば、暇を持てあましたモモンガさんが律儀に手首を数えているところだった。

「お待たせしましたあ、作戦会議しいましょ」

「にじゅうはち…にじゅうきゅう…さんじゅう…さんじゅういち…」

「作戦会議しいましょ」

「さんじゅうに…さんじゅうさん…さんじゅうよん…さんじゅうご…さんじゅうろく…」

「十二、十五、三、四十一、五、八、七、十一」

「じゅういち…じゅうに…あれ？」

「はいモモンガさん、好きな食べ物は何つ先に確保するほう豚君ですう。作戦会議しましょ」

「ああもうお風呂からあがったんですね」

「あがりましたとも」

「じゃあ会議と行きましようか。…、…んー」

手首を眺めて不思議そうに首を傾げるモモンガさんは突然数字が変わった原因には気づいていないようなので、あとしばらくはこれでからかってやろうとひっそり考えながらモモンガさんの真向かいの席へと座る。

そして座席の背もたれへだらりと身体を預けてから「それで、リザードマン 蜥蜴人の集落を侵攻するのはなにが目的なんですか？」と尋ねれば「わたしたちは、さらに具体的に言うならば、カンストしているユグドラシルの存在は成長できるのかを検証してみたいと思っています」と考えていかなかった返答がやってきた。またずいぶんと難しいことを考えてらっしゃる。

そこからおれたちの肉体的な成長の限界について、それを超える敵対者が出現してくる可能性について、さらにこれからはそれを未然に防衛する手段についてと頭の痛くなるような話が続いた。

ふええ…豚君の頭にはもう入らないよお…！

「眉間にもものすごいしわが寄って顔の厳めしさが三割増しですけど大丈夫ですか」

「大丈夫ですよ。…つまり、NPCたちの思考能力までカンストしているか、そうではないかの実験ということですね」

「その通りです」

「プレイヤールの豚君は思考能力がカンストしているみたいなんですけど」

「課金してでも枠を増設してください」

両手で頭を揉みながら考える。理解力を増設するための枠つてどこに課金するんだ、学習塾か。

ナザリックの二大頭脳の顔を思い浮かべながら首を振った。アルベドもしくはデミウルゴスが教師になったあかつきには理解不能な単語について行けなさ過ぎておれの脳味噌が物理で破裂する自身がある。

「モモンガ学習塾でお願いします」

「そうですねえ、会費は世界級アイテム三つでいいですよ」

「さようならお達者で」

スキル一つを発動して距離を置いたおれに目の前の骸骨は笑うけれど、おれはちよつと笑えないです。いじめ、だめぜつたい。

「まあそういう理由があつてぎりぎり勝てるか勝てないかという兵士を出陣させるためにも、隠密と能力鑑定スキルを持つシユヴァインさんに現地の偵察に向いてもらつたんです。世界級アイテムの所持は強大な敵対者がいた場合を考慮してですが、今回は杞憂だったみたいですわね。わたしのわがままを聞いてくださつてありがとうございます
シユヴァインさん」

「お礼は世界級アイテムでいいですよお」

「さようならお達者で」

まじかよこの短距離で〈飛行〉使う魔法詠唱者初めて見た。

×××

まあ話し合いをしたものの、結局のところ偵察を終えた時点でおれにできることと言ったらこれからのための理解力を養うくらいしかないようだ。うわ…つら…。

少しでも頭脳派のような雰囲気を出すために図書館から本を拝借してきたものの、その題名は「特選！ 激レアアイテム！」である。ワールド・サーチャーズに所属していた誰かが執筆した作品らしいのだが、ユグドラシルで書籍を作る行為なんぞはプレイヤーの息抜きの一つでしかないので詳しくは知らない。おれは書籍を作る暇があったら冒険に向かう派だから…。

そうして最初のうちはのろのろとページを捲っていて、やがてその手は動くのを忘れる。おれの視線は部屋の中央に浮かんでいる水晶の画面に釘づけだ。

そこに投影されているのはアンデッドの軍勢と懸命に闘う蜥蜴人の群れである。画面を媒介して見物しているからか戦況を視察しているというより、ファンタジー系統の

映画を見ているような気分だ。自分の見た目がすでにファンタジーである時点で「いまさらなにを言っている」という気がしなくてもないけれど。

「うん、うん、いいじゃないか。嫌いじゃないぞ。まるで物語の登場人物みたいだ」

片腕の膨れた^{リザードマン} 蜥蜴人が獣の動死体の頭を潰したのを見ておれはしみじみと呟いた。言葉遣いが仰々しいのはここがモモンガさんの自室であり、すぐそばにはお付きのメイドと戦闘^{フレアデス}メイドの一人であるユリ・アルファ、そしてアルベドが控えているからだ。

ただしアルベドに関しては「なにやってんだこいつ」とか「いつまで演技してるんだこいつ」と思われてもしかたがないと思っている。

「そう聞くとシユヴァインさんは^{リザードマン} 蜥蜴人を鼻履しているようだな？」

「自軍のほうが可愛いのは言うまでもないとも。それでも目に新しいものは刺激がある」

からかうように語尾をあげて相槌を打つモモンガさんに笑ってみせる。

これは自軍が不利な状況であつても計画通りにものごとが進んでいると部下にアピールするためのモモンガさんのロールプレイだ。

おれは「豚君としてはあ、もう全部ばれたし演技ぶん投げて気楽になりたいって言うかあ」と告げればスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンでどつかれたうえに「傾城傾国を泥水でひたひたにしますよ」という恐ろしい脅迫を受けたので支配者（）とし

てお付き合ひしているだけです。

「——モモンガ様、シユヴァイン様。アウラ、マーレ、デミウルゴスがナザリツクへと帰還したそうです」

「さっきのところは超位魔法打ち込んだら一網打尽だと思う」「さっすがモモンガさん、おれにできないことを平然とやってのける外道ですね。そこに痺れる憧れるう」という会話を支配者（○）の口調で交わしていれば、外部と連絡を取り合っていたらしいアルベドが他の守護者たちの帰還を告げた。

そうしてへ水晶の画面には^{クリスタル・モニター} 蜥蜴人の決死の攻撃を食らった死者の大魔法使いの姿が映る。

「時間のようだ。シユヴァインさんはどうする」

「勿論同行させてもらうとも。この本にも飽きたところだからな」

嘘、本当は八ページくらいしか読んでない。

おれの部屋に置いておいてくれるか、とメイドに本を手渡しておれはソファから立ち上がる。同じように腰をあげるモモンガさんを確認して視線を出入り口に動かせば、すでにユリが扉を開いて待機しているところだった。

豚の蛇は震える

先頭を歩くのは、常識というものから外れた力を持つ魔法詠唱者だ。

闇のような漆黒のローブを身に纏い、無数の魔法の装飾品で身体を包んでいる。フードの下は骸骨で、眼窩に宿った真紅の色からはなにを考えているのかをうかがうこともできない。顔と同じように皮も肉もない右手にはどす黒く濁った赤色のオーラを撒き散らす杖を携え、それは人間の苦悶の表情を表現しては消滅していく。まがまがしいという言葉を目現させたような存在だった。

そうしてそのすぐ隣を人間のような…けれども確実に人間ではないと断言できる姿の人物が続く。

まず目を引くのは頭髪で、そこには髪の毛ではなく無数の蛇が蠢いている。

身につけた艶やかな革製の防具は薄い輝きを纏っており、それが魔法のかかった装備だということはすぐさま理解することができた。それも、目の前に並ぶ骸骨の軍勢たちが装備している魔法武器とは比較できないほど強大な力を持つ装備であると。

その後ろから黒い翼を生やした女性が、闇妖精の双子が、銀髪の少女が、異形の化け物が、尾を生やした人間のような男が、二人に付き従うように蜥蜴人たちの集落がある

リザードマン

ほうへと歩を進めてきていた。

突如現れた巨人が投げつけた大岩へと向かい、その一団は骸骨でできた階段を上っていく。

やがて先頭を歩いていた骸骨がその白磁のような手を動かすと漆黒に輝く背の高い玉座が二つ出現し、その骸骨と、蛇の頭髪をしたものがその玉座に腰かけた。そして上位者だとわかる二人の背後に付き従っていたものたちが一直線に並んだところで侵略者たちの動きは止まった。

ザリユースは震えていた。ザリユースだけではなく、この場にいる^{リザードマン}蜥蜴人の全員がぶるぶると身体が震えてしまうことを止められなかった。

それは「凍らないと言われていた湖が凍りついたことによる寒さ」だけではなく「自分たちよりも遥かに強大な力を持つものが出現した」ということへの恐怖であることは言うまでもない。

×××

Q：^{リザードマン}蜥蜴人たちに格好つけるために、がち装備で来てくださいと言ったのは誰でしょうか？

A：モモンガさんでえす。

天候変化の超位魔法を叩き込むならあらかじめ言っておくべきだ。いくら耐性効果のある指輪をしていると言っても、それは環境によるペナルティを無効化するだけであつて寒さを無効化するわけではない。

例えるならばユグドラシルでは指輪をしていれば行動遅延やら吹雪の被ダメージ、蛇系種族ペナルティによる一定時間の行動を取らなかつた場合の睡眠状態負荷などを無効化してくれるのだけれども、それはあくまで「負荷」の無効化だ。

こんなことになるかわかつていたなら豚君だつて「寒さ無効」のアイテムやら装備やらを整えてきましたよおお。モモンガさんの「見せしめに魔法使いますね」なんて言葉に軽々しくどうぞどうぞなんて言うんじゃない。絶対に許さない、絶対にだ。

いや、ゲームならば寒さなんぞ「あー、体力ゲージが水色だなあ」くらいの認識なのだ。無効化する装備を整えた時点でペナルティなんてものはあつてないようなものなのだから、おれも「寒さ」そのものについては特別意識していたわけではない。

環境状態異常負荷にかなりの耐性を持つアンデッドならばそもそも耐性アイテムがほぼ必要ないので、モモンガさんは群を抜いてその意識が薄いのもかもしれない。まさか寒さの状態異常がここまで過酷なものだなんて豚君不覚だわ。ナザリックに帰還したらずばは装備の見直しをしなければ。

そういう理由でおれはモモンガさんと^{リザードマン}蜥蜴人たちとの会話なんぞ聞いちやいなかった。

話が終わって〈^{ゲート}転移門〉が開いたときにはせめて無様に走り出さないよう、けして走らず急いで歩いて、そして突入するという意識しか残っておらず、^{リザードマン}蜥蜴人たちには目もくれずに極寒から逃げ出したのであった。

転送されたのはずいぶんと巨大なログハウスの内部のようで、おれはすぐさま部屋の窓際に寄ってほのかに差し込む日光を受ける。あつたかい…。

「シユヴァインさん？」

「くっそ寒い…。寒さに対するペナルティ対策だけを重視した結果がこれだよ…」

「え、ちよつと大丈夫ですか」

あとから〈^{ゲート}転移門〉を潜ってきたモモンガさんが部屋の隅でひっそりと日光浴をしているおれを不思議に思ったのか話しかけられたけれど、視線をモモンガさんのほうへ動かすだけでせいっぱいである。断固として、断固としてここから移動してたまるものか…！

そうしているうちにアルベド、アウラとマール、シャルティアと順々に他の守護者たちがログハウスへと転移してきたことでおれたちの会話はそこで途切れる。

「ではアインズさま、シユヴァインさま、わたしはここでおわかれとさせていただきます

す」

お辞儀のつもりなのか丸い身体を揺らしながらヴィクティムが発言する。今回の^{リザードマン}蜥蜴人たちの集落の訪問にはヴィクティムも、そして一時的には言えガルガンチュアも同行していたのだから、ナザリックの威厳を示すという意味でモモンガさんの本気度がうかがえるだろう。

おれが「おつかれさまですう」という言葉を支配者（）的に言いながら近寄ってきたヴィクティムの頭だか背中だかを一撫ですると、そのまんまるい胚珠は「くふ！ くふふ！」という声を出して笑ったあとに「^{リザードマン}ありがたきしあわせ」と身体をよじった。

ヴィクティムを撫でることについては^{リザードマン}蜥蜴人のところへ足を運ぶ前にも好奇心に負けて、玉座の間で「よく来た」とごまかしながら撫でてみたが、それはもう吸いつくようにしつとりなめらかな感触だった。正直言うところちよつとくせになる。

こうも頻繁に接触してはセクハラ上司と認識されて訴えられても文句は言えないが、相手も「しあわせ」だと言っているのだから嫌がられていないと思いたい。

「けれどもすこしおからだがひえておられるようです。ごじあいなさってください」
墓穴掘った。

：

ヴィクティムの去り際の言葉によりすぐさま用意されたタオルケットに身を包み、白

湯をちびちびと飲むおれの威厳なんぞあつてないようなものじゃないだろうか。

目の前で繰り広げられる光景からそつと目をそらし、一口、もう一口と白湯を口に含む。気まずいとはこういうことか。成人男性：骸骨がどう見ても未成年の少女を椅子にするというとんでもないプレイを見せつけられている悲壮感あふれる第三者の立場になつてほしい。

むしろこの場にいる全員はどうして疑問を抱かないのか。

至高の御方だからですか、そうですね。

モモンガさんはそうまでしてこの椅子に座るのが嫌らしい。

確かにどう見ても人骨が組み込まれている玉座を二つ並べられても、その犠牲について考慮すると対応に困るが、だからと言って刑罰ついでに少女を椅子にするというものなのか。まあこういうものはひとの価値観に左右されるものだから、ああだこうだと言うつもりはないけれども。

：それにしてもこの光景は、：なんとという脱線した大人の世界。おとなになるってかなしいことなの。

「シユヴァインさまも、どうぞ……」と椅子にされて喜んでる少女に言われても遠慮願うのは当然の結果だった。与えられた選択肢に人骨椅子と羞恥プレイの二択しかないのならば、おれはどちらかと言えば人骨椅子を選びたい。

「いかがでしょう？」

「思っていたよりもしつかりしているな。誰かに作らせたのか？」

「僭越ながら、私がお二方のために作らせていただきました」

「デミウルゴスは手先が器用だな」

「お褒めに預かり光栄です」

おれの首は九十度回ってデミウルゴスのほうを向いている。その反対側には、公序良俗に引っかけたりそんな世界が広がっているのは言うまでもない。

けれどもおれの認識は甘かった。

まさかこのあとで普通に十八禁に引っかけかかる行為を「遠隔視ミラー・オフリモート・ビューイングの鏡」で見ることになるとは想像もしていなかった。蜥蜴の交尾とか誰得…うわ…気まず…。

「全く不快なやつらです。これからコキユートスが攻め込むというのに！」

「そうです、その通りです！」

「あ、えつと、あ、あのお…」

「デミウルゴスの言う通りでありんすえ、やつらには罰を与えるべきです！」

「うらやましい…」

確かこういう状態のことを「天使が通る」とか「天使が通った」と言うのか。

なにが起こっているのかわからないという沈黙が周囲を包み込んで、そして目の前の

状態を理解するには十分すぎる時間が経つてから、デミウルゴスが憤慨したとばかりに声を荒げた。それに続いて一部の守護者たちも賛同の言葉を口にする。

豚君？　豚君は見ていませんよと主張するために明後日の方向を見ながら白湯を飲んでいきます。いやまあいろんなあれやそれは見えてしまったのだけでも。

「…まあ、これから死ぬんだ。こういった場合、種族維持本能が目覚めるとかなんとか映画でやっているからな。なあシユヴアインさん」

「……そうだな」

やめてよして話題をおれに回さないで。

そうですね！　と敬語で相槌を打ちそうになったのを修正して返事をする。尻すぼみになっていく言葉に支配者○感はおおよそ皆無だけれどもなぜか守護者たちを納得させるには十分だったらしい。ここまで演技がぼろぼろなのに疑われないとなると、豚君はそろそろ守護者たちが俺俺詐欺とかに引っかかるんじゃないかと気が気でない。

「おっしやる通りです！」

「あれぐらい許すべきですよね」

「全く、全く！」

「あ、えつと、あ、あのお…」

「私もアインズ様に…」

欲望にまみれた言葉が聞こえるのを無視して白湯のおかわりを要求する。たとえばんくら支配者であろうともこれくらいは許されるだろう。せつかく暖まった身体が今のでまた戻った気がする。心が温もりを求めているとも言おう。

おれの要求に「紅茶をお入れいたしましょうか」というデミウルゴスの申し出に「ぜひとも」と答える程度にはおれの心は疲労困憊しているのだった。

「いつも気をつかわせてすまないな」

「いいえ、私にとつてシユヴァイン様のお役に立てることは無上の喜びですから」

ん？ うん？ うん。

首の後ろを撫でつけながらおれは「そうか」とだけ返事をしておく。こういうとき、どんな返事をすればいいかわからないの。

デミウルゴスだけでなく他の守護者たちもいる手前「報酬はきっちりお支払いするんだからいいんですよ、おれたちフェアにいきましょう」と言うわけにもいかないだろう。モモンガさんに第五位階魔法を落とされる可能性もなきにしもあらず。まあここはうなずいておけばいいだろう。

「あとは上映時間になったら、コキュートスの戦闘風景をじっくりと楽しもうではないか」

自己完結したところでモモンガさんに声をかけられて、おれの意識はそちらへ向い

た。

×××

「いえーい」と盛り上がっているわりには勢いの低い声が響いて、なにかを打ち鳴らす音が部屋に木霊する。まあそのなにかとはおれの手のひらとモモンガさんの手のひらなのだけれど、蛇皮と骸骨がハイタッチをしたところで人間同士が皮膚をぶつけ合うような音は鳴らすことはできないという事実だけがわかった。

「いやあ見事に勝ちましたねえ、圧勝ですよ」

「わたしはそれよりもコキュートスの成長が嬉しくて嬉しくて。部下の成長を見守る上司ってこんな気持ちなんですかねえ」

「お祝いにシャンパン開けます?」

「わたしは飲まないですけど景気づけにはいいですね」

「思いつきり振ったあとにモモンガさんの方向に向けて栓抜きしますね」

「やめてくださいしんでしみます」

おれの部屋でひとしきりはしゃいだあとで、お互いにずるずるとソファに座り込む。モモンガさんのほうからふう、と息をつく音が聞こえたあとで「あー…」と呻き声が聞

こえたのでどうやら精神が強制的に安定化されたようだ。部下の成長がそんなに嬉しかったのか。上司の鑑である。

「それにしてもクルシユ・ルールーに交渉を持ちかけたとき、私の身体でしょうか、と言われたときはさすがに動揺しました。爬虫類はちよつと…」

「そうですかあ？ お手つきですけど結構な美人だったじゃないですか。豚君はありかも」

「えっ」

「えっ」

天使が通る。…しかし少しばかりの沈黙のあとで納得したと言わんばかりの緩慢な動作で首を左右に振り、モモンガさんは骸骨の指でおれを差した。

「アルビノだからですね？ 珍しいもの欲しさの収集癖ですね？」

「凶星ですう」

とは言うものの、人妻を寝取るような性癖は持ち合わせていない。だから「今からも呼び戻しましょうか」なんて恐ろしい提案をしないでください。

いいですよおれにはこれまで収集してきた可愛い子ちゃんたちがいるんですから！
と言えば「そもそもシユヴァインさんの好みってどんな感じなんですか」と予想して
いなかった変化球が飛んできた。まじかよそんな修学旅行みたいな話題をこの場で

振っちゃうんですか。

「まじで」と声に出して確認すれば、目の前のギルド長は首肯するのだからどうやら逃げ道はないようである。よかろうならば教えてやろう、おれの好みを。

「おれの好みの子はレア度が高くて人目を集める子ですかね」

「アイテムではなくて」

「やつぱりがちなやつですか？ ……んー…おれは華奢な子よりはちよつと筋肉ついてるような子がいいと思いますよお。そういう意味ではだいぶ前に遭遇した金髪の女性とかわいい感じでした」

「金髪の女性とやらがどんな女性かはわからないですけど、お姫様のような子よりもスポーティな子がタイプだと」

「そうそう、そんな感じですよ。まあモモンガさんのほうは言わなくてもわかりますよお、おっぱい大きい子でしょう。愛していると設定しちゃうくらいですよし」

「うがッ！」

修学旅行談義はそこそこに盛り上がったけれども、最終的にモモンガさんに第八位階魔法を叩き込まれて部屋の中が大変なことになったのでひとをからかうのはほどほどにしないといけないなあと豚君は思いました、まる

豚の蛇の退屈な日

ばかやろう、と真正面から罵声を食らったのは久しぶりだ。

その怒りが自分に対して「やりすぎですよ」というふんわりとした注意を含んでいるのを知っているとは言えども、おれにとってギルド長から下されたこの処罰はとても苦しいものだった。

おれがこれまでユグドラシルで集めていた無数の換金アイテムがエクステンション・ボックスに飲み込まれていく光景と言ったら…、これで足りなかつたらと思うとぞつとする。

そもそも換金アイテムは購入できる素材を買い集めたり強化合成をするときに消費する金貨を増やすためのものなのだから、この世界に転移した以上そこまでの重要性はないと思っていたのだけれども、今日このときほど大量にストックしておいてよかつた、と思つた瞬間はない。

もしこれで足りないぶんがあつたならば、おれは換金アイテム以外のアイテムでこの損失を補填しなければならぬのだから。

そうして大事な大事なアイテムたちを犠牲にするまいと投入したその数が数千個ま

で及んだところで、金額を確認していたモモンガさんの口からようやくお許しの言葉が出た。ああよかった。可愛いアイテムたちの危機は回避したのだ。

「支出と収入の均衡を崩さないようにと守護者たちにも口を酸っぱくして伝えていたのに、まさか背後から撃たれるとは思いませんでしたよ」

「すみませんでした」

「アイテムや武器だったから今後の問題こそないですけど、魔獣の可能性は考えていなかったんですか？ その場合はいったいどうするつもりだったんですかね」

「すみませんでした」

「まあ生産者として責任を持って消費してしまった金貨は提出していただきましたけど。久しぶりにナザリックに帰還して玉座の間でギルドの収入支出の状態を確認したら、そのバランスが大崩落していたギルド長の気持ち、考えたことある？」

「すみませんでした」

「十八億で。百レベルのNPCの蘇生を三回してもお釣りが来るんですけど」

ギルド長のお小言は続く。

モモンガさんの部屋のソファのうえで正座をしているというこの状況で、おれにできることは謝罪を繰り返すだけだ。本当にすみませんでした。

そもそもどうしてこんなことになっているのかと言えば、久しぶりに部屋の荷物の整

理をしているときに「とくべつな種」というアイテムを発見したのがきっかけだ。

これはユグドラシルのとある農夫向けイベントで配布された参加賞なのだが、そのイベントの上位入賞者には同じ報酬がさらにいくつか貰えるというような仕様があった。その効果はガチャを回すのと似たようなもので、育てれば一定確率で激レアアイテムを排出するというもの。

まあその排出確率はお察しなのだが、一番の目的は入賞報酬であり抱き合わせのよう配られるそのアイテムではなかった。

それでも「下手な鉄砲数打ちや当たる」という言葉を信じて運営から受け取った合計千と百個にもなるとくべつな種を八百ほど育てたこともあったが、そのどれもがはずれアイテムだったので、豚君の心はどうとう二つに折れた。

一段階育てる毎に金貨が必要になるというのもめんどくささを加速させる要因になっていたと思う。これを第六階層にいるおれの作ったNPCブレイに育てさせたとしても、金貨を使用する段階になるたびに確認画面が表示されることが非常に鬱陶しかったのだ。

そしてなにより別にこの「とくべつな種」を使わずとも、かなりの低確率ではあるがドロップするアイテムを集めれば、ラインナップに並んだレアアイテムと同じものを作れるというのがおれには大きかった。あれば嬉しいけれど、なくても別に困らないとい

うやつだ。

無課金からでも参加できるイベントで参加賞として配られるアイテムなのだから、効果なんぞはそんなものだろう。

植えた段階でレアアイテムであればあるほど金貨をかけて育ててやる必要のあるこの植物系アイテムで、おれが「く枚の金貨を使用しますか？」という選択画面で見た数字は最高でもせいぜい二百万程度だ。そのたびに「はいはい最上級アイテムですね神器級ゴツズとかなにそれうまいの」と呟いていた日々が懐かしい。物欲センサー仕事した。

そんな理由で確認画面、選択、アイテムの回収の作業ゲーに疲れてしまったおれの手元には「とくべつな種」がまだ三百ほど残っていたのだ。けれどもこの世界に転移して、NPCが自立して活動している現在、おれがいちいち選択しなくてもあいつが勝手に植物を育ててくれるんじゃないかという名案が浮かんだのである。

どうせ育つのは最上級かそれ以下のアイテムだろう。ストック整理にもちようどいいい。

豚君天才じゃね？ そう考えて畑の上限値である二百のとくべつな種をプーレに預け「金に糸目はつけずに育成頼んだ」と丸投げした自分をぶん殴りつつ褒めたたえてやりたいが、どちらにせよこの選択は想定外の出費を生むことになった。

「いかがでしょうカ、シユヴァイン様」

「物欲センサー仕事した」

「はテ？」

「なんでもないともし」

神器級を四つに伝説級レジエントが十五、聖遺物級レリツクが十一とかなにそれこわい。

おれお前に「幸運」とか「女神の祝福」のスキルなんてつけて製作してないよ？

ファーマーで始まり生産効果を上昇させる魔法を覚えるために一部魔法詠唱者マジックキャスターの職業などを取得させ、ハイ・ファーマーで終わらせた数値の極振りにそんな余裕はない。

これが「きちがい農夫」と言わしめたNPCの実力と言われればそれまでだが、当然、一部を除き取得しているスキルで成長を左右するようなアイテムでもない。

とんでもない成果に心なしかどや顔をしている気がする目の前の鶏を褒めながら、そうしておれはある存在の脅威を確かに認識したのであった。

ほんとうだもん…、ほんとうに物欲センサーいたんだもん…。

喜びと悲しみとどん引きでこんなときどんな顔をすればいいかわからないの、と戦慄していたそのとき、おれの脳裏をよぎったのは言うまでもない。出費の二文字だ。

慌てて玉座の間に駆け込んだとき、そこにはコンソールを見つめてわなわなと震える死オバードの支配者がいたのであったたた…。しんだしんだ。

そして冒頭に戻る。

さすがに超位魔法でも叩き込まれるかと思っただが、それよりも厳しい処罰をギルド長は下した。当然と言えば当然だが、おれの不始末はおれが拭うことになったのだ。

換金アイテムが！ エクスチェンジ・ボックスにシユウウーツ！ 超！ エキサイティン！

上司二人が突然宝物殿に現れて、音改さんの姿で気の遠くなるような数の換金アイテムを黙々とエクスチェンジ・ボックスに投げ込む作業をさせたパンドラズ・アクターには悪いことをしたと思っっている。

「やべえ…換金アイテム残り千個切った」

「いやいや、むしろまだあることに驚きですよ」

「でも神器級のアイテムとかが思いがけず手に入りましたから」

「あー、それは大きな収穫ですね」

「いや実はとくべつな種がまだ百個ほど残ってて…」

「懲りてないなこのひと」

むしろ欲に目が眩みましたけど？

だがしかし数億の出費は痛い。モンスターを倒しても金貨が手に入らないこの世界では、それを補填するためには自分のアイテムを崩さなくてはいけないことになる。それでは本末転倒だ。

「金貨以外の別の手段で育てる方法ってないもんですかねえ」

「ゲームの裏技を探してみたいなものですよ、それ」

「いいじゃないですか裏技。おれ、バグが起きないなら換金アイテムの増殖バグとかばんばんやるタイプですよ」

「えーシユヴァインさん邪道」

「やだー、モモンガさんてば王道」

「でもコレクションしたアイテムは？」

「唯一無二です、きりっ」

「いえー」

「やふー」

ひとしきり遊んだあとで「ナザリックの外で育てたらどうなるんでしょね」とモモンガさんが提案をあげる。なるほどそれは考えてなかった。ナザリックの中で育てれば間違いない金貨を取られるが、その外部でユグドラシルの植物を育てるとどうなるのか。

その逆のパターンとして野菜などの育成を現在ナザリックで実験中だが、こちらのほうは、しかも特殊アイテムの育成は試したことがない。

「そうなるか畑の確保からになるわけですが、おれその辺は完全に専門外だからなあ」

「植物が育つにしろ育たないにしろ、この世界の人間に盗まれないためにも人目につかない場所で育てたほうがよさそうですね。適した場所をアウラに探させましょう」

「實際育てるのはプーレになるでしょうから、安全面も考えてあげてください…」
「勿論です」

「うちの子はか弱いんです！ もっと考えてあげてください！」

「で、でたー、モンスターペアレントだー」

実際外見もモンスターだしね。

×××

畑用地を探して三千里。

たぶん三千里も搜索していないし、なにより「里」の単位の細かい数字などわからな
いので語呂合わせのための適当でしかない数字だが気持ち的にはそんな感じなのでよ
しとしよう。

残りの「とくべつな種」をなんとかかすると、あわよくばナザリツクの外部に生産用
地を確保する意味を兼ねて、おれはアウラ、エントマ、そしてプーレと他二名のシモベ
を引き連れてトブの大森林へと訪れていた。

「正直なところ案内役のアウラと土壤観察をするためのプーレがいれば足りるんじゃないのかと思わなくてもいいが、プーレの警護や周辺の警戒について計算すると、どうしてもこの人数になるらしい。それ絶対豚君の護衛も計算に入ってますよね。はいはい知ってますした。」

「鬱蒼としたところでは太陽の光が当たらず、植物の成長が阻害される可能性があるのですが、畑にする場所は適した環境に開墾すると考えてよろしいでしょうか」

「その辺りについてはお前に全て任せる。育つか、育たないかもわからない土地と植物では実験をするようなものだからな。なにか必要な工事や道具があれば支給するとも」

「ハ、畏まりました」

森の出入り口付近ではすぐに第三者に見つかる可能性があるのです、おれたち畑開墾部隊の一行は徒歩で奥地を目指して進んでいく。

なぜ騎乗魔獣を使っているのに徒歩なのかと言えばプーレに土壤を観察させながら進むためだ。土を確認しては歩を進めるプーレの左右をシモベたちが警護し、その後ろをフェンリルに二尻したアウラとおれ、そして最後尾についたエントマと続いておれたちはぞろぞろと進んでいく。

…これは余談だが、土壤の確認をしながら歩いているプーレの姿はまさに餌を探している鶏としか言いようがなかった。ときどき「コーツ、コツコツコ」と鳴き声が聞こえ

るのが余計にそう思わせる。ファーマーではなくファームされる側の家畜にしか見えない。

「土壌は悪くありません。とくべつな種はともかくとして、ナザリックでも作っている植物や野菜は育てることはできそうです」

「そうか」

揺れる腿肉を見て照り焼きにしたら絶対うまいと考えているところに振り向いて報告してきたプーレにうなずいてから、おれはぼんやりと意識をさ迷わせる。この調子ならば森の奥にたどり着くころには夕方になっていてもおかしくない。レアアイテムの気配があれば気合の入れようも違うだろうが、こんな森林の中ではそれも望み薄だろう。これは退屈な一日になりそうだと、思っていたのだけれど。

ばうばうと犬の吠えるような声が聞こえてまどろんでいた意識が引き戻される。

「こけツ」とプーレが引き攀つたような声をあげておれたちの隣まで下がってきたけれど、他のメンバーが動じる様子はまるでなかった。姿が見えないのでスキルで相手との力量差を測ることもできないが、ナザリックの面々には歯牙にもかけない相手なのだろう。

「賑やかだな」

「…反応が二つあるので、魔物が狩りの最中なんだと思います。…シユヴァイン様が不愉快に感じられるのでしたら殺して静かにさせますが?」

「そうだな…、…ん、いや待て」

「電気消します?」くらいの気軽さでアウラが言うものだから適当にうなずいてしまうところだった。やはり彼女もナザリックの子、略してナザっ子。あの弟にしてこの姉あり、とんでもない過激派である。

「いやそれには及ばないとも。ほんの少し興味をひかれただけだ」

悪即斬も二度見する素早さで行動を起こしそうなアウラの意識をそらすために適当なことを言ってみた。嘘です。興味なんて毛ほどもないです。ただこう言っておけば「じゃあ別に殺す必要もないですよね」くらいに考えてくれるだろうと思つての発言だ。

「はい! かしこまりました! …: エントマ!」

「はっ、すぐにお持ちいたします」

「え」

思わずエントマのいるほうを見たけれどもすでに彼女はそこにはいなかった。

そうしてたいした時間も置かずにぎやうん! とかぐおん! とか野太い野犬の声であるはずなのにいやに悲壮感の漂う鳴き声が聞こえて、エントマの右手に首根っこをつかまれた大きな犬がおれの前まで引きずられてきた。左手には同じように人型のな

にかを連れている。

なんてこった。

想定していた展開からななめに直進されたおれが言葉を失っていると、エントマは「ほらあ、至高の御方の御前なんだからあ」と犬の首を真上から押さえつけてふせ（物理）を取らせる。

そうして左手でわしづかんでいた人型——ゴブリンのようだ——に目配せをして地面に両膝をつかせた。

ゴブリンがぶるぶる震えて大人しくエントマの指示に従った側ら、大きな犬は押さえつけられながらもなんとか逃げようと身体をよじっていたが、瞬間、石化したように動きが止まる。フェンリルから降りたアウラがそつとその背中を撫でたのだ。

「いい子ねえ、当然よねえ、至高の御方の御前だもんねえ」

アウラさんまじ調教師^{テイマー}。

見せつけられた上位者の貫録におれもお利口にしていたほうがいいだろうかと思つたが、さあどうぞと言わんばかりに振り向かれたのでなにもしないというわけにはいかない。

調教師様に負けない支配者（C）の威厳を保つためにもゆつたりとした動作で伏せる犬とゴブリンを見比べて、やつとの思いで口を開いた。

「この犬の獲物は貴様か。どこから来た」

ゴブリンはわかりやすく肩をびくりと震わせて恐る恐るこちらを見る。視界の左右にアウラとエントマ、その間に異形のシモベが立ち、人間ほどの大きさのある鶏が睨みをきかせて、自分を追いかけていたよりも大きい犬に跨った石化メドゥーサの蛇が話しかけてきたという状態なのだからそれはそれは恐ろしいだろう。

圧迫面接もかくやという状況に「おつ、お、れ…おれ…」とやつとしぼり出したという雰囲気の声が静まり返った森に響いた。

「ちよつとあんた、御方がご質問なさっているのよ！ はつきり言いなさいよ！」
「構わないともアウラ。おれは急いではいない」

「は、はい！」

…

質問に答えればここから生かして返すと約束しよう。

そんな契約をしてゴブリンから得た情報は「東の巨人」という存在に、このゴブリンの部族が住処を追われてきたということ。モモンガさんからも、外部での情報収集を行っているルプスレギナからも回ってきていない情報にはたと首を傾げる。そうして質問をいくつか重ねたものの、それ以上に有益な情報はこのゴブリンから聞き出すことはできなかつた。ならばこいつのほうはもう用済みだろう。

「シモベの一人はあれのあとを追え。追尾は悟られるな。接触も始末もしなくていい。居場所と今後の行動だけを報告しろ」

あのゴブリンがおれたちとの接触をどのように扱うかの保険をかけてから、今度は大人しくふせたままだった犬に視線を送った。

言葉が理解できるのかはわからないがけれども、東の巨人とおれたちと、どちらに従うべきかくらいは理解するだろう。

「東の巨人の元へ案内できるか」

くうんと一鳴きして犬が歩き出す。さて、退屈な一日の再開だ。

豚の蛇の退屈な日 その二

外で畑を開墾するうえで不安要素になるのは「フアーマーであるプーレが活動する際、なにもものに襲撃されないか。安全は保障されるか」という点に限る。

何度も言っている通り、ナザリックのNPCでも最弱の部類に入るプーレに戦闘をさせるというのは、その辺りで拾った棒で最終ダンジョンに挑ませるにも等しい行為なのだ。

能力だけでものを言うならPOPモンスターにも劣る可能性もあるプーレへ警護をつけるのは当然ながら、ある程度予測可能な問題は発生前に原因を潰しておきたい。

犬——悪霊犬バグエストに道案内をさせておれたちがたどり着いたのは、ひび割れた地面から地下へと続くようにできた洞窟だった。

アウラのほうを見ればうなずいたので「ここが話題の東の巨人とやらの住処で間違いないな」という確証を得る。ここからは相手が傘下に下るならよし。そうでなければ……まあそういうことになるだろう。

と、思っていた時期がわたしにもありました。

東の巨人と愉快な仲間たちの住処であろう洞窟の入り口を前にしておれの足は止ま

る。

理由はただ一つだけ。あたり一面から異様な匂いがするのだ。最初は空気系の罨や攻撃がしかけられたと思つて解除スキルを使用した^{リザードマン}が、匂いが掻き消える様子はない。

つまりこれは…単にこの洞窟が臭いということだろう。

…生理的に無理ですう。

腐敗した肉や清潔でない身体から匂うような悪臭に豚君の心は簡単に折れた。

ここにレアアイテムがあるなら、もしくは絶対^に侵入しなくてはならない仕事ならば、話は別だった。自分の身体が泥水にまみれようが、砂ぼこりで薄汚れようが、たとえ何千何万を虐殺する仕事だとしても、盗賊と暗殺者の職業持ちとして引き受けてみせますとも。

けれども今回は畑を探しに來ただけで悪臭ただよう洞窟へ強行突破することは微塵も想定していないのだ。無理です。勘弁してください。豚君は絶対嫌です。

蜥蜴人の集落の偵察のときには平気だっただろうという罵声がどこからか聞こえてきそうだが、そういうやつは冷静になつて考えろ。異臭と泥ではどう足掻いても迷惑度のレベルが違う。

泥は使いかたによっては道具にもなるけれど、異臭は匂いでしかないのだ。しかもひ

とを不愉快にさせる類いの。

ここまで遠足気分が出てきたのが間違이었다。

うーわー、やだあー、豚君ここから先に行きたくないー、ばっちい。

勿論声には出さなかつたけれども顔にはしつかり出ていたようで「ここにいるものたちがなにか不快なことを……！」とおれがうんともすんとも言わないうちに部下たちが動き出そうとする。

モモンガさんいわく鉄面皮に定評のある豚君がここまで嫌がるのだから、この異臭は「なんだか変な臭いしない？　もしかして……やだあさいてー」とかそういう程度では済まないことを察してほしい。おれが過剰に反応しすぎてる気がしないでもないが嫌なもの嫌なのだ。

そうしてそんな彼らをなんとか諫めてから、おれはアイテムボックスから道具を二つ、三つほど取り出したのであったた。

「ここであぶり出そう」

「服従させる件はよろしいのですか？」

「こちらとの実力差を見極められる能力があるならよし。憤怒することしかできないで襲いかかってくるような愚かものだったならば、ナザリックに入れてもしかたないだろう。……と、モモンガさんにも説明しよう」

「さすがです！ ナザリックのシモベに相応しいか、ふるいにかけるんですね！」
おんびん？ なにそれうまいの。

無臭効果のあるアイテムを準備してたら実行できたかもね。

モモンガさんにばれたらぶん殴られそうな作戦を頭の中で組み立てながら、取り出したアイテムの一つをシモベに手渡して洞窟の入り口の周辺にばら撒かせていく。アイテムの正体？ なんてことはない。森の一部を開拓するときには焼畑の必要があるならばと持ってきた火薬ですよ。

はいそして用意したものがこちらです。

部下たちが、ひいてはブルーレが七面鳥のようになるのを避けるためだいぶ後ろのほうに下からせてから、包囲効果のある魔法の巻物を発動させる。必要以上の大火事を起こすつもりも、ここで厄介な騒動を起こすつもりもないからこそその重要な対策だ。

そうして全員が安全圏にいることをもう一度確認してから、おれはもう一つ、ファイヤーボールへ火球の巻物を発動させた。

その途端に響き渡る轟音、燃え広がる灼熱。

包囲魔法の効果が及んでいる場所のはしのほうまで避難していたのに、生き物を一瞬で蒸発させそうなのその温度はすぐにおれのところまで這い寄ってきた。用意した火薬の量が多すぎたか。

自分の足元に「無限の水差し」の水を撒きながら、被害が最も甚大だろう洞窟の入り口のあたりを観察する。そこには燃えさかる木々に、焼けただれた大地と「ここが大焦熱地獄ですう」と紹介しても差し支えのない光景が広がっていた。

おっとお…これはもしかして森の外部まで爆発音が聞こえたんじやあなかるうか。モモンガさんに大目玉を食らう旗が数本立ってしまった気がする。包囲魔法はダメージとなるものならば全て遮断してくれるけれども、音量についてはなんの働きもしてくれないのだ。

やはりど素人が火薬をいじくるべきではない。こうしてとんでもないことが発生するのでよい子は真似したらだめだぞ（はあと）

つまりなにか言いたいのかと言えはおとなしく悪臭ただよう洞窟に挑むべきだった、かもしれない。それでもおれは入りたくない。それでもぼくはやってない…。

「シユヴァイン様、ご無事ですか!」

「ああ、なんの問題もないとも。それよりもアウラ、潰れた洞窟の下にはどれくらいの生き残りがいるかわかるか」

「洞窟の中の生き残りは…、…二匹ですね。その他の生き物は間違いなく死にました」

「ええ…? …やりすぎたと思うか?」

「そんなことはありえないです! 至高の御方のすることに間違いなんてありませんよ

!

おれの計算ならば死者は半数くらいで済むはずだったんだけども。

範囲魔法が解除されて駆け寄ってきてくれたアウラの過言でしかない言葉に眩暈を覚えつつ、そうして焼け野原へとすがたを変えた場所を観察していると、地面がむくりとふくれて地面からトロールとナーガが生えてきた。

いや、この場合は生えてきたと言うよりも、命からがら這い出てきたと言ったほうが正しいか。

反省も後悔もしてはいないが、悪いことをしたとは思おう。

この状況を嘔み砕いて説明すれば自宅でくつろいでいたら爆発が起こつて家が潰れたというものなのだから。それが人為的に起こされたとなつては、まあこうなるだろう。

「貴様かあああ！」

Q：トロールが襲いかかってきた！ 攻撃しますか？

悪いことをしたなと思うけれど、反省も後悔もしてないので答えは「はい」一択である。

おれと視線がかち合った途端、トロールのほうが拳を振りあげ襲いかかってきた。だいたいわかってた。おれも自宅を爆破されるような状況に放り込まれたらほぼ同じ反

応をするだろう。

誰だつてそうする、おれもそうする。

襲いかかってきたトロールの一撃をかわして使い捨ての毒針を放つ。毒針が眼球に命中してのたうち回るでかぶつはさておき、すぐさま不可視化で逃走をはかったナーガの尾を踏んだ。

「ひい……」

「聞きたいことがある」

「なんでも、なんでもお話いたします！ どうか命だけは！」

がたがたぶるぶると震えるナーガに戦意はないらしい。

上半身が人間なのでおれの理解できる言葉が通じてよかった。これで蛇語を話されたらあのでかぶつに翻訳してもらはなくてはいけないところだ。頭部に蛇が生えていてもおれはバイリンガルでもなんでもないので、翻訳もしくは肉体言語で語り合わなければならぬところだった。

×××

異臭がする。

めらめらと燃える肉の塊から発生しているその匂いは、大気汚染の排ガスよりも身体によろしくないような気がする。精神衛生的には間違はなくよろしくないものだ。まあ洞窟の中からだだよってきていたものと比較すればまだましなほうだ。

その正体は目に刺さった毒針を引っこ抜いて勇猛果敢にも再度襲いかかってきたトロールの死体から発生しているものである。ちなみに制裁を下したのはおれではないです。

眼球に刺さった毒針を引き抜いて「この、小僧めがあッ！」と東の巨人は立ち直った。喚きながら振りあげた拳が鞭に取られて巨体が倒れ、そうして「フェン」と呼んだ主人の声に答えずんぐりとした頭部が噛み砕かれるまでおおよそ三秒足らずの流れでありました。アウラさん、まじ世界で一番調教師。

そうして息絶えたトロールの身体を焼いて灰にして肥料として利用するとプーレが言い出したものだから、こうして直火であぶっているわけだ。

「じゃあこの辺りにお前たち以上の強者はいないわけか」

「は、はい…あの滅びの建物の主人であるお方があなた様である以上、それ以上に強大な存在はいないかと思われませぬ…」

「正確にはおれ一人じゃあない。もう一人の主人がいることを忘れずに発言しろ」

「はい！ 申し訳ありませんッ！」

西の魔蛇と呼ばれているらしいナーガの爺さんは先程の凄惨な光景を思い出しているのか、おれとアウラとフェンリルの顔を見比べてはびくびくとしている。ここだけの話だが、おれも内心びくびくしている。アウラさんまじ調教師。

しかし視線が合うとそれはもう嬉しそうに笑うし、フェンリルも尻尾を振るので、自分に無害なものだとわかるとやはり「よおしよしよし」としてやりたくなるのは親戚の子供が多いおっさんの悲しい習性である。いい子にはおじさんがお菓子あげようねえ。けれどもまずは最初の目的を達成させるべきだろう。

「とりあえずここに畑を開墾しようか。地下に死体がごまんとあるんだ。肥料にもなるだろう」

その辺りは豚君のお仕事とは完全に畑違いなので専門家のかたにおまかせしようと思えます。

「よろしく頼むぞ、プーレ」

「おまかせください！ シュヴァイン様！」

ある薬師の語る英雄譚

二つの条件とはなんだっただのだろうか。

あのとときの英雄の言葉が、今でも気にならないと言えば嘘になる。

しかしそれを懸命に考えたところで自分がその条件を満たすことができているのならば、どうしようもないことだ。

自分にそう言い聞かせてからインフィーレア・バレアレは額に浮いた汗を拭い、集めた薬草を数え直した。

インフィーレアが「漆黒」と「漆黒の剣」の、二つの冒険者チームとともにカルネ村へ足を運び、薬草の採取を行ったあの日からずいぶん時間が経った。

実際はそれほど時間は経っていないのかもしれないけれども、それほどまでにインフィーレアにとってあの赤いポジションとの遭遇、そして彼との出会いはとても大きなできごとだった。

漆黒の戦士モモンは——アインズ・ウール・ゴウンは偉大な人物である。マジックキャスター魔法詠唱者としても剣士としても優れた人物であり、危機に瀕した村にすぐさま手を差し伸べてやのような義侠心を持った存在。それがインフィーレアの中にあるその人物に対する感想

だった。

そんな人物の元で魔法を学べたなら、なにか役立てるような人間になれたなら、どれほど素晴らしいことだろうか。

そんな結局は自分自身のためでしかない願望に自嘲しつつも、むしろできないことが救いなのかもしれないとンフィーレアは考える。この卑しい考えはきつと時間がすすいでくれるだろう。

あの「神の血」を祖母と自分の手で作りあげるためにンフィーレアとリイジーはカルネ村へと越してきたのだ。

エ・ランテルで起きたアンデッド大量発生的事件で安全を考えて、というのはバレアレ治療店の移動を惜しむ冒険者たちに対する言い訳にすぎない。

より迅速に薬草を入手し、これまでよりも調査や研究に勤しむための時間を確保するため、移動の時間をできるだけ削る。それがまず、赤いポーションの実在を知ったバレアレ家の人間たちが取った行動だった。

そうして数え終わった薬草を全てかごに戻し終わったところで、少し離れた場所と同じように薬草を集めていたエンリが声をかけてきた。

「もうそろそろ村に戻ったほうがいいって、カイジャリさんが」

戻るには少しばかり早いのではないかと思わなくもないが、森はすでに人間の領域で

はない。護衛をする彼らにもなにか思うところがあるのだろう。

もう一度採取をしに来る時間が惜しいと思う気持ちはあったが、こちらが守られている立場である以上、そして無理を言つて薬草採取に森まで連れてきてもらつて以上は、彼らの判断に従うべきである。無理な主張をそこまで押し通すつもりもなく、ンファイレアはエンリの言葉にうなずいた。

けれども手についた薬草の汁を拭いつつエンリに近寄ろうとしたところで、不意にゴブリンのうちの誰かが「静かに」と指示を入れた。途端、空気に緊張が走る。

注意深く周囲の様子を観察しているとなにかが草木を揺らしているような音が聞こえて、それはこちらに接近してきていることがわかった。

禽獣か、それとも魔物の類いか。

ゴ布林たちは各々の武器を構えて一同に息を殺してその音源に耳をかたむける。そうしていくばくかの時間が過ぎて、やがて草むらから現れたのは、息を切らして走る一人のゴ布林の子供だった。

子供の姿を認識して「まぎらわしい」とゴゴウがうんざりしたように呟いたけれども、その声色はけていて気を抜いてはいない。ゴ布林の子供のその険しい表情と、一瞬後ろを振り向いては走るその仕草は「なにものかに追われている」という証明に他ならないからだ。

息も絶え絶えながら懸命に足を動かすその様子にエンリが思わず声をかけようとしたけれど、そのあとに追跡者がいると考慮したカイジャリが制止をかける。

そうして何度も後ろを振り向きながら足を動かし、木陰に隠れているエンリたちの目の前を通り過ぎて、やがて次の草むらに逃げ込もうとしたところで転倒した子供の背中を見送った。あの子供はここまで来るのにそれほど距離を走り続けてきたということだろう。

倒れた背中を見送ったエンリが子供が倒れた草むらと、ゴ布林たちの顔とを交互に見る。きつとすぐにでも手を差し伸べたいのだ。

そうしてどれくらいの間が経過したのか。

数秒のような気がするし、あるいは数分は経過したのかもしれない。

追跡者がいるかもしれないという恐怖がファイレーアの身体を抑えつけていた。

それでも追跡者の存在が現れないことを確認したところで、カイジャリが動いてもいいと指示を出した。

ゴ布林たちが各自の武器を構えたまま周囲を警戒しつつ、子供のゴ布林が倒れた草むらに近寄ると、子供はなんとか這いつくばって先へ先へと逃げているところだった。どうやら転んだ拍子に足を痛めたらしい。もしも追跡者がいるなら進行速度は絶望的だろう。

「あ、あの……！」

「うわああああッ！」

「あつ、ごめ、違うの！」

エンリが話しかけた途端にゴブリンの子供が絶叫した。おそらく追跡者が来たと思つたのだ。エンリが慌てて謝りながら弁解した。

：

子供はアークと名乗つた。

エンリが声をかけたことで恐慌状態におちいつたアークを強制的に引き戻したのはウンライのげんこつだったが、同族がいること、エンリたちに攻撃意思が見られないこと、追跡者は今のところいないようだということがアークを少し落ち着かせたらしい。

そうして少しばかり持つてきていたポーションを与えながらながあつたのかとンファイレアが尋ねれば「怪物が現れた」とアークは言つた。どういふことかと追つて尋ねたが、アークはがたがたと震えてそれ以上を話そうとしない。

ゴブリンたちが「二、三回どついで吐かせよう」と物騒なことを言つたが、それよりも一度落ち着ける場所に行つたほうがいいだろうとエンリがそれを制した。

「連れていくんですかい？ 本当に？」

追跡者がアークの匂いなどを追つて村にやってくるのを危惧しているのだとわかっ

たが、やはりエンリは首を縦に振った。

そのとき、耳を割るような爆音が響いた。

ンファイレアはとっさにエンリの腕を引いてかばい、そんな二人をかばうようにしてゴブリンたちが周囲を囲む。その音源は森の奥地——アークがやってきた方向だ。

色濃い警戒が再び一同を包み込んだが、不思議なことに音量に見合うような爆風に叩かれることはなく、煙もない。地面に伏せた状態から恐る恐る顔を上げたが、爆音は一度鳴ったきりで、それ以上は変化が起きた様子もなかった。

「なんだあ、今のは……」

「わからない」

カイジャリの言葉にンファイレアは首を振る。けれど森でなにかが起きていることは確かだ。アークの言う「怪物」というのも気になる。やはり、まずは安全な場所に移動しなければならぬとンファイレアは告げた。

「そうだね………あ、あの……ンファイ……悪いんだけど、その」

「え、ツ……うわあ！　ぐ、ごめん、エンリ！」

ンファイレアの言葉に同意したあとにエンリは居心地悪そうに、気まずそうに声をかける。

なにごとかとエンリのほうに視線をやれば、とっさにかばうためとはいえンファイレ

アはエンリを押し倒したような状況におちいつていた。

慌てて離れたけれど、ゴ布林たちは「さすが!」「ひゅー!」と茶々を入れる。

そうして赤面しながらも二人は早く村に帰ろうと荷物を抱えたのであった。

×××

ンファイレアに背負われて——ゴ布林たちは本人に歩かせるか、自分が背負うと言ったが、護衛の数を割くわけにもいかないと言った。ンファイレアが請け負った——アーク含む一同はカルネ村まで戻ってきた。

ゴ布林たち、ひいてはアインズ・ウール・ゴウンが助力してくれたおかげで困いことができ、以前の村と比較すればかなり堅牢になったと言える場所だ。最近ではバレアレ治癒薬店が店舗を移動させたためそれを目当てに足を運んでくる一部の冒険者も存在する。

門をくぐって帰還してきたンファイレアに森の爆音を聞いた村人たちがなにかあったと尋ねてきたが、当然答えられるはずもない。できれば村長を呼んできてほしいという旨だけを伝えて、ゴ布林たちが生活する大きな家屋に足を運んだ。

そこでポーションでは治癒しきれなかった傷の手当てを行い、気持ちを落ち着けるた

めに白湯を飲ませて、ンフィーレアはアークが自分から話し出すのを待った。やがてアークがぼつりぼつりと語り始めたのは、自分が「東の巨人」の手の者に追われていたということ。そして第三者が、得体の知れない「怪物」が現れたということだった。

東の巨人という存在をそもそも知らなかったエンリたちからすれば寝耳に水の話だが、その存在が南の大魔獣——漆黒の冒険者モモンの連れたハムスケと同等の強さを持つというのだからことの重大さが深刻になる。

これまで保たれていた三すくみを「滅びの建物」という存在が崩し、それを討つために残りの二匹が手を組んだ。その使い捨ての兵士としてアークたちのようなゴブリンが集められた。その非情な待遇から逃れてきて、東の巨人たちの手の者に襲われて、そして。

「怪物が現れた」

見たことも聞いたこともない怪物だったとアークは震えながら語った。

それは、アークが命からがら逃げていた悪霊犬バグストを容易く捕らえ、従わせ、そうしてアークに尋ねたのだという。東の巨人について知った怪物はそのまま森の奥地へと向かったそうだ。

「お前たちのような人間みたいな背格好だったけど、髪の毛が蛇で、何匹も魔物を従えていた」

怪物本人もそうだが、部下の一匹一匹も恐ろしく強いだろうという言葉に誰もが息を飲む。

爆発音の原因がその怪物ならば目的はなんなのか。怪物もまた、その滅びの建物とやらを討つためにやってきたのか。

いずれにしろ東の巨人たちも、怪物も、ンファイレアたちだけで対処できる相手ではないだろう。むしろ南の大魔獣の名前が出てくるといふ時点で、並大抵の冒険者ですら太刀打ちできないことは想像に難くない。ならば自分たちにとって頼れる相手はただ一人だけだ。

「この問題は、冒険者に依頼をしたほうがいいかもしれない」

ンファイレアの頭には「英雄」という言葉がふさわしい冒険者の姿が浮かび上がっていた。